設

27

21052
505-48

宮崎湖山

吳本勢著　校訂

近松門左衛門全集

第三卷

東京　冨山房發行

大正
12. 6. 18
購求

はしがき

本卷には第二卷に引續いて、元祿十一年から同十五年迄、卽ち作者が四十六歲から五十歲迄の作、淨瑠璃九篇、歌舞伎狂言五篇、合せて十四篇を收めた。

卷頭の一心五戒魂は第一卷の末に載せた戀塚物語の改作らしい。安永板の外題年鑑には、貞享二年に竹本座で之を演じたことにしてある。しかし校訂者はまだ其の當時の作と認むべき正本に接しない。本卷に收めたものは、文中に元祿十一年の干支を明かに示してあり、作の結構と筆致とが、如何にも此の頃の作らしく思はせるものである。外題年鑑の竹本座元祿十五年の條に「新一心五戒魂」とあるのは蓋しこれと同物であらう。翌十六年に宇治加賀掾の正本「一心五戒魂」が出たが、それは本卷に收めたものと全く同一文章に成る。

蓬藏大黑柱はまだ覆刻されたことのない歌舞伎狂言本である。相變らずの御家騷動物だが、珍しくも遊女が出ず、意外に意外が重つて行つて、めでたし〳〵に終る作である。

下關猫魔達、これも活字になつたことのない淨瑠璃で、加賀掾の語つたものである。正本の卷首に近松門左衞門添削とあるだけで、原作者も刊行年代も明かでない。但其の作柄と板式と

から推測すると、彼の猫の所作を出してゐる傾城富士見る里と時代同のものではないかと思ふ。

天鼓は早く井上播磨掾の語物外題中に見えてゐるが(外題年鑑)校訂者はまだ其の正本を見ない。見たのは、竹本筑後掾の奥書のあるもので、それには文中に元祿十四年刊行の明證がある。但しこれと略同一の文に成る加賀掾の正本に「丹州千年狐」と題するものがあつて、これは元祿十二年の板行らしく、其の大團圓に役の行者の千百年忌を當込んである。筑後掾のは此の一節を略したものと認める。本卷にはいひまはしに無理のない筑後掾の正本を採つた。兩者の異同は序卷に委しい。

主馬判官盛久は竹本筑後掾の正本を採用した。これには幾本かあつて、十行三十一丁本と十行五十丁本とは全く同文であるが、十行三十丁本は前二者と大いに異つて、加賀掾の正本「盛久」と同文である。恐らくは加賀掾のが原作で、筑後掾のは後に加筆したのであらうが、これはまだ覆刻されてゐないので、特に之を收めることにした。差異の委しいことはやはり序卷にある。

大正十一年七月

校訂者しるす

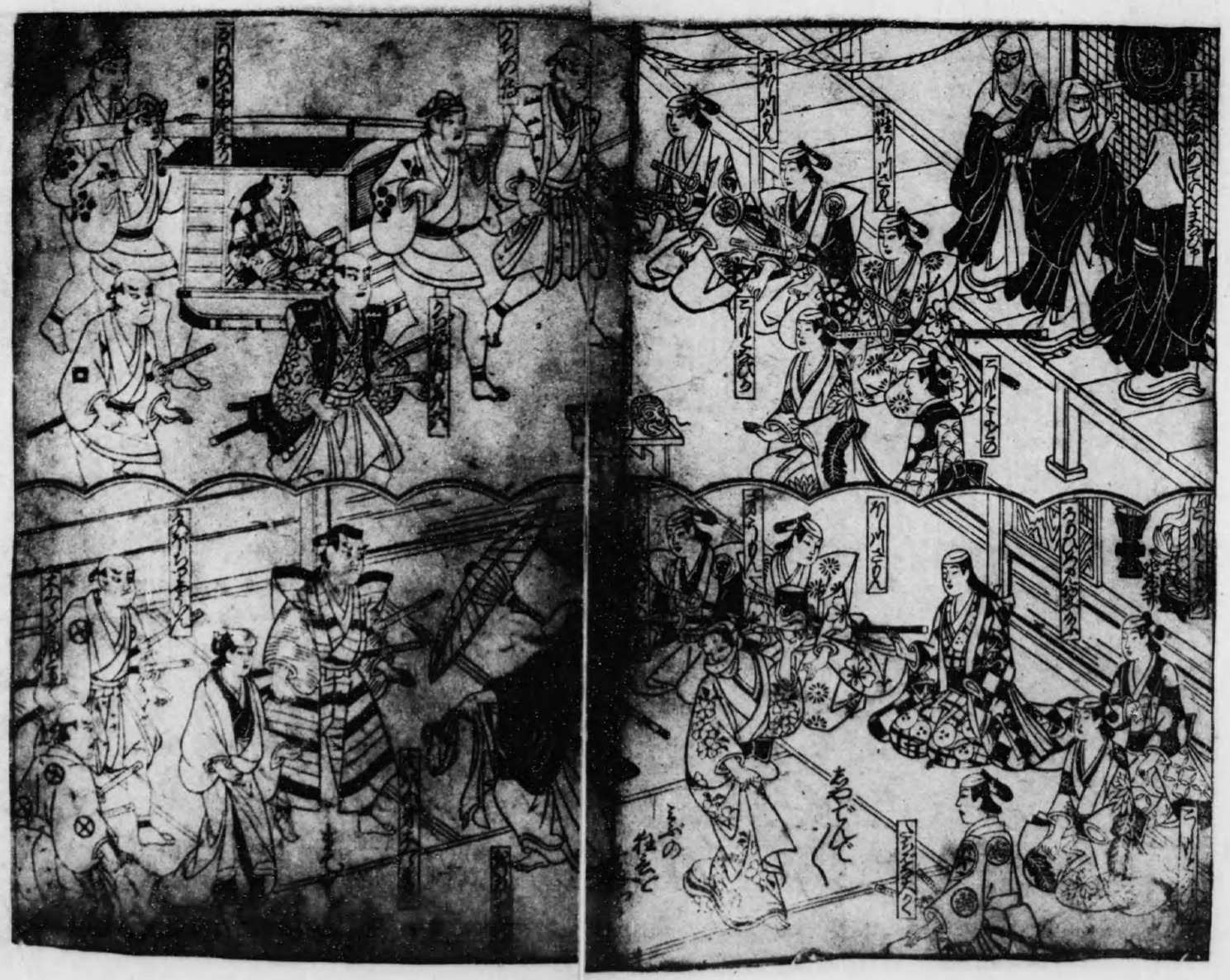
近松門左衛門全集

第三卷　目次

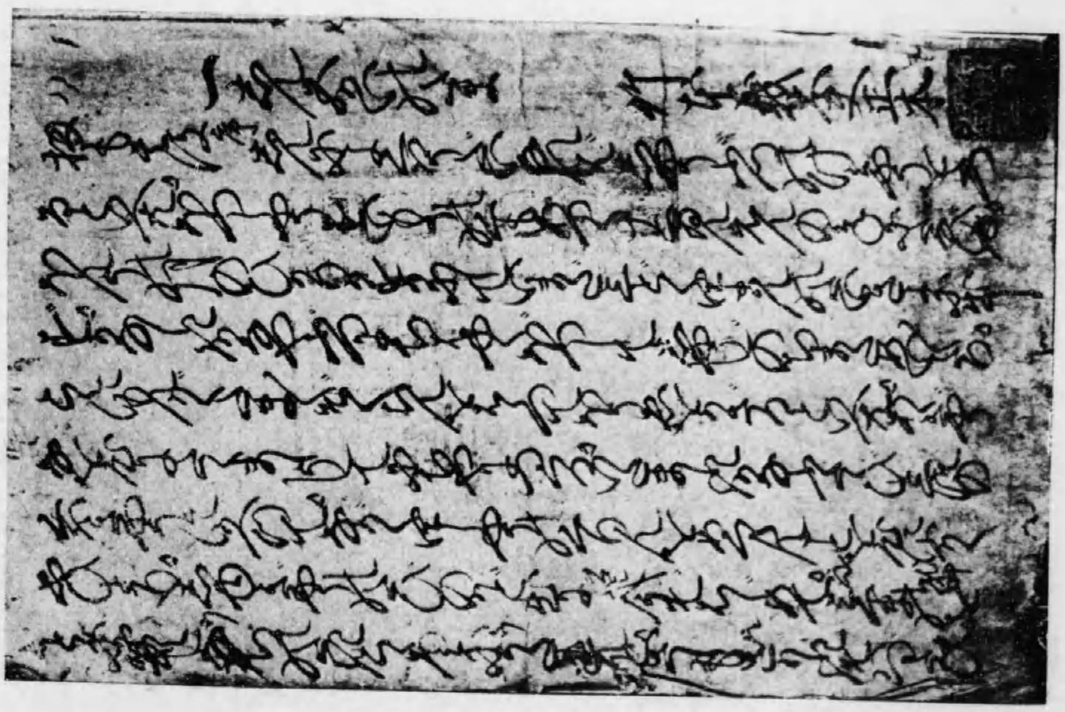
目次

一　一心五戒魂（浄瑠璃　元祿十一年刊）……一
二　傾城佛の原（歌舞伎狂言本　元祿十二年刊）……六四
三　阿彌陀が池新寺町（同上　同　年刊）……一〇二
四　浦島年代記（浄瑠璃　元祿十三年刊）……一三八
五　姫藏大黒柱（歌舞伎狂言本　刊年未詳刊）……一七四
六　傾城富士見里（同上　元祿十四年刊）……二二八
七　猫魔達（浄瑠璃　刊年未詳）……二四五
八　蟬丸（同上　元祿十四年刊）……二六三

九　天鼓（浄瑠璃　元祿十四年刊）……三三二
一〇　曾我五人兄弟（同上　同　年刊）……三六八
一一　大磯虎稚物語（同上　元祿十五年刊）……四三二
一二　賀古教信七墓廻（同上　同　年刊）……四七一
一三　傾城壬生大念佛（歌舞伎狂言本　同　年刊）……五三一
一四　主馬判官盛久（浄瑠璃　刊年未詳）……五九〇



傾城壬生大念佛挿絵



一心五戒魂

（八行六十二丁本。十・十一行四十一丁本參照）

竹本義太夫正本

扨も其の後序眞如廣大なれば生佛の假名を斷つるといへども。法性隨妄の雲厚く十二因緣の峰にたなびき。本有の月の光かすかにしていまだ三毒四慢の大虛に出でず。悲しきかなや佛日早く沒して生死のちまた冥々たり。玆に文覺たま〳〵俗塵をはらつて法衣を飾るといへども。惡行猶心に逞しうして日夜に作る。いたましきかな二度三途の火坑に歸つて。永く四生の苦輪を廻らんことを心に深く思ひ取り。修行の旅の門出にオロシヘ今ぞはじめて。三熊野の。地音に聞えし那智の瀧試みに打たれんと。さしもさがしき岨づたひ。搖々浮萍の歩みしてフシ瀧本。にこそ着かれけれ。頃は臘月十日餘り。谷の小川も音絶えて。風さへ氷る瀧の絲。フシつら〻流れて。萬仞の。劍をふらす如くなり。地されども文覺事ともせず着たる衣裳をかしこに捨て。瀧壺に下りひたりオクリ首だけへづぶとフシ身をつけて。地慈救の呪文を唱へつゝ二三日迄たぢ

ろかず。五日と覺しき暮方に少し精氣や劣りけん。覺えずふつと浮上ればなじかは以て堪るべき。矢を射る如く數千丈みなぎり落つる岩角の。中行く水にさつ〳〵と浮きぬ沈みぬ〳〵流れけり。フシ斯る危き。地折節角髪結うたる天童忽然と下來あり。文覺の手を取り岩の上にそつと置き。微妙淨音あざやかに如何に此の山の人民ども。詞大願力の荒ひじり文覺を供養して。地二世安樂の結緣せよと。夕日の影ともろ共にフシ消えて。形はなかりける。此の告にもよほされ近所にありあふ山人等。我も〳〵と集まりまづ〳〵焚火にあてんとて。臥具當藥を口に入れ樣樣といたはれば。スエテ息ざしすこし出でにけり。地すはやと人々力を得種々に看病する所に。文覺むく〳〵と起き兩の眼をくわつと見開き大音上げて。詞ヤヽ我この瀧壺に三七日うたれ。慈救の三洛叉を滿てうと思ふ大願あるに。今日はわづか五日にこそなれまだ七日にも過ぎざるに。地さまたげをなす腹立ちやと着せたる臥具を取つて捨て。走り出づるを人々おしとめ。詞ハテサテ行も命のあつてこそ。地平に無用ととどむるを捻ぢあひ張りあひ攝みあひ。フシ又水中に入りければ。地さてもしぶとき法師かな必定今度は死すべきに。我が身を知らぬ無分別イヤ本氣でよもあらじ。氣ちがひさうな構ふなと フシ皆々住家へ歸りけり。地されども人の云ふ事

を松のあらしとよそに聞き。一心不亂に行ひしが第三日の明方に。五體もすくみ悶絶しつひに果敢なくなりにけり。時に一山鳴動して文覺の胸中より。五色の魂びやう〳〵と空中に飛び上り。四方に離散し失せにける中にも青色の玉一つ。空にあくがれ行く跡の一筋白くたなびきて。又消え〳〵となりにけり是ぞ五つのかり物の。水は水土は土にとかへせども。元より大日覺王の分身なりとさとすれば。かりにその身は消ゆるとも末の闇路に光添ふ。五つの玉の置き所實に賴もしくぞ三重〳〵見えにける。フシ山は都の。方垂れて。峰高からず岩木まで優美なれども人心。戀の山路のさかしきに。登り詰めてはおり兼ぬる。闇はあやなし。梅の花。年の内には人知らぬ フシ色こそ戀の蕾なれ。地されば其の頃按察使大納言資方卿の御息女。かをる姫と申せしは品かたち世に優れ。閨窓深くかしづかれスエテ用意ゆかしくおはせしが。地心に深き願あつて清水寺の觀世音。能救の誓ひたすらに忍びて詣でたまひしに。頃まだ冬の空ながらたまたま春の景色だつ。梅の梢もほのかなる。日和につれて思はずも フシ鳥邊の山に分け迷ひ。地あたりを見れば忌はしや亡きを標の高卒塔婆。いぶせき煙立ちのぼり物怖ろしくハア是は。ひよんな所へ來りしと立歸らんとし給へば。向ふの峰の木の間より青色の玉ふは〳〵と風に浮

かれて飛來り。とある茂みの笹原をふつと分けてぞ入りにける。姫君はつと心消え覺えず土に手をついて。スエテ樣子を窺ひ見給へば。地不思議やくだんの笹原より十五六なる大兒の。振分髪の肩過ぎて四方を見はらしずんど立ち。小鳥をよする口笛をさも面白く吹鳴らせば。木々に囀る百鳥のおのが友々呼連れてあさる。景色の。三重〳〵面白や　フシ罪も報いも。地後の世もありとは聞けど忘草。忍び音に泣く羽拔鳥羽子にさゝれて鳥黐に。己れとまどひ苦し氣にはたりはたりと音するを。取つては締付け捻殺し提げたる籠に數へ入れ。心地よげに打笑みて　オクリ靜に〳〵歩み行跡を　フシせめて便りと。地姫君は後に付き添ふおもかげを兒振返り。詞ヤアこゝなる上臈は。何の用ばしあつて我が方へは來らるゝやと言へば。さればとよみづからは大切成りし願あつて。清水の觀音へ日毎に參り候が。地今日しも此所へ思はずもふみまよひ。人目もかれて恐ろしく跡へも先へも行く道を。いづこと分きかね候とスエテ打しをたれて語らるゝ。詞兒つくづくと聞きさてはそなたには。願參りの折から途に迷ひ給ふとやそれに付き。我も心に深き願あつて。此の樣に狩殺生をし山神を祀るなれば。地思ひは以て同じこと幸ひ拙者が住所。暫らく御休み候て心靜かに佛詣あれ。先づ此方へと案内して行く道すがら四方山の。話に心打ちとけ

てイヤなうお兒樣。詞最前向ふの峰より。青き玉の飛來り草原に落ちると見し。其の跡よりお主樣の御出でありしが。先づ其の玉は如何なる物にや御覽候かとあれば。イヤ拙者は兒申さず候が。定めて夫は人魂にてや候らん。總じて此の山は死人を送る所なれば。左樣の物は再再ある事珍しからずといひければ。地かほる姫ぞつとしてアヽこはやと抱付けば。詞コハ臆病千萬や。地とかういふ間に我が庵いざさせ給へと枝折戸をフシあけて内にぞ請じける。地茅葺き渡す軒のつま猪猿貉いろ〳〵の。大鳥小鳥懸並べ床には丸木の大弓に。矢の根磨いて立てたりけり姫君見るから恐ろしく。座にも居られずうろ〳〵と興醒たりし顔はせを。主人きつと見て察するところ上臈は。詞見慣れぬ體にて氣遣ひし給ふと覺えたり。些とも苦しからず某が心底殘らず明し申すべし。シテ先づそなたの願は如何樣のお望みぞ。ともぐ〳〵談合に乘り力をそへ進ぜんに。さあ〳〵ちと語りたまへと睦ましく問ひければ。されば候みづからは。按察使大納言資方卿の獨り姫薫と申す者なるが。地さいつころ清水寺へ參詣申せし折から。袈裟御前と聞えし御方を。輿のひまより垣間見し其の面影を忘られず。寢ては夢覺めては現、幻の。身にひし〳〵と付き添ひ忘るゝ暇も涙川。深き戀路のやる瀬なくせめては一夜の枕なりとも。かは

させてたび給へと日毎に參詣申すなり。哀と思し給はれと フシさめ〴〵。泣いてぞ語らるゝ。
詞あるじ聽いて扨も不思議の事を聞くものかな。なう其の袈裟御前と我はさし渡しての從弟同士。遠藤左近の將監持遠と申せし者の子虎若とは我が事なり。幼稚の古へ其の袈裟御前とは。夫婦になすべしとの許嫁ありけれど。惡黨者とて十歳の頃筑紫に追下され。其の間に父將監は世を去り給ふ。地田舍住居も物憂くてひそかに登り此の山に隱れ居て。何とがなして父が遺跡再び武家の本懷を達せんと。存じつめて候と語る詞に薫姫。顔打ち赤め扨は左樣に袈裟御前と。よしみある御中と知らで語りし我が思ひ。かへす〴〵も フシはづかしや。それにつけてもおぬし樣はアノ美しき袈裟御前の。花の盛を見捨てつゝ久々他國に在ますは。ほんに無氣なる御方やと。うらやましけにのたまへば虎若聞きもあへず。詞イヤ〳〵左樣に色めいたる女の事は誓文白癩聞くも中々 地けがらはしと。顔打振つて言ひければ。ムゝすれば袈裟御前の御事は。詞ふつうにお嫌ひ候とやヲゝお嬉しや。地然らば此の上は何卒してみづからが。戀の叶ふ樣に肝いりて給はらば。生々世々の御恩ぞと他事なく頼み申さるゝ虎若眉を顰め。詞イヤこれ薫姫。其方の最前より宣ふこと拙者はかつて心得ず。そもや〳〵女が女に戀して。かんじんの事はハ

レ 地やくたいもない人やとて。 フシ腹筋よつてぞ笑ひける。 地姫君さらぬ顔色にてハテとくとするゑ〴〵の。分別をも聞き分けず氣の短い御方や。總じて神佛を祈るには叶はぬ事を頼めばこそ。身を擲ちて願ふなり。然れば法華の功德には八歳の龍女も變生男子の奇特あり。然れどもそれは悟りて佛に成り。永々しき樂しみ廻り遠く思ふなり。實にや大悲の誓には枯れたる木に花咲くと。頼みを懸けて自らが此の身ながら男になさしめ給はれと。願ふ誠の成就せば隨分と身を盡し。袈裟御前と一夜の枕かはさん事。是本望に候と フシくどき立て宣へば。 地虎若興醒め默然としてゐたりしが。イヤ〳〵斯樣に思詰めたる女心いひ消さんもよしなしと。よい程に挨拶しさあらぬ體にて邊を見廻し。ヤア幸ひの物こそあれと。床に置いたる遠目鏡を取出し。
詞是は此所よりゐながら都の名所を見る。 地平生の樂みちと御覽もやと差出せば。誠に是は珍しゝそれ此方へと手に取つて。先づ目に懸る白雲の雪かと。まがふ。高根こそ。アレあれ比叡の山ならん。麓の里の冬木立。とう〳〵として薪樵る。小野の炭竈。細々と。煙も絶えて。見え分かぬ年の寒きにこと草の。萎むにおくれ色かへぬ。松が崎より。打續く。杜の一叢かうかうと木綿しでかざる加茂川や。遠里人の。歩行渡り牛の綱手を。曳く賤の。幽に映る其の景色。

繪にも及ばぬ風情なり。左の方は大内の。玉しく庭のきら〻かに三つ葉四つ葉の殿作り。檜皮に續く東屋にやり渡したる長廊下。さも美しき上萬の。靜かに歩むとりなりの。あつた物ではござんせぬ。地コレハならぬと虎若目鏡うけとり。暫し見とれそゞろ顫うて。扨も〳〵世の中にかゝる美人もあるものか。とても夫婦となるならば斯樣な人と添ひてこそ。今生の思出ならん抑も誰人の御息女ぞ。いづかたの御所ならんと。魂を奪はれて フシそゞろになつてぞ見惚れける。地姫君背中をほと〻叩き。詞コレハまあ何としたる御風情。先程迄は女は見る目も汚らはしと。誓文立てて宣ひしお言葉とは違うたり。地ちと妾にも見せ給へと宣ふ言葉も聽入れず。詞ア、忙しない今が大事の所ぢや。彼の東屋はあらう事の。湯殿と見えて美しい女が肌をあらはして湯へ入るは。扨も〳〵うまいこと。そりや湯から上萬が上られてしやらり〳〵と歩まる〻ハァあなたの座敷から若い男が戸を明けて。浴衣ごしに抱きついて何やら物を云ふさうな。地ハァ聽きたい事かなと目鏡を耳に押しあつればハテ譯もない。遠く見ゆる目鏡なりとも耳に當て〻音なひが。聞ゆることのあるものか最早些と貸したまへと。姫君受取り暫し見てハァ不思議や。妾が戀せし袈裟御前に是程迄も似る者か。目許なら口元なら笑ひ顔まで生寫し。

去り乍ら夜目遠目傘の内。まぢかく見たる戀人は是より遙かに增しならめ。正身の袈裟御前を其方樣に見せたらば。いか程あくがれ給ふらんと宣へば。詞虎若聞きもあへずいつかな〳〵。たとひ如何樣の姿なりとも今見る人には思ひ變へじ。地どれ〳〵此方へ〳〵と目鏡受取りさしぎ俤は雲の煙と立ちおほひ。えん〳〵として跡もなく。かの李夫人のあだし影 フシ消えて果敢なき別なり。地又もや見ゆる事こそとそなたを見れば何かは知れず。廣々たる屋敷の體中門遣戸を押開き。盛過ぎたる女房上に座をしめ廣椽には。布衣の侍伺候して庭に下部の奴ども。長道具を閃かし彼方此方と騒ぐ體。徒事ならず見えければコレ〳〵姫君。詞今度は格別のものこそ見ゆれ。地サァ見給へと勸むれば。姫君手に取りつく〴〵と見てヤァ悲しや。あれはみづからが屋敷なり妾が忍び出でたるを。繼しき母御の聽出し詮議あると推したり。コレハ先づ何とせうア、辛氣イヤ〳〵早う歸らうと。色違へして出で給ふを虎若暫しと押止め。詞かく騒がしき折柄御身獨りは氣遣はし。見えがくれに後見せん心安かれ姫君と。地勇め力をつけ申し飛立つばかり急げども足弱車の我からの。心も亂れ氣も消えて覺えずたどりて 三重へ歸らるる。去る

程に。地資方卿の館には姫君見えさせ給はぬとて。御臺所早瀬の源内武里を召され。先づ方々へ手分けして尋ねさせよとありければ。御内方の若侍お出入の百姓どもフシ彼よ是よと犇きける。地斯る所へ御祈願所奇妙院の覺力坊。弟子ども引連れ馳せ參じ此の由を見てハテ凡々し先づ先づ靜まり候へと近習の人々退け御臺所に打向ひ。詞シテ先づ此の騒は何としたる御事ぞ。能く心を鎭め聞召せ。薫姫の心そぞろになり家出をせらるゝ事。是以て某が行力の驗なり。然るを何ぞや得たり顔に斯樣にわゝしく振舞ひ給はゞ。資方卿の御心に我が子の悪事は扨置き。なさぬ中とて悪樣にいひなすなどと思はれては。巧みし事も無にならん隨分柔和くもてなし。姫が悪事を隱す樣にし給はゞ。いよ〳〵憎しみ重なり父の腹立ち强からん。ヤ人なき内に先づ内々の埋みし物。地それ〳〵とあれば源内承り姫君の閨の下。埋みし函を掘り出だしフシ軈て御前に持參せり。地覺力坊蓋押開き中より鴛鴦の雌鳥を取出し。ヲヽ我が行力の通じてや此の鳥は恙なくてありけるよと。祕文を唱へ刺たる劍をひん拔いて。突殺さんとする手を源内押止め。詞卒爾ながら些と伺ひ申したき事の候。只今此の鳥を殺し給ふ意趣は。如何樣の事に候といへば。ヲヽ不審ならばほゞ語つて聞かせん。是は愚僧が師傳にて。憎しと思ふ女の髪を綾合

せ鴛鴦の雌鳥を繫ぎ。函に納め加持をして臥所の下に埋み置けば。其の身淫亂になり家を浮かれ出で迷ふ。其の時件の鳥を殺せば其の女二度家に歸らぬ事必定なり。何と奇妙の呪咀ならずやと賢氣げにいひければ源内不興顔してヤアラ聞え申さぬ御仕業。コレ御臺樣。何と内々の御契約は御失念候か。今更申すもくどけれども我年頃姫君に心を懸け。兎や角思ひわび候を御存知せられ。此の頃の仰にも元よりまゝしき姫なれば。總領と仰がん事思ひもよらず。幸ひ心を懸けし其方と添はせん間。姫が心も和ぐ爲の祈禱の供物になるべき。鴛鴦を生き乍ら竊かに取つて參らせよとの御意に從ひ。大澤の池に行き大事にかけ生捕り。進上申してより今日や其の戀かなふ。地明日や文の返事やあるとうつら〳〵と暮す所に。今其の鳥を殺し姫君失せ果て給ふならば。私への御契約は何とせうと思召す。詞イヤ何方の姫君を某に下さるるぞ。サア返答あらば云うて見給へと座を打つて罵れど。御臺とかうの詞なくフシ差俯向いておはしける。源内いよ〳〵勝に乘りヱヽ鑷に釘を打つ樣に答もなき事云ふも無益。よし〳〵此の巧みの事を殿へ一々申し上げんと。ずんど立つを兩人袖に縋り付き。ハア短氣なり先づ篤と心を靜め聞分けよ。詞姫此の屋敷にありては其方が戀。何程思ふと効あらじ。さるによつて再び歸らぬ樣に道切り

をして。外にて其方と添はせんとの手段なり。地此の所存全く僞りなしと詞を盡し宥むれば。源内少し色を直しハテそんなら疾うからさうとも宣はでと。むぢ〳〵と揉手をしてフシ元の。座にこそ直りけれ。地斯る所へ資方卿大内より歸らせ給ひ。扨姫が行方未だ何方とも知れざるか。如何に〳〵と問ひ給へば御臺悲しき風情にて只さめ〴〵と泣き給へば。覺力坊は殊勝げに算木數々とりみだし。ア丶何とやらん占の表凶事に見え候と靜まり返つて居る所へ。虎若は日頃懇に語らひし。山伏の雲居寺に有りけるが。先達の裝束借りて着用し。柿の衣に黑脛巾十二因緣の襞をたたみし兜巾を懸け。不淨を拂ふ忍辱の袈裟。黑漆の笈取つて肩に懸け椽端にどうと置き。いらたか珠數をつまぐり目八分に左右を見廻し。上座にむんずとなほりけり。詞資方御覽じ是は何方よりの客僧。何とて入來候とあればさん候。元來野に起き山に臥し。嵐の枕雲の衾飛行自在の蘇民書札。此の家の騷動天眼を以て見るより早く。矢の如く讃岐の國より來りたり。地それ〳〵家内の火を點じ。洗米を供へられよと フシ横柄らしくあしらへば。地覺力坊ぎよつとして。虎若の姿を見上げ見下し。ハア何とやら合點の行かぬ眼つき。頭のかゝり詞の體定めて是は天狗の變作ならんと。わぢ〳〵顫うてゐたりしが。イヤ〳〵何にもせよ弱味を見

せば惡しかりなんと。心をきつと取直し。詞ヤイこれ其の方は近頃法式を破る推參者。いでいで我が法力の行作を語つて聽かせん。うや〳〵しくも若年の昔より役の行者の跡を蹈み。那智に千日大峰三度。葛城高野金峰山白山立山富士の嶽。伊豆箱根信濃戸隱出羽の羽黑。總じて日本國中殘る方なく行ひ廻りし某がゐる所へ。若輩の强力輩一座には叶ふまじとう〳〵退れと怒りけり。虎若聽きも入れずかッら〳〵と笑ひ。何ぢや婆人もない六法詞。山々の名所づくしよしなき事をいはんより。姫の行方を占ひ早速歸らるる樣にせよといへば。サレバ占の表今日のほんばんゆこんに當れり。此の文字を足塞と和訓すれば。歩行にて出で給ふ姫君歸り給ふ事は難かるべし。但し其の方が法力にて變りたる驗やあるとたゝみ掛けて言ひければ。ヲ丶ゆこんにもあれ又はくわがい絶體絶命にもせよ。地端的の奇特を見せんと算木奪取り座をならべ詞シテ失せ給ふ姫君の年はいくつ。何十五とや。然れば甲子の水性。又それなるお侍はヤア廿五。寅の年の木性。ヲ丶それならば相性目出度く候に何とて戀が叶はぬぞや。扨御臺の御年は卅八とや。癸の卯金性。其の山伏殿は四十二と御申し候か。然らば乙の酉水性ヲ丶道理かな〳〵。地御臺所と山伏が中よく肌の合うたも金生水。同性同根ならずとてなど纖子をば憎み果て。呪ひ

殺さんとはよくも〳〵たくんだり。詞御存じなければ大殿には嘸不審に思ひ給はん。然れども祕事は睫。地いで〳〵某が占の傳を明し申さん。詞最前騒の紛れにあれなる植込に立隱れ。彼等が惡事一々殘らず聞き申し。首尾を計らひ直に姫君を父御に手渡し申さんと。時を移し候なり。地是々對面遊ばせと。笈の扉を押開けばいと羞かし氣に薫姫。笈の中より出で乍ら父の御機嫌。母上の妬き目色に心消え袖打ちおほひ在します。虎若ずんど立ち衣裳を取つて捨て。詞まづ山伏ごとは是迄。扨是からは骨頂どもが。化を顯し見せ申さうと源内を捕つて抑へ。サア犬めは鴛鴦の呪言。一々に白狀せよと太刀を胸におし當つれば。ハア何がさて〳〵眞直に申しませう。地少し緩めて給はれと繼母の嫉妬覺力坊が惡業。一々殘らず言ひければ資方大きに立腹あり。エヽにつくき畜生どもが仕業見るも中々穢らはしと。御臺所を取つて伏せ。エイと云うて一刀に刺殺し給へば。覺力遁れぬ所ぞと拔打に丁ど斬る。虎若是はとつゝとより。向ふやつばら散々に前後。左右に三重へきりまくる。地斯るまぎれに源内は。姫君を肩に懸け フシ行方知らず失せにけり。資方見給ひやれ源内めが姫を連れ行くは。誰かあるあれ止めよと駈け出で給ふ。詞うしろより覺力坊つゝと寄り。だまし打にはたと斬り乘懸つて止をさす。所へ虎

若立歸り横樣にむんずと抱く。地弟子ども左右より取付き足を取らんとせり合を。左手右手に蹴倒し覺力坊が小腕取つて捻廻し。眞逆樣に取つて投げえいと云うて踏殺し。手向ふ奴等取つては投げつけ。引寄せ踏付け散々におつ散し。地ツメ扨姫君の御行方何處迄もと駈出づる。其の有樣は村雨を嵐の誘ふ如くにて。さら〳〵さつと走り行く實に假初の緣により。斯る難義を見繼ぐ事誠に武士の一言は。金より猶色變へぬ心の。末こそ賴もしき。

第二　（偷盜戒）

地片思ひ只我からと身を碎く。早瀨源内武里は薫姫を奪ひ取り。彼方此方とさまよへども身を隱すべき所なく。嵯峨野の邊の芝原に フシ夜半にまぎれ忍び出で。地如何に姫君是程迄心を盡し。いろ〳〵と口說けども一圓靡く氣色もなき。心底推量申したり。詞たとひ命はとらるゝとも我が心には從はじとの詞の詰。それは昔から貞女立てをする者の言ひ分其の手は古く候。地かう申し懸る上は此の戀叶はぬ物ならばコレ。此の刀にて御身を殺し我も同じく自害して。一つ枕に添寢をし屍を此の野に曝しなば。世上の人の風聞に心中づくにて刺違へ。死したるなどと繪草紙にも言ひ立てられ。それを浮世の思出と覺悟致して候がサア。只今こそ有無の返事の聞納め。

如何に〳〵と言ひければ姫君兎角の言の葉もスエテいとゞ。涙の玉の緒の　フシ消えなん。事を露程も。　地惜しとは更に思はねども二人死にたる其の跡に。仇名の立たん口惜しやよし〳〵何とぞ僞りて。いひ逃れんと思召し心に有らぬ笑ひ顔。にことほゝ笑みィヤなう源内。　詞それ程深き心底と　地知らで無情我が心。思へば〳〵口惜しけれもう此の上はなにがさて。否とは言はぬ思はくと　フシしとゝ。もたれて宣へば。源内ほうど腰をぬかし。　詞ヤァそれは實にて候か。八幡忝けない。然宣ふ上からは日頃はお主向後は。我が女房と存ずれば。先づ差當りての身代咄が肝心なり。されば某先日屋敷を立退きし時。事急なれば何の貯もなく明日の糧さへつき果てたり。それに付き此の下嵯峨に。衣川とて富貴なる尼隱居してありけるよし。　地彼が所へ忍び入り何ぞ盗んで當分の世渡りにせん。最早かう成る上からは共稼の夫婦連。さあ〳〵此方へ此方へとオクリかしこの〳〵屋敷のフシ裏道の。　地藪垣を切破り。外にては人も咎め犬が威してかしましゝ。先づ〳〵内へと姫君の手を引きそつと立入れば。姫は生きたる心地なく　フシ胸を冷して在せしが。　地實に幸ひの事こそあれ。隙を窺ひ此の家の主を頼み。身の有樣をも語り如何にもして言ひ逃れんと。思ふ内にも何となくわぢ〳〵顫ひ在せしを。　詞エゝ心弱し些とも怖い事

はなしコレ。此の手水鉢の下に身を隱し待ち給へ。　地奥の樣子を見て來んと椽に手を掛け這ひ上れば。假にも響く板敷の。上に氣をつめ身を縮め。　フシ拔足してこそ入りにけれ。　地やゝふけ過ぐる冬の夜のいとど寒けき衣川。老の寢覺に起出でてアラ不思議や。　詞とろ〳〵寢入る閨のひま兄遠藤持遠殿。枕に寄添ひ起きよ〳〵と宜ふと。思へば覺むる夢心何とやら氣遣はし。　地誠に明日は持遠の御命日にてあるものを。宵の勤の怠を進め給ふか有難や。行住坐臥の易行道。スエテ勿體なくも忘れしと。持佛堂の火をかかげ。鉦打鳴らし南無阿彌陀。南無阿彌陀南無アゝ何とやらそよ〳〵と。松吹く風も騒しく物凄き夜すがらと。思ふも妾が信心の未決定なる故やらんと。又打鳴らす鉦の音に連れて後の杉障子。そつと押明け薫姫。おづ〳〵顔を差出し。申し〳〵と宣へば尼公はつと膽を消しアゝこは誰ぢや何者ぞ。　詞いや苦しうもない者と。　地言へども更に聽分けず夜更けてつひに見ぬ人が。案内もなしにこゝへ來てなんぼう苦しうないとても。此方は仰山恐しゝ。　詞シテ先づそなたは何人ぞと。　地襖に取付き立ちも得ず　フシ念佛申してゐられけり。　地姫はとかうと云ふ事を源内や聞くらんと。尼公の側に寄りければ尼君いよ〳〵恐しく。　地ハテ用があらば其所から言や。爰へはお出んなあれ〳〵と此所や彼所とし給ふ

を。やう〳〵袂に縋りつき始め終りを委く語り。兎角只お情には難を救はせたび給へとスエテ涙乍らに頼まるゝ。地尼公つく〴〵打聞いて。ヲヽお愛しの事どもや心安かれ成程勞はり申すべし。去りながら其の盗人を如何にもして騙しすかし。侍どもに搦めさせん。構へて〳〵心急き仕損じ給ふな上臈と。談合篤と示しつゝ。事を鎖めて入り給ふオクリ老のへ思案ぞ物慣れしフシかゝる折節。地虎若は姫君の御行方。隈なく尋ね今日は又嵯峨野の邊を心懸け。夜に入り獨りすご〳〵と立歸らんとせし所に。白色の光物くるり〳〵と閃めきて。頂上に立止りふつと落ちて消えければ。おほえずどうど跪づきスエテ茫然として稍しばし。地心を靜めあたりを見廻しや

ら心得ぬ事かな。詞我日のうちは常の住所にありけるが。思ひもよらず廣々たる。此の野邊に來る事ムヽ。出來た我日頃薫姫の行方片時も忘れず探ねんと。思ふ念慮に引かれうか〳〵歩み來りしよな。地さるにても此の暗夜に道の程もおぼつかなし。松明もがなしたゝめんと彼所の垣根をかなぐれば。内より女の聲音にて是なうどこに居らるゝと。忍びやかに云ふ聲を虎若惡く氣を廻し。詞ムヽさては此の内の者どもが忍びて濡をやるさうな。やらをかしや何とぞ樣子を聞かんと思ひ。地そつと立入り行き樣に互にとんと行當り。なうさき程よりさぞや待兼ね氣

遣ひやし給ふらんと。睦じく手を取れば虎若をかしさ堪へ兼ね。くつくつと笑ひ出すフシ口に手をあて居たりける。地姫君耳に口あててハテをかしうもない事をと。しとと叩けばきよつとしていやなう。奥の首尾は能いかと問へば。成程々々能く候去り乍ら。まだ下々の者どもが篤と靜まり候はず。能い時分に此の方より相圖を致し申さんと。語る言葉のしな〴〵をフシ戀と聞きなすをかしさよ。地しばらくあつて源内は衣類調度肩に懸け。小聲に成つてコレ姫君。何かは知らず手觸りのむつくりとした物ぞ。請取り給へと差出すを虎若そつと手に取れば。詞コレまだよい物多く盗み出し地此の所へ運ぶべし。脇へばし行き給ふなと。フシ言捨て。奥に入りにけり。地虎若打頷きムヽ扨は此奴めは盗人よな。はれやれよき幸ひかな。骨も折らで珍重々々まだ何にても持て來よと。强賊物を奪ひ取るフシ心ぞ物に染みやすき。地すきもあらせず源内は在合ふ物身にあまる程持出でて。姫君々々と云ふ聲に薫姫そつと寄り。詞ヤア先程から相待ちしに何方に在せしとあれば。源内聞いてヤア。只今渡せし小袖は如何にといへば。それは先づ何事を宣ふぞ。ハテ確と手渡しせしいや請取らじとせり合ふ所へ。尼公障子をさつと明けヤレ盗人よ出合へ〳〵と呼ばはらる。源内すはや顯はれしと後の松の造木に。する〳〵とかけ

登れば虎若は度を失ひ。垣の外面へ飛越えて内の樣子を聞き居たり。詞尼公長刀横たへかひぐ〳〵しくも下知をなし。ヤア家來の者どもそれなる姫には樣子あり。先づ盜人めをかり出せと椽端につつと立ち。ヤア盜賊め自餘の女とあなどつて能くも〳〵運盡き此の屋敷へ來るよな。數ならぬども自らは遠藤左近の將監が妹衣川。尋常に出て勝負をせよ。地小長刀の刄の程を見せんと。宣ふ聲に虎若はつと驚き。詞ナウさ宣ふは叔母君か。地虎若にて候と云ふ聲に薫姫。やあ是は不思議の御出と　フシ縋りつきてぞ泣給ふ。地尼公眉を顰め是は何ともいぶかしし。詞我を慕ひ來るならば何とぞ禮儀もあるべきを。夜陰に及びかかる騷ぎの其の中へ顯れ出づるは何事ぞ。必定其の方も盜人の方人かとにがりきつて宣へば全く左樣で候はず斯樣々々の次第にて。地久々他國に候内此所に御入りとも存ぜず。推參仕り不思議の對面致すこと。返す〴〵も嬉しやとスエテ涙を零し申さるる。地尼公つく〴〵聞き給ひヲ、如何樣我此の所に。隱居せしは近き頃の事なれば知られぬも理よ。先づ〳〵無事なる顏を見て。扨も〳〵フシ嬉しやな。かくあるべきにや宵の程死して別れし將監殿を。まざ〳〵と見し夢も思へば理や。詞サテ内々御身が事上よりの御内意にて。地父の家名を繼がせ候はんとの仰せなり。詞ヤア手前の話に頓着しかの盜人の

事わすれたり。地それかり出せと此所彼所搜せど更に見えざりけり。時に下部の末座より。ヤアあの松の枝に何やら黑みて見え候。それ鎗よ突棒よと騷ぎ廻れば虎若押止め。エヽ此奴一人手にも足らぬ烏めを。手捕りにして見せんと松の根に手をかけゐいや。〳〵と押しければ上より堪らずどうど墮つるを。取つて抑へ繩をかけホヽ潔し〳〵。明けなば内裏に訴へんと。先づ〳〵お休み候へと尼公の手を取り。姫諸共打連れて寢所に。こそは　三重入り給ふ。地其の頃近衛の院と申し奉り。聖の御代の跡を繼ぎ延喜天曆の。かしこき例に準へ絶えたるを繼ぎ。廢れたるを興し萬機の繁き政事。筑波の山の陰よりも。繁き惠に民草のフシ靡かぬ方もなかりけり。地さるに因つて今度津の國渡邊の橋奉行。舊規に任せ渡邊黨の武士に。仰付けらるべしとの勅により。則ち遠藤虎若を武者所に叙せられ。遠藤武者盛遠と更名あり。實に身にあまる悅びの袂寬に束帶し。大床に伺候し謹んで畏り。詞資方卿の愁傷薫姫の行方。又源内が非道の旨一一奏し申さるれば。地實に神妙の働き功に任せ。則ち津の國渡邊の庄を賜り。薫姫を婚姻し家門を取立て申すべしと。正理に任す勅はつと頭を席につけ各。御前を三重入り給ふ。地それより日々の作法よく鰥寡孤獨の者迄も。力に應じ夫々に米錢を與ふれば。民屋豐に繁昌し　フシ既

に營み終りけり。　地供養の日にもなりしかば。　元來盛遠美麗を好む若盛り。馬上ゆゝしく供廻り對の臺笠おつ立てろ。任せておけろ滋籐の弓鎗二行に列を引き。橋の邊の平張にずつと入つて着座し。眼を配つて居られしは　フシいかめ。しうこそ見えにけれ。　地扨一番の渡初め吉例に任せ。難波の庄司二人の子供を引連れ橋のなかばに出でければ。棟梁ずんど座を立ち飾り立てたる樽肴。寶珠に供へ三獻ほして奉行職に奉れば。是も同じく三度酌み庄司にさせばおしいたゞき

木名盡し

それ〳〵子供嘉例なるに一さし舞へ。はつと答へ立並び。オクリ拍子を。揃へて。川橋の。かゝる折にもあひ竹の直なる道は今とても。飛驒の工匠がすみかねを萬の木々に打渡す。雲井の軒端のどやかに　フシ春の。ひのきの今日もすぎ。　明日は楢の木いつとてか。オクリ常盤の。松は其の昔秦の始皇の御時。太夫と封じ給ひしも雨の宿に葉を垂れて。みさをかしこき冬の日も雪を頂く翁草。君子の德になぞらへて桐の。葉分の。秋の月夜よしと。人は浮かれてもフシねふりの木こそ。うたてけれ。紅葉にあかぬ立田姫。手染の衣の色々を時雨に染めてオクリふれや。ふれ

ふれ歌我ふる妻をさ。きてみよ。かしの。フシ葉の露も。夏の朝けの風涼し山時鳥一聲を。忍び兼ねたるうつぎがき男。結びに。きりり　フシと廻し。しやんと結んで櫻蓑を。人に擬へて。鳥おどし。歌見れば木蔭に笠を傾け居るを。それ〳〵それと知らず餌差棹。　フシもゝちの鳥の。聲々に心のみこそあらたまれ。梅は難波のみこの神高津の宮に跡たれし。我が日の本の内のみか。唐の帝の。文學に。匂も增して盛にて。雪を集むる窓の梅オクリひとく。〳〵と鶯のふわと木傳ひ飛梅を。一枝折つていたい氣な。歌子供にやろか信濃梅。梨下の月影　フシさえかへる。庭のかかりの長き日も暮に數ある履の音。うけて流してたよ〳〵と柳の靡く。をり〳〵は。風の姿とおもほゆる。いくらの春も待ちわびて。花の心を催して。いさめの鼓打たうよ面白の。春の景色や。筆にかくともよも山のオクリ霞は。繪にも。及ぶまじ彼岸櫻や。初櫻ひとへに人のもて遊ぶ。小兒櫻に姥櫻楊貴妃櫻は音に聞く。見ぬ唐土の鳥までも爰に宿りて桐が谷。夜の間の雨。に散る花を。惜めば亥子丑虎の尾の。かには櫻や伊勢櫻散らすは風の。　とがの木と思へば。いとゞむくつけき李から桃。櫟はしばみ樣々の。木々の數々千代かけて。君が齡はさゞれいし。巖とならん楠のつきせぬ御代の橋柱萬々。歳とぞいはひける。　地こと納まれば警固の武士。矢

來をさつと押開き群集の。人を　三重へ通しけり。　地大勢の其の中に山伏ども數百人、ひた〳〵と集まり番所に立てたる鎗長刀。手々に奪取り一時に奉行の前につゝ懸る。　詞中にも七尺あまりの大の法師二人眞先に進み出で。やあ〳〵盛遠我々兩人は。和泉の阿闍梨河内の律師と云ふ者なり。先年資方の屋敷にて師匠覺力坊を其の方に討たせ。敵を取らんと付狙ふ所に。運強く今日迄は延したり。最早只今こそ寂滅の貝吹かせん覺悟せよと言ひければ。盛遠空嘯いてムゝ誠に一寸の蟲に五分の魂ありと聞く。しをらしいうんざいどもあれ討取れと。地下知すれば。血氣に速る若者ども我も〳〵と拔連れて亂れ合うてぞ　三重へ戰ひける　フシ數多の見物。地崩れ合ひ老たる者は地に轉び。或は女童子ども。父よ母よと叫ぶ聲　フシ更に分ちもなかりけり。　地然る所へ盛遠は髪打亂き大童になり。着たる裝束我と切裂き太刀を彼所にかつぱと捨て。橋の東西かけ廻りァゝ苦しや。　詞さしも貴き覺力坊を。及にかけし冥罰當つてナウ熱や堪へがたや。如何に行者達疾う〳〵我が首取つて。　地此の苦みを助けてたべ。南無と云うて立竦み眼を見詰めゐたりけり。二人の山伏力を得ァゝ然もあらん。いで〳〵望に任せ娑婆の暇を取らせんと。兩方より立寄るをむずと抱き引締めて。　詞ヤァァうんたらたかんまん何しに罰が當らうと。　二人乍

ら橋より下へどうど投げ。　地在合ふ山伏おん廻し東方に降魔の劍。西方に大音上げ喚いて懸れば南方は。眞下りに遁げて行く北方金剛力を出し。中央大日不動の利劍振立て。〳〵橋の行桁おんころ〳〵とゞろ〳〵と踏鳴しむら〳〵ばつと大勢を。橋守る神の手向幣秡ひ。請め奉る。

第三　（邪淫戒）

地老いせぬや藥の名をも菊の水。盃も浮み出で共白髪まで壽の。相生の臺の物くはへ銚子のつきぐしく。儀式立つたる座敷の體嫁御はそれと白小袖。日影ほのかに薫姫うひ〳〵し氣に坐し給へば。次には叔母の衣川袈裟御前を始めとし。一門の女中フシ各並み居給ひける。地中にも衣川お年役とて差配して。　詞いかに盛遠今度の祝言は忝くも君よりの勅に從ひ。取結ぶ事冥加に叶ふ事どもなり。　地幾千代かけての盃をそれ〳〵と有りければ。薫姫取上げ盛遠にさし給へば手に土器をすゑ乍ら受けもやらず座敷の體。じろ〳〵と見廻し。　詞イヤ是叔母君の次に居給ふ上臈は。何とやら見知りたる人なるが。誰殿の御息女とあれば衣川聞き給ひ。ハテ輕忽な問ひ事かな。あれこそは袈裟御前。五つや六つの頃迄はそなたと一所の懷に。　地添寢をせしも年長けてよそ〳〵し氣なる言葉やと。笑ひ乍ら宣へば盛遠まじ〳〵と打ちまもり。扨不思

議なる事どもかな。詞其の袈裟御前とは十餘年此の方。逢ひも見もせぬ面ざしの大人びたるを見知りぬるは。合點の行かぬ事かなヲヽそれよ〳〵。いつぞや東山の庵より遠目鏡にて見し姿地此の人にこそあんなれと思ひ出せば彌增る。其の初戀の今更に見れば見る程美くしく。そぞろ浮かれコレ叔母君。詞我幼少の時袈裟御前とはいひなづけあつて。末々は夫婦にせんと。父將監の宣ひしを小耳に篤と覺え候。然るを只今契約を違へ薫姫との祝言は。如何に上よりの仰せなればとて權付の緣組存じも寄らず候。幸ひ事序に袈裟御前と。夫婦の盃首尾よくさせて給はれと眞顏に成ていひければ。地額に波の衣川いやとよそれは誰人も。幼き時の根なし事雜遊びの戯れに。妻よ夫と云ふ事は誠にあらぬ言葉なり。詞其の上袈裟御前には源の渡と云ふ聟をとり。二つになりし子迄有りよしなき事をいはんより。地サア機嫌よく嫁御の盃早々と。宣ふを聞きも入れず。詞何先立つて聟をとり子迄まうけ候とや。假令源の渡にもせよすたるにもせよ。地先約は我なれば此の世があの世に立返るとも。やはか添はで置くべきかと眼を見出し罵れば。イヤコレ和主は氣ばし違うて物に狂ふか。ヤレ篤と物の道理を聞分けられよ。帝より賜つたる妻にはそはず。主ある女に心をかけ獨の叔母に瞋恚を燃させ。我が儘をはたらく段一々上

に奏聞せば。詞そなたは痛い腹を切るか又は遠き島にも流されんは必定なり。地ことの募らぬ先に思案をしかへ。盃を取上げられよそれ〳〵とあれば。酌人銚子を加へつがんとするを盛遠長柄をつき退け。物をもいはず佛頂面して土器取つて投付け。詞いはして置けば方圖もなきわんざんエヽ叔母にてなくばと睨み付けずんど立つて入りければ。一座に在り合ふ人々はフシ興を。覺して居たりけり。地見るにうたてく袈裟御前薫姫に打向ひ。其方樣の御心底世に迷惑に候なり。去りながら盛遠殿は性得の我儘人。殊に今宵は酒に醉ひうつゝなき有樣。構へて構へて御心に懸けさせ給ふな姫君とスエテ手を合せ宣へば。地姫はことなき顏色にて。何しに惡しく思ふべし醉の紛れのそゞろ言。醒めての後に機嫌をとり。御意見致し隨分と。心を宥め申すべし元よりおぬし樣にはみづからは。陰乍らもお愛しく山々思ひ候へば。惡しうは仕なし申すまじお氣遣ひし給ふなと。おほとか成りし挨拶に座中の人々色を直し。ともゞ〳〵打着せ參らせてそれ〳〵お床長枕。ふた夜の契鴛鴦の。オクリヘ閨にいざなひ奉る。フシ添はぬ妹背の。片たがひ。中に立てたる槇柱しとともたれて薫姫。獨り淋しく居給へど。盛遠は盧寢入。スエテ夜着引被り臥したるを。そつと押あけ搖り起し。地誠に深き御心無理とも更に思はれず。みづから女の

身にてさへ袈裟御前を思ひ染め。命に懸けてさしも草頼みがひなき觀世音。願立したる詮もなく最早叶はぬ我が戀とスエテ思ひ諦め候なり。御身は男の事なれば只ひたすらの執心を。何程遂けんと思すとも。流石主ある小夜衣。返すぐ〳〵も此の戀の叶ふべしとも思はれず。詞斯樣に申せば主樣に心をかけ。悋氣故の妨と惡う聞きなし給ふなよ。地上の仰せの重き故是非なく緣を結べども。父に別れし悲しみに憂世を立つる心でなし。詞もう此の上は夫婦の因緣さらりと止にして。地他人の身ながら大切に。思ふが上の意見なり。道に違ひし戀草の根からふつゝり思切り給へやと。理りせめて宣へば盛遠むく〳〵と起き。詞そなたは若年よりの約束も。知らぬ人を相手にして千も萬もいらぬ事。地直に逢うての詰開き障子襖の隅々迄。爰や彼所と尋ね廻りヤア袈裟御前は歸られしか。つれなの人や是程まで思ふ心を顧ず。外の男と添はんとはアゝ情なやサア。否か應かいやとはいはせぬ。どうでもかうでも夫婦ぞと問うつ答へつ獨り言。そぞろに心亂れ髪はら。はら〳〵はら腹立やとほつとつく息黑色の。玉と顯れくる〳〵くるりくるり苦し氣に。狂ひ出でんとする所を姫君是はと縋りつく袖振り放ち突倒し。搔い振つて走りゆくアットばかりに薫姫。消ゆる心を取りなほし暫し〳〵と云ふ聲も。枯野に弱る蟲の音の

闇路たどりて三重〳〵天の川。フシ白きを見れば。地更る夜に源の渡は袈裟御前のお歸りを。待つ間久しく氣晴しと女房達に酌取らせ。數々過ぐる盃をさすのおさへの挨拶に。フシせら〳〵笑ふ下心。詞ヤレ松ケ枝小篠。そち二人はさぞや今宵の祝言羨しく思ふらん。何とさうかと宣へば松ケ枝じつと打笑ひ。イヤ左樣にも候はず初に逢ふ夜のほゝの内。地嫁御の心は羞しく生きた思も候まじ。されども聟君のお心はしよぎ〳〵嬉しく有るらんと。思ひやられ候と言へば小篠さし出で。詞ハテそれこそは殿樣の。地御祝言の時御覺えこそあるらめと。咄しみたる折節袈裟御前歸らせ給ひ。後ろにそつと立ち給ふを知らで渡はうつゝなく。小篠が膝に寄掛り詞何と云ふおれが祝言の時の咄が聞きたいとや。安い事語つて聞かせう。總じて初に寢る時は。恥かしさうにうぢ〳〵とすれば拍子はぐれて埒あかぬものなれば。あつう掛つてのしきつて懷の内へコレ。地此の樣にずつとは入るが秘密の口傳と。小篠が肌を撫で擦りフウ思ひの外むつちりと肥えてゐるは。油が乘つて手ざはりの氣味のよさ。ヤレ何がおかしいやら臍が笑ふはヤツくつ〳〵とこそぐり給へば。コリヤ何をなされます惡い事ばかりをそれ。奥樣のと地云ふ聲に渡ふつと捻向き。臍を潰してもぢ〳〵と フシ手を打拂ひ居給へば。地袈裟はつやなくつつと出で

ヤイ小篠。わらはが留守に誰が許して殿様の御傍へ寄る。あんまりであらうがな。アノ大膳者めがあつちへうせうとはしたなく。格氣こめたる物ごしも フシ色が餘りて憎からず。地渡にこにこ打笑ひ 詞ヲヽ是は奥の腹立が尤々。常々小篠と云ふ奴はなめ過ぎた慮外者既に以て今宵も留守の淋しさに。何心なく寢て居るを何であらうぞ傍へ來て。嫌がるおれが手を取つて懐の内へ引込み。ひねつてくれの擦れのと色々の小言を云ふ。地コリヤ あんまりであらうがな。あの大膳者めがあつちへうせうと。口眞似のまざ〳〵しさに袈裟御前腹も立たれず。詞ヲヽお ぬし様はもとより律儀な心なれど。この右の手がびろ〳〵と惡い事をする程に。地ちつと仕付をして進ぜませうとつめるをしほに顔をしかめあいた〳〵と紛らかし。一つ二つの戯れの咄の跡もふら〳〵とオクリねふり〴〵乍らに臥し給ふ フシ隙を窺ひ。地盛遠は壺の内まで忍び入る。跡につきそひ薫姫。折戸の内に身隠れて フシ様子を試し給ひける。地目ざすも知らず暗ければ爰やかしことする音に。松ケ枝ハツト驚きナウ小篠。詞今の音は何であらうのアヽ怖やと寄添へば。袈裟御前打笑ひ其方達は何を怖がる。定めて虎が戻りしならんと。地紙燭差して出で給ひ虎よ來い。虎よ〳〵と宣ふを盛遠立寄りコリヤ袈裟御前か。先約なれば是非とも夫婦にならんと云

ふを。聽かず振捨て歸らるゝ事是皆渡と云ふ男のある故なれば。詞踏込み刺殺し我も腹切り。地 兩人ともに打果し御身一人生殘り。沖にも磯にも寄りつかぬ尼になりての若後家。其の時思ひ知り給へと言捨て。驅入らんとするを引止め。是は短き御風情先づ暫らくと云ふ内に。兎や角思案しイヤなう盛遠様。詞宵にくれ〴〵宣ひしお言葉とは相違して。あさはかなりし御心それを如何にと申すに。地誠に自らと夫婦にならんと思召さば。いなにはあらぬ我が心所詮渡をひそかに殺し。我を連退き給はゞいづく如何なる里にても。行末長く添ひ申さんハテ死んで花咲く身に非ずと。手をしめやかに口説かるゝ盛遠心惚々として。詞然らば必定左様に思召すか 地アヽ何しに詐り申すべし去り乍ら。身を全うする爲なれば時分を計らひ閨の火を吹消し候時それを合圖に忍び入り亂れ髪にて臥したるが。渡にて在します只一刀に刺通し。本望を遂げ給へ必ずせかせ給ふなと。約束固く言交し合圖の時を松の聲。風の前なる燈火の消えん〳〵命ぞ果敢なけれ フシ御痛はしや。地袈裟御前もとより夫の身に代り。死なんものをと思ひきる心の色を知らせじと。もとの座敷に立歸り。只何となき風情にて。ヤア爲若はいづくにぞ。妾たまたま外へ出で暫しが間見ぬ内も。地あの子が事の氣に懸り何につけても忘られず。最早ねゝして

居るとまゝそつと抱いて見せてたも。早う〳〵と有りければされば爲樣の御事は。詞お前のお留守故か御機嫌悪しくむづかりしを。お氣に入りの茂藏に抱かせ漸々ねいらせ給ひ候。地それそれ茂藏召せはつといひ罷出で御傍近く畏る。人こそ知らね沖の石涙を襟に押隱し。玆へ〳〵と抱き上げ顔つく〴〵とまもり詰め。扨も悲しやかく計り淺き緣と知るならば。如何なる霜とも見ぬ内に消えて果敢なく成りもせで。蝶よ花よと撫子の別れに心引かされて。永き冥路の障りともならん事こそ悲しやとせき來る。涙を我からと。藻にすむ蟲の音を絶えて何心なく若君の。つや〳〵寢給ふ面さしの笑ふが如く愛らしく。いとゞ目もくれ心消えせめて名殘に母が顔見もし見えられ今生の別れと思ひ定めんと。顔さしよせて愛したまへば爲若おびえ目を覺し。わつと泣出し給ふをば乳人立寄り。折角寢入り給ふをおいとしほげにこなたへと。茂藏に抱かせて。ねん〳〵おろゝと賺しつゝ皆々オクリへ寢間にぞ入りにけるフシ跡懐しく。地見返りて實にや世にある人々の。子を持つてより情け知る我が身空しく成るならば。跡にまします母上のさこそ歎かせ給ふらんフシ是のみ。不孝の罪科は。ゆるさせ給へ七十にあまる寢覺の徒然には。孫を愛してみづからと思ひ慰め給はれと。取集めたる事どもを思へば〳〵遣瀬なく。かしこにど

うと伏轉び フシ忍び。音になく聲漏れて若しやは。夫の聞くらんと心で。心を取直し。地枕刀をそつとぬき丈と等しき黑髪を。手にかゝる程ずんど切る。サア是迄と燈火の影より見れば我が夫の獨り淋しき寢姿も別れの際にせめて扨。去らばとばかりの言の葉も只我獨り暇乞ひ。それさへ聲に現はさぬ。思ひかず〳〵瀧津瀨の フシ涙は玉を貫けり。やゝ時移る閨のひま蕭颯はさし覘き。扨はわりなき戀路故夫の渡の身代と。おぼし切つたる黑髪は男に似せん手だてかや。かく賴もしき上臈をやみ〳〵と討たせん事思へばいたはしや。ヲヽ思ひ付いたり此の事を侍どもに告げ知らせ。夫婦の難儀を救はうかイヤまて暫し我が心。道に背きし塵遠なれども假りにも夫婦と名のつきし。みづからが口より訴人して斬らせん事も道立たず。其の上此處に暫しにても躊躇はば。渡の御身危しと深き思案に袈裟御前。我が身をかへて切られんとの計略も無にならん 詞ハア何とかと打案じ。地イヤとかく我が身をかばふ故差當りての分別なし。我袈裟御前の命に代り死なんものをと髪振りほどき。根元より切らんとすれど刀なく。邊を見廻し側に立てたる燈火に。髪押當ればふつと消え前後左右も見え分かず。途方にくれておはします袈裟御前ハツト思ひ。扨は時移るゆゑ塵遠の心せき。あなたより火を消されしよアヽ遲れたり今こ

そ最期の閨の火を。心と共に吹消し髪押しみだき打臥して。フシ知死期まつ間でせつなけれ。

地盛遠すはやと立寄るを。薫姫こゝぞ大事と身を潜め。妻戸の口の通り道横たはりてぞ臥し給ふ。盛遠はうどつまづきサア是こそと太刀をぬき。抑ゆる手に髪筋の障るをそつと撫でおろし。

詞ヤア引是は女の髪と知れて長々し。地扨は人違ひホウあぶなし〳〵と。靜かに上を乘越え奥の間に忍び入る。音に渡は目を覺し心得ぬことかな。最前次の間に燈火を消すと一度に閨の火も同じく吹消し人の音なひ聞うるは。徒事ならずと打ちうなづき態と寢たる風情して。高高と空鼾刀の柄に手を懸けじつと靜まり居給ふを。夫とも知らず盛遠は手を差出し暗まぎれ。袈裟御前の臥し給ふ枕に寄添ひ試し見るに。合圖にたがはぬ亂れ髪。是こそと太刀取直し首かき切れば。渡是はと拔打ちにはたと切る。ひらりと飛び去り盛遠はフシ行方知れず隱れけり。

地ヤレ狼藉者遁さじと跡に續いて出でさまに。薫姫に行當りやには取つておつぶせ。詞扨は犬めは盜人か但は不義の忍び男か。さあ〳〵眞直にいへと髻を取つてヤア。是は女なりムヽ扨は袈裟御前か。いよ〳〵不義にまぎれなしと。地宣ふ聲に驚き。外樣の侍一時に手々に提灯ともし立て。かしこを見れば袈裟御前血汐に染みて臥し給ふ。渡ハット膽を消しヤレ袈裟御前〳〵

と。呼べど叫べど息切れてスエテ空しき體と消え給ふ。イヤ〳〵兎角此の事はそれなる女ぞ知つつらん。サア有樣に樣子をいへと侍ども立懸り。散々に打擲す。打たれて聲の出で兼ねる涙ながらに薫姫。やう〳〵と息をつぎ。始め終りの事ども妾くはしく知つたれども。最早此の期に及びいふ迄もなし然る上はみづからを盜人ともかたきとも。如何樣にもし給ふべし先立ち死なん我が命。後れて殘る末の露聊も惜しからじとフシ口說き。立て宣へば。詞イヤ〳〵それにては譯立たず縱ひ何程包むとも。地言ふ所にていはせうぞ公儀によせて白狀させよと。とり〴〵評定する所へ盛遠くらがりよりつゝと出で。詞ヤアそれなるは源の渡にてましますか。今宵の狼藉は此の遠藤武者盛遠にて候。渡聞きもあへずシテ其の盛遠は。一門の內として何たる意趣あり袈裟御前は討ち給ふ。ヲヽ御不審は尤。兎角それへ參り具さに申し入れんと。つか〳〵と立寄れば渡飛退り刀の柄に手を懸けたまふを。イヤ御用心は無用。斯く名乘り出づるからは手向へ致す心でなしと。地大小取つて投出し兎角御身の妻敵は。拙者めに極つたれば何分にも御腹癒せに行ひ給へと彼處にどうど座を組んで。スエテ思ひ詰たる氣色にて。地渡もほうどあきれ果てヤア何程左樣に宣ふとて。仔細を聞かぬ內は無下に討つべき樣もなし。詞先づ袈裟御前には何の

恨あつて斯樣にはし給ふ。其の一通りを聞かんとあればヲヽ尤至極せり。然れば包まず明し申さんと。地始終の事ども委しく語り。サア此の上は某が爪先より頂上まで。ずん〳〵に刻みてなりとも死したる人の手向とも。なして給はれ疾々とスヱテ首差しのべて居たりけり。地渡はとかうの詞もなく向ふ鹿には矢も立たず。實に弓取の名を惜む身にさへ捨てぬ命をば。ましてやかよわき女の身如何に貞女の道を立つればとて。斯樣にあへなく死する事餘り本意なき仕業かな後れて殘る我獨り。千萬歳を經るとても何の樂しみあるべきぞ。二世と契りて此の世から我をば跡に振捨てゝ。物思へとや然りとては。しなしたり〳〵イカニ盛遠。御身も來惡き所へ能くもよくも來られたり。寢鳥を射るは道に非ず道に背き改め道に歸り名乘出で。切られんと云ふ志をスヱテ何しに殺し申すべし。地たとへ御澄を討つたればとて死したる人がよみがへり。又見る事のあらばこそと口說き。立ててぞ泣き給ふ。盛遠今は詮方も涙を抑へ。詞ハッハ左樣に宣うては死ぬるにも死なれず。生きては又萬人に面伏。ムウよし〳〵かひなき命存らへて。男と云ふ字は名乘られまじ。是迄なりと太刀引拔き髻根よりふつゝと切る。渡見給ひ手を打つて。扨も扨も惡に强ければ善にも强き心かな。死に行く人の追善是にましたる事あらじ。我生れてより此

の方紫禁淸涼の床にはんべつて。上を羨み下を輕んじ劒にかへて色を重んじ。ハル常樂我淨の四顚倒一生の造惡。たとへを取らば四大海。高きことは蘇迷盧の。山また山を重ねたる煩惱則ち菩提心。懺愧依報の道に入らんと同じく髻切り給へば。薫姫涙を抑へヲヽいしくも悟り給ふぞや。妾もともに法の道さらばと云ひて黑髮を。襟丈ふつゝと思ひきりいでや此の世は火の住家。稻妻の光りぞと立出でんとし給ふを。乳人若君いだき上げしばさせ給へさりとては。母御に離れ便りなく僅か二歳の若君を何になれとて捨果てて何方へ行かせ給ふぞや。待たせたまへと先になり立ちふさがれば爲若は。愛する如く父上の顏を見上げて手を出し。さそう〳〵と宣へば思ひ切つたる心さへ。亦くれ〳〵と立迷ひ眼を塞ぎ實にまこと。詞一人出家するを見ては第六天の魔王妻となり子となつて。恩愛の袖を引き執着の手を取り。地ながく三途に引くとかや娑婆一旦の部類眷屬。妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と止むる袂を振り放ち。二目とも顧みぬ心を感じ盛遠暫しとおしとゞめ。詞シテ先づ御身は是より何方へ趣かんと思すぞや。サテそなたは。されば八萬四千の法門差々別々に別るゝ事。衆生の病の數に應じて醫王是に藥を與へ。それぞれに變れども皆是一味醍醐味なり。中について某は高野大師の門に入り。阿字本不生の觀心無

不比の外に何物か。地宿すべきやどもなく心のとゞまる所こそ。心のやどりと思ふなり御身の修行は如何にとあれば。渡合掌喪衣して我はもとより愚痴無智の。有情を度せん超世の願しゆんびの門により給ふ。黒谷法然上人の徒になり往生せんと思ふなり。扨姫君は妙法の深き功力二つもなく。三つの車を引きかへて大白牛車に打乗りて。今身より佛身に至るまで持てや〳〵南無妙法。蓮華中に生れんと己が様々わけ上る。麓の道は多けれど同じ雲井の月の影。霜と消行く袈裟御前是ぞ菩提の善智識。針に從ふ絲筋の分れ〳〵て出で給ふ。此の人々のこゝろざし劣優も嵐吹く。塵の浮世の中々に哀れ。稀なる風情かな。

第四　（妄語戒）

地年月の流れて早き衣川。けさは果敢なき霜と消え老木に殘るみどり子の。稍人となり十二歳北山に學問しておはせしが。或時尼公の方へ里歸り。姥君に對面し扨も師匠の仰せには。詞汝には父もなく母もなければ學問に精を入れ。人に秀でて出家になれと宣ふが、地如何なれば我には父母のおはせぬぞ。語らせ給へと歎かるる姥君ハット心くれ。こほるる涙押止め。詞イヤなうつがもない事其方には。成程父もあり母もあり。詞學問勸めん其の爲わざと左樣に僞り給

ふものならん。傳へ聞く孟子といひし人の母。我が子の家に歸りしを諫めん料に機代を。切つて見せしめ給ふとなん。然れども妾はおろかにて愛しみ深きそなたなれば。近きうち父母に逢はせんまめやかに精出して。師の坊の氣に入る樣にせられよと　フシまことしやかに宣へば。地シテまづ父母の在します。所は何所に候ぞ何故外に在しますぞ。我生れてより此の方御面ざしも見せ給はぬ。アヽ情けなの御事やと　フシ袖うち。萎れ歎くにぞ。とかういふべき言の葉も涙乍らに彼處なる。持佛堂の戸を開き袈裟御前の御影をゆびざし。詞アレあの繪姿こそ御身が母の俤なり。出家にならぬ其の内はふつ〳〵逢はじと誓を立て。鳥羽の里と云ふ所に心をすまし居るぞかし。地また父上は奈良の都に俊乘坊重源とて。譽いみじき名僧なり其の子としてわりなく。兩親を慕ふ事人の思はく世の譏り。かたゞ〳〵以て不覺なり。向後心おとなしく持たれよと。諫むる内にも悲しさのこほるる色を包み兼ねアヽ。何とやら今日の日の。打曇りたる雪景色血の道氣かやふら〳〵と。心地惡しやヤアるい〳〵とフシ奥の一間に入り給ふ。地打ちしほたれて爲若はつくゞ〳〵思ひ巡らすに。奈良の都は程遠し鳥羽は都の内と聞く。尋ね行かんと思ひしが介添の茂藏若しや止めん其の時は。思ふにかひもなかるべし賺し歸さばやと思案し。詞ヤイ茂藏。

そちは寺に歸り今宵は里に泊るよし。師の御坊へ宜しく申せ。ナイ畏まつてごはります。地たまさかのお休みゆるりと御入り候へ。明日迎に參らんと　フシ何心なく歸りけり。地サア首尾よしと爲若立出でんとし給ひしがイヤ待て暫し。我二歳の時母に別れ其の面ざしも見知らねば。幸ひ此の御影を持ちゆき是を證據に似し人を。尋ねんものをと心付きそつとはづし軸元より。くる〳〵と卷きをさめ袖に。包みし　三重

薫姫道行

衣の玉はあらはれて。我が古里に。行くぞ嬉しき南無妙。法蓮華經南無妙法。蓮華經。妙法蓮華の功力にて。五障の霞ッシ晴れやかに。心の花の。薫姫。一如比丘尼と法の名を姿と共に變る世の。憂きにつれだつ友とては。松ヶ枝小篠ッシわけすぐる。道さへまさる。袖の内。つまぐる珠數の數とりも十といひつゝ四つの時。春日の里のしたぢまど入子枕の住馴れし。庵を出でてあさな月。都の方はそなたぞと思ひオクリ〳〵たつ旅。足輕く。紙で卷いたる草鞋の紐を。蜻蜓結びに。しやんとひねりて。捻ぢてはさんで行く道の。暫し間もなき冬の日の。影行く駒の。足跡も雪には見えず松の葉の三笠の山はいくよろづ。スシよろづ世祝ふ例こそ。奈良の帝の。

昔より今此の時も一入に。榮は同じ歌の道。歌サア住吉御代の。君がひつぎの目出度さよ。フシ般若坂よりゆく人の。問はず語りに睦しく。夫婦の中に子を連れて。新酒。下げたる。竹の杖。ふしも拍子もばら〳〵と。千鳥がけなる足。引の。謡山城に井出の里玉水は名のみして。影うつす面影。ァゝさのみは亂に及ばじと。鬢かき撫でて跡先の人目恥づるも優しやな。柳寒げく枝垂れて。フシ梅暖かに、景色立つなじまの村のくずや葺。地いぶせき笹の枝垣に法家づきたる角大師御願の竹の市邊の。山は其方と白雲のかかる憂身は。尾なしどり山鳥の尾の長池や。フシ軒端續きの。家々もわきて賑ふ年の暮。俵かたげて忙がしさうに。歌角の酒屋へゑい〳〵〳〵ゑい〳〵〳〵な。何を云うて運ぶよゑ。抱いたら締めたらさ。フシ繩襷。ゆん手に當る八幡山實に清み濁る淀川の。並木の下枝ばく〳〵オクリと續きの里の夕暮に寢にゆく烏三つ二つ。フシアレあれ連れて烏羽の里。妹背の中の。まことより果敢なく消えし身の露の。淺からざりし戀塚の。昔を今に繰り返す。念珠の玉を。ぬく涙袖の下行く手向水。あはれ樒の果しなき。スエテ闇路を晴らせ日の光。毎時作是念爲我令衆生。得入無上道。續生受佛身と心をオクリ太夫〳〵すます折すがら所縁ありとも。地しら藤の漏り來る光黄昏の。歩みたど〳〵爲若は母はこの世に在り乍ら。暫

し別れてますと云ふ言葉の里の名ばかりを。スエテ問ふ人とてもあらざれば。三人の尼の回向する側に立ちより。詞ナウ如何にもの問ひませんこれ〳〵と。太夫ワキ地言へど答も涙ぐむ。目を閉ぢ耳に餘の事をフシ聽かぬ顔なるうたてさに。暫しためらひ。袖をひき。太夫烏羽の里とはいづこぞや我に教へて旅の人。是より先に候かと。ワキ問へどきかなくそなた向く。太夫さては後かと尋ぬれば。ワキまた顔を振る村時雨。二人ギンほ。ろ〳〵〳〵と暮の露。知らずは知らぬと言ひもせで情なの人や兎角たゞ。人家によりて問はゞやと乳房に別れし箒木の果敢なき跡の標とも。知らで過行く哀れさを。苔の下にや歎くらん。フシ松の響も。吹きすさむ讀經終れば庵衣。裾うち拂ひずんと立ち三人目と目を見合せて。ナウ先程は幼子が物問ひかけしを我々が。勤の邪魔と思はれて問へど答へも口無しの。子は只つらく思ふらめ程は行かじにいざさらば。跡を求めて共々に。フシ力を添へん其方へか。こなたへ來たか。南かも往にし影さへくれかかる。雨も霧とむすほふれかづく袖がさ肱守。知る人ならぬ賤の家に連れて。立寄り三重〳〵給ひけり。星の光も。地見え分かず心も細き畦づたひ。そこはかとなく爲若は手足も凍え身も疲れ。力なくなく向を見れば火影かすかに陽炎を。目當と頼む小笹原野川の水に裾濡れて。やう〳〵とし

て立ちよれば。あしの丸やのフシはなれ庵。嬉しやこゝに宿からんと戸をほと〳〵と敲かるゝ。詞内より女の聲として。誰そやそも訪ふ人もなき此の宿に。夜中といひ何の用あつてやと咎むれば。地イヤ苦しうも候はず。我は都の者なるが行暮れ道に踏迷ひ。しかも雨さへ切りにて立寄る蔭も候はず。一夜を明かさせ給はれと聲打萎れ宣へば。主人折戸を押開き。詞ヲヽいとほしや年はも行かぬみづからに。眞の闇路を行迷ひさぞ心憂くおはすらん。地先々此方へ〳〵とオクリ手を引き〳〵内に誘ひてフシ鹽の水を。地爲若の手足洗ひて樣々にいと懇なるいたはりを。嬉しと思ふ心程ほに現れて言の葉に。いひ盡されぬ御情いつの世にかは忘るべき。詞シテ先づ此の在所主人のお名は何と申し候とあれば。然ればとよ此所は烏羽の里と申して。都の方より遠からぬ所とはいひ乍ら。地住むかひもなき賤が家の軒のしのぶに人目さへ。枯行く野邊の一つ庵佗しく暮し候と語り給へば。詞ムウさてはこゝを烏羽の里と申し候か。それにつき此の邊に。源の渡の妻袈裟御前と申す人を。御存じ候はずやとあれば主興さめ顔して。ハアそれは何故のお尋ねぞ。サレバ其の尋る人は我が母上。地二つの年に別れてといひも果てぬにヤアさてはそなたは爲若か。我こそ母の袈裟なるわナウ母樣かとばかりに。覺えずひしと抱き付き瀧つ。涙

はせきあへず。いへば得いはぬ數々の愛き事積る年月を。餘所にみなして此の所にひとり淋しく住み給ひ。さらば都も遠からぬに能くも〳〵今迄は。逢ひも見もせずせめてさて。文の便りもし給はずさりとては恨めしの。母上樣やと繰返しスエテかこち歎き宣へば。ヲヽ道理なりさり乍らみづからとても獨り子を跡に遺して露の間も。忘るる事もあらし吹く。霜の夜雪のあしたにも嘘の紐の別れても。心は共に添寢する思ひに任せぬ事あつて。空しく隔てし年頃のこよなう成人せしものかな。詞さて姥君は恙なくおはするかや。いたう年より給ふらん覺束なしと宣へば。爲若聞き給ひサレバばゝ樣の御事。息災に在しませども只此の頃は何となく。後世の事のみ心懸け淋し氣に見え給へば。地兎角お歸り候て一つ所に住ませ給はれよ。親なき我を悔りてさる者の申せしは。詞汝が母は遠藤武者盛遠に殺されしと。地語りしを誠と思ひ姥君に尋ねしかば。イヤとよそれはさがなき人の僞なり。學問に精出さば近き頃に逢はせんと。宣ふ事の嬉しさに是迄隱れ參りたり。可愛と思召されなば早く歸らせ給はれよ。今からは隨分と手習も物讀も。怠る事は候はじと袂を顏に押當てて。さめ〴〵。泣いてしほたるる海士の。焚く火の藻汐草。フシかき寄せ。膝に抱上げ。せき來る涙の靈きはる我も故鄕のゆかしきに。夜も明けば

共々連れて歸らんに。暫しまどろみ今日の疲れをはらせよと。片敷く袖の肱枕添臥す床のうつつなく。まだいはけなき子心に明日歸らんと宣ひし。事を誠に思ひ寢のオクリ夢のヘ浮橋とだえして フシ横雲白む。地遠山に明六つ告ぐる鐘の聲。ハア悲しやと袈裟御前すご〳〵とた佇ずみてナウ爲若。御身年ごろ我をしたひこれまで來る愛着に。繪像ふぼくの魂の假に顯れ見みえしなり。去るにても我誠を守り貞節により。修羅道の苦を逃れ得脫の身と成りたれど。御身餘りに親を戀ふ其の執着を切らん爲。かりに舍りし四大の體をこゝに殘して見するなり。是を見てとても身は斯るものぞと世を悟り。佛道に趣くべし構へて〳〵愛念を止むる事はなかれよと。示す心も我乍らさすが親子の憂き別れ。立つも立たれず兎や角とただずむ影もほの〴〵と。明行く光に幽靈のフシ形は。消えて失せければ。在りし庵は。地冬枯の。木の葉の時雨はら〳〵とふる塚ばかりヘ殘りけり。地茲に遠藤武者盛遠は。佛道修行相續し其の名を文覺と戒名あり。暫く伊豆の國に下り右兵衛の佐頼朝に心を合せ。平氏を窺ふ由世の聞えあるにより。彼方此方とさまよひ折節此所を通られしが。とある一木の松蔭に幼き人の現なく。打臥し寢たる草莚髑髏を枕とし フシ餘念もなけに見えにけり。地是は不思議と立留り。詞ハア此の者は少年

の身として興がる有樣。抑も何故とつくぐ〳〵と打眺め。傳へ聞く佛在世に阿奈律尊者髑髏水を呑んで。證果を得し例あればまさに知んぬ。此の童子も悟道發明ならん事をオヽ 地 血白し〳〵一當り當つて見んと枕許につつとより。 詞 コレヤ〳〵。起きよ〳〵と荒らかにいふ聲に。 地 ふつと愕き爲若目をすり四邊を見廻し。ナウ母樣はいづくへおはしけるぞ。宵に假寢の宿もなく枕を見れば髑髏。あな怖ろしと身慄しスエテわつと叫ばせ給ひける。 詞 文覺默然としてムヽ扨は狂氣したる者ならん。不便の事やと手を取りヤレ。其方は母を慕ふと見えたり。さ程戀しくば何とて家に歸らぬぞ。所をいへ送り屆けんとあれは。 地 イヤ我が母は昨夜よりも此所に添寢して。明けなば都に歸らんと慥に誓約申せしに。情なくも振捨てていづ方へ行き給ふ。逢はで慕ひし昔より見えて別るる我が思ひ。如何になれとて斯程まで再び歎きをかけ給ふ。恨めしの心やとフツ足摺してこそ歎かるる。落る涙のとく〳〵と悲しき中にも心付き。實に誠過し夜に添寢乍らの夢の內。果敢なく消えし身なれども假に姿を纏すと。宣ひし言葉の末思へば〳〵此の髑髏こそ母樣の御屍よさても〳〵悲しやと。空しき體を胸に當て顏に當て消え入り。〳〵泣き給ふ。文覺いよ〳〵いぶかしく。 詞 さては過ぎし夜別れし母が幽靈の。現れ言葉を交しけ

るか。シテ先づ其方は何人の子親の名は何といふぞ。出家の役に亡き跡念頃に弔ひ得させんとあれば。 地 さん候某は源の渡が子 地 ヤァさては其方は爲若か。我こそと咽返り聲を上げてぞ歎かるる。 地 餘り切なる涙の色若君不審に思召し。 詞 如何に御僧樣只今の物語にて。御落涙の體何たる故に候ぞや。若しも所緣の御方にやとあれは。文覺とかうも涙にて。エヽ不便なる事どもかな我が一心の惡逆ゆゑ。あと〳〵迄の憂き思ひ所詮眞直にいひきかせ。得道させんと思ひしがイヤ〳〵。かかる歎きの上取り亂さんも如何なり。何とぞ爲り一先づ故鄕へ歸さんと。目を押拭ひ莞爾と笑ひイヤ是爲若。 詞 其方が母袈裟御前は成程堅固にて。近き頃迄此の所にゐられしが所用ありとて都に上り。やがて歸らん其の節對面さすべきなり。然るに昨夜見みえし俤は愚僧きつと推量するに。是も其方が戀し〳〵と思ふ一念を。此の野に棲める狐なんどが誑かしたる物ならん。それを如何にと云ふに。狐妖怪をなさんとては髑髏を戴き北斗を禮し變化して。男女淫婦となり人を化すといふ事あれば。まさしくその髑髏は狐のかぶりし物ならん。 地 ア、愚なり〳〵。心をはつきと取直し誠の母に目出たく逢はんと。賴もしく思はれよと誠しやかに宣へば。イヤ〳〵何程仰せ候とも同心し難き事こそあれ。幼少より別れぬる我が母樣の俤

は。家に殘りし寫繪をこれに持つて候が。其の繪姿と變らねば誠の母は夢に見し。其の人こそは戀しけれエ、似合はぬ出家の僞り言。子供と思ひ蔑むよな思ひ詰めたり是迄と。自害せんとし給ふを文覺是はと取付き。詞ハア短氣なり先づ暫く。事をしつめて其の繪姿を我に見せよ。それに付いて篤と合點のゆく事を語つて聽かせんと。地爲若の懷中なる卷物を取出し。側なる松の枝に懸け二目とも見も分かず。昔覺えてはら〳〵とこぼるる涙をちやくとおさへ。さあらぬ體にて卷納め懷に押入れ詞ナフこれは其方二歳の年別れし母の姿ならずや。然れば夫より十年餘りの袈裟御前。今は髪を剃り衣を染め難行苦行に身も窶れ。地昔の顏色更に無ければ正眞の母に逢ひたりとも。繪像に違ひたりとて詞をも交すまじきか。詞扨々聞分けもなき顏の色エ、愚なりあさましや幼心のひとむきに死なんと狂ふ不便さに。今は我が名を名乘るなり。地我こそは汝が父渡入道俊乘坊重源なり。三界火宅を出でたればかう云ふ詞の後念より。妻子に更更執着なしとかい振つて退き給へば。ナウ尤なり父上樣東西わかぬ昔より。御俤も知らざれば最前よりの御詞。返す〳〵も慮外なり免させ給へとすがりつく。袖濡れまさる涙川スエテ不覺の思ひつきやらず。フシ共にひれふし歎かるる。地かかる折ふし一如比丘尼宵に尋ねし幼

子の。行方いづこと烏羽の里一夜假寢の明方より。彼方此方と尋ねわび此所へ立歸り。するると走寄りナウそれなるは文覺さまか。さてお久しやといはせも果てずハアここな人は龜相な事ばかりを。詞我が名は俊乘坊と云ふ者をや。それはさう爲若が。御身を慕ひ最前より待佗びぬ。サア〳〵早う逢ひ給へコレ爲若。地あれこそ慕ふ袈裟御前よ。ヤア母樣か是はそも宵に相見し其の時に。心强くも見ぬ振りに詞も交させ給はぬ事。さりとはつよき御心但しは是も夢なるかとスエテ抱き付いてぞ歎かるる。思ひがけなく一如尼松が枝小篠諸共に。胸せき上げて言の葉も涙に咽ぶばかりなり。文覺聲を怒らかしハア未練なり。詞此の場は歎く所でなし是よつく聞かれよ。此の子が母は死にたると聞き共に死なんとせし所を。やう〳〵と制し我も名乘りて父重源なると云ひ聞かせしなり。もう此の上は御身の名も有樣に袈裟御前なるわと言はれよ。さうなければ此の若は生きてゐぬ心底なるぞ。地早う〳〵と目配せする色目を悟り一如尼つくづくと打頷き御尤〳〵。成程仰せに任せんと爲若の御手をとり。僞り乍らかきくらす涙の時雨ふり捨てし。母を慕ひて遙々と獨り尋ねて來る事。扨いとほしや可愛やとあいし。給へば。爲若は。誠の母と悅びの眉晴やかに打ち笑みて。狐が化せし夢話つと〳〵語り給ふにぞ。文覺悲し

さ包みかねィャ〳〵爰に長居して。よしなき事をいはんよりいづれもは都に伴ひ。姥君にかくと首尾を繕ひ給ふべし。我も追付け參らんと勇め立てつつ文覺は跡に殘りて亡き人の髑髏を抱き戀塚の標の。許にぞ　三重へ參らるる　地返せ〳〵迷子を返せ。爲樣かへせ〳〵松の風木の葉天狗の所爲にもあれ。魍魎木魅の業なりとも尋ね出さで置くべきかと。此所や彼所と求め來り彼所を見れば。袈裟御前の墓所に旅僧一人さし俯向いて居たりしを。茂藏つか〳〵と立寄りコリヤ坊主。　詞ちつと物問はう。年のほど十歳餘りなる兒此の筋は通り給はぬか。知つたらば教へてくれよといかつらしくいひければ。文覺むつとして何奴なればぞんざいなる詞つき。あた胸惡しと捻向きもせずあしらへば。茂藏心せきャレ時もとき折もをり。何ぢや〳〵見たか見ぬかと耳を引けば。こりや何しをると振放ち。なんと十ばかりの子の行方が知れぬといふか。所望ならば教へてやらう。其の子が行し方はな。これより眞直にとをつと南の方。但しは北か西東。隨分尋ねたらば知れうとあざむけば。ャァこいつは人をなぶるか。エヽ暇ならば左いふあごた骨をたゞは置かじものを。願人坊主めよつく覺えてをれと罵れば。ムウ何と云ふ我を願人坊主とや。ャレ。非修非學のあら凡夫願人と云ふは惡き事と思ふか。エヽあさましや。十方三世の

佛菩薩衆生を助けんとの誓願。因位の時は願人ならずやと猶恥しめて宣へば。茂藏かつらかつらと打笑ひ。それは佛の大願。犬めは人の門戸に立つて一紙半錢を邏齋する。乞食坊主と一つ口にいはれうかと惡體にいひあへば。文覺大きにせきヲヽサ。一紙半錢を貴ふ事も王法弘法の仰せを蒙り。大佛建立の上主たる俊乘坊に向つて。重々の惡口己れ後日の爲惡しからんといへば。地茂藏いよ〳〵立つ腹をじつと靜め。人も多きに身が主人の名を借りて嘘をつく賣僧めを。何としてくれんと顏つく〴〵と打眺め。詞ャ彼奴は何處やら見たやうなる面相なりと漸誓しして思ひ出しヲヽ。地それよ盛遠法師の文覺でこそあんなれ。さては若君にも此所にて行逢ひ。親の敵と狙はれん後日の難儀を思ひ。こいつが失ひしに紛れなし。憎さも憎し弄殺にしてくれんと慇懃らしく腰をかゞめ。詞ハァ只今の御詞にて承れば俊乘坊にて渡らせ給ふとや。それとも知らで慮外の體眞平御免候べし。ついては其の大佛建立の勸進帳。地諸國に弘め給ふよし幸の結緣。そと聽聞申し度く候とじちめらしくいひければ。文覺此の義に當惑し暫し案じて懷中せし。袈裟御前の掛繪をそろりと出し。詞コレャ。此の卷物こそ結緣の爲の勸進帳。立板に水を流すやうに讀みて聞けうけれども。此の中さん〴〵風を引いて聲出でず。地讀まぬとても同じ

こと戴いて信をとれと。殊勝氣にもてなせばイヤとてもの事に。詞少しなりとも遊ばし候へ平に〳〵と強ひられて。ハテ忙しない成程讀んで聽かせんと。地卷物横に取直し口なめずりしてむぢ〳〵と。出次第にこそ讀上げけれ。それ。つら〳〵おもんみれば。大佛の佛の數は三千三百三十年に。なるにもあらず。昔々。とつとの昔。猿が顏の眞赤いなを。紅葉の錦と見給ひし奈良の帝の建立なり。斯程の靈場の。絶えなん事を悲しみて。俊乘坊文覺イヤ重源。諸國を巡り勸進すと。半ば讀みさし汗押拭ひ フシ吐息を。ほつとつきにけり。地茂藏目を擦り泣く體にもてなし。扨も〳〵殊勝千萬何をか布施に參らせんと。思ふやたけもつき果つる源氏の運こそ拙けれ。世が世の時にあるならば我一人の心にて。堂建立も易からんと思へば〳〵是程まで。世に捨てられし無念やと空泣きしてこそ居たりけれ。詞文覺眉をひそめ。何とやらん由あり氣なる詞の末そも御身は如何なる人ぞ。地されば申すにつけ恥かしけれども。包まず語り申さん某は。詞源氏左馬頭義朝が末の子。常盤腹には三男牛若と云ふ者なり。地兄右兵衛の佐は蛭が小島にて文覺と云ふ。賴もしき出家と心を合せ院宣を望まるゝ由。告ぐる者の候へども何を云うても我が姿。紺のだいなし手綱帶鞍馬山東光坊の寺奉公。有るにかひなき身を恥ぢて空しく朽ちん無念やと。

物哀れ氣に語りけり文覺興醒め。さて〳〵大きな僧上者。ヨイ〳〵文覺と名乘り思ふさま。なぶつてくれんと興醒顏して。詞扨は承り及びし牛若君にて在しますか。誠は我こそ文覺なれ。地平家に忍び俊乘坊とは申したれども。僞ならぬ證據を出し見せ申さんと。頭陀袋より袈裟御前の髑髏を取出し。地コレハ御身の父故左馬頭義朝の御頭よ。平治の後は獄屋の前の。苔の下に埋れしを。廿餘年我が頸に掛け弔ひ奉りしなり。地變り果てたる御容顏さぞや悲しく思すらん。サア此の上は片時も早く伊豆の國へ御供申し。兄御に逢はせ申さんに早う〳〵と手を引立つるを。直につけ込み文覺の胸ぐら摑んでコリヤ惡僧め。詞身を詐と思ふ誠は源の渡が下人茂藏なり。いぬはよくも〳〵袈裟御前を殺し。一家亂れて若君まで迷出でさせ給ふを。酷くも殺害せしよな。地サア今が最期思ひ知れと。刀を拔いて文覺の心もとにさし當つれば。詞文覺些とも騷がずヲヽ此の儀については仔細あれどもとても下人の疑ひ多く。聽入るまじき體相兎角いふもむつかし。地殺さば殺せと目を塞ぎ阿字觀に入り給へば。ヲヽよい合點とても遁がしはせぬと。刺通さんとする所に不思議や文覺の懷中より。黃色の玉つつと出で。中より分れて小龍顯れひらり〳〵と。舞ひさがり地持ちたる刄を口に銜みくる〳〵と卷きたりしは倶利伽羅不動の如く

なり。　地茂藏大きに動顛し地にひざまづき手を合し。かゝる尊き御僧と知らで犯せし大罪。免したまへと頭をさけしきつて詫事申しけり。　地文覺莞爾と打笑みヲヽしほらしき心底近頃奇特〳〵。汝が尋ぬる爲若はまつかく〳〵の次第にて。都へ送り歸せしなり心安かれいざ來れと。袈裟御前の遺骨に土砂振り注ぐ閼伽の水。月の都に行く道の草木も靡く法の德國土常住法常住。悟れば此の身卽是毘盧遮に有がたき次第やと感じ。入つたるばかりなり。

五　（飲酒戒）

地奈良の京東大寺大佛殿と申すは。聖武皇帝の勅願所十六丈の毘盧舍那佛。巍々たる靈像なりしかど平氏の一炬に燒土となる。劫末のしるし見るに心のいたましく。俊乘坊重源大願を立て諸國に奉加を請ひ給ひ。有緣無緣の群類を方便濟度なされつゝ。やう〳〵造營有るべしと都鄙遠境に觸れ給へば。番匠鑄物師金工。差圖に任せそれ〴〵のつもりを書して挑みけり。詞重源數多の番匠に向ひ。今度伽藍建立の事世智算勘を以て。利慾に惑ひ後の煩ひを招く工にては成就すべき事ならず。正直正路の墨金にて作り立てんと思ふべし。地まづ吉日良辰を撰び手斧始めあるべしと。とり〴〵評定する所へ文覺一如尼諸共に。爲若を誘ひ御寺に入らせ給ひつゝ。互

に久しき年來の變る姿は墨衣。法の奇緣はくちもせず對面あるこそ殊勝なれ。時に文覺とりあへず。詞誠に年經ての面謁殊には御身。大願を思ひ立ち給ふよし增長緣の功德なり。地さて是なるはありし世のわすれがたみの爲若丸。不思議の緣にてめぐり逢ひ亡母袈裟御前しうるる。衣川も果て給ひ數々の憂き歎き。樣々賺し敎化して是迄伴ひ申せしなり。詞コレ爲若。年頃慕はれし俊乘坊重源こそあの御方にてござんめれ。サア〳〵近く居寄りて父子の對面候へと。地涙ながらに宣へばさすが恩愛捨て難く。するすみなりし重源もスヱテ悄れがちにておはします此の年月のゆかしさを逢はゞ其の儘かこたんと。思ひまうけし爲若も威德正しき重源の。僧形に恥らひてたゞつく〴〵と打ちまもり。涙の露のはら〳〵とフシ袖かき。合せかしこまる。暫く有つて重源爲若にさしむかひ。幼少より父母に別れさぞ憂き思ひに沈みなん。去りながらとても此の世は假の宿。末法五濁の世の中。釋迦彌勒廣大慈悲の父母もなく。迷に迷を重ね永劫の苦しみを。受けん事の悲しさに斯く佛道に赴くなり。汝此の理を悟り出家にならば。死したる母の孝養何事か是に如かんと。勸め給へば爲若ハット頭を下げ。詞かく御跡を慕ふ事どもも剃髮染衣して。佛道修行いたさんと存じ入つて候へば。地はや〳〵御髮剃頂かし給はれと。至上

信にぞ望まるゝヲ、珍重々々。然らば近日法會をなし。得道致させ申さんとあれば一如尼手を合し。是はめでたき御契約皆是前世の執因と。思ふにつけて有難やヤアそれに付け。詞此の子出家し給はゞ暇なき身なるべし。在俗の内この奈良の京の名所をも。見せまほしく候とあればヲ、其の義はともかくも。地いざさらばとて文覺は。各引きつれ梓弓大和。巡りと 三重へ聞える。フシ今日は彌生の。地節句とて柳に添ふる桃の酒。奈良の市人それそれに分きて賑ふ猿澤の。池の汀の貸床に。參れ〳〵煎じ物とるや茶筅を振袖の。フシ色めき立つて見えにけり。地かかる所へ。一如尼人々を伴ひ。床机に立寄り給ひける爲若池の邊に逍遙し。彼方此方と見給へば茂藏立寄り手を打てば人に馴れたる鯉鮒に餌をまく興の面白や。茶店の女立寄り爲若の御容顏を。しけしけと見惚れづゝ尻目遣ひに戀草の。恥かしさうに袖打ちおほひ。詞ナウ若衆樣。此の池の魚がたんと見たくばコレ。此の酒をちときこしめされ候へ。魚に飲せて御目に懸けんと 地銚子盃差出せば。爲若何心なく受取り給ふ御手と共に盃を。口にさし寄せそれこなたへと請取りずつとほして。詞アヽ嬉し初めての事なれば戻しませうと酌しけるを。爲若不審さうに先づ是はどうした事ぞ。然すれば魚が見ゆるかとあればにつこと微笑み。さればいな。只今の

お盃にてみづからが。こひと云ふ魚思ひの淵に現れて。地飛びつくばかりに候と寄り添ひじつと抱付けば。一如尼立寄りコレヤ何しやる。智惠ない子に智惠つけてハテいたづらな娘やと。愛相なげに宣へば手持惡氣に袖褄をもぢ〳〵捻り。さのみはつらく宣ひそ私は此の邊に。詞酒商賣をいたします小春と申す者なるが。今日は雛の節句とて。此の所の慣はしにどなた樣へも酒を進め申す作法にて候へば。地ちときこしめし下されと愛嬌づきていひければ。詞ムヽ誠にそれはさもあらん。殊に爲若近日出家し酒を永く忌み給はん。地俗人の内氣ばらしにそれ〳〵と。許すを嬉しくホウ氣の通りたる御方やと。小春盃取上げさいつさゝれつ時移れば。文覺兩手をつつとのべ大欠伸して。ハヤ最早。能い頃にしてサヤ〳〵こゝを立たんと云ふを小春暫しと止め。詞忙しない御坊樣や。地曲水の美景は和國唐土一しほに。弄ぶ事なれば何かは苦しう候はん。詞其の上分きて奈良の京は酒に由緒ある事なれば。所の法にて亭主方が醉はぬ内は。盃をいつ迄も納めぬ法にて候へば。地何程せかせ給ひても フシ叶はぬ事といひければ。詞ハテこむつかしい所の法ムヽよい〳〵。それ茂藏早う呑んで女亭主を醉はせてのけ。地とく〳〵と下知を受け隨分精入れあしらへども。兎角無理云ふ酒あひに。茂藏ほうど弱り果て フシ堪り兼ねてぞ

見えにける。地文覺堪へずエヽ手緩しいで相手になり。一杯致さうとずんど立つを一如尼縋りつき。是は何としたる事御無用なりと引きとむる。袖振放ちィヤサ詞只酒は計りなし。亂るゝ故の戒なり。事に觸れては釋尊も。祇陀太子末利夫人に酒を許したまふ。又唐土の淵明は酒に醉臥し。達磨の骨髓を得たりとかや。地呑む内が花の春サァ〳〵食うべんとてもの事に。小盃は咽につまる樣なれば。幸ひ此の塗笠にて呑んでさされよとあれば。小春目もなく打笑ひホヽ是はようござんせう。然らばお酌慮外ながらと。地なん〳〵と受けずつと干し。文覺にさしければヤァ是は見事サァつけと。地同じく引受け呑まん〳〵とはしけれども。多年の禁酒殊に大盃に息切れ。目口をしかめやう〳〵と半ば呑みさし。詞ハッハ氣味のよい事。なんとこゝで肴の一節が聽きたいと。地やすまん爲の望み事。アット云ふより聲立ててオクリ心の。たけを。ちゞにして。思ひ參らせ。フシ候べく候と。書いたる筆の命毛も絶えね硯の海深く。變らぬ色の末かけて永き。契を結び文仇し浮名を歌言ひ立て文に。ちらし書なる言の葉を。葛の恨みの。返し文ついでくる〳〵〳〵〳〵卷けば。返すぐ〳〵もフシ目出度しし。ちしをかしく長々しくも。武藏鐙と問はねば恨むそれはなれての便りもあれど。たゞ初戀の。我から焦れ直に逢うての。フシ打

付書に。君が手の内。我がゆび當ててほの字と知らす下心。なるかならぬは目許で知れん。いまの目許は。成る目も。とんともたれて忍ぶ摺。袖ふり合し舞ひ納めフシにこと笑うて居たりけり。地文覺胸おしさすり一息につつと干し頭を叩き。詞ハヽサアさし申すといへばコヽハ抑へたほん樣。も一つとあればイヤそれは餘り急な。先づしばらくと言譯も岩間にさはる曲水の。興がる體に强ければ文覺邊を見廻し色コレ一如尼。其方も一つめしてんや下戸の酒はづれはせぬものぢやと。にぢり寄れば。アヽ輕忽私はお免しとずんど立つて片蔭に。身をひそめてぞ在しける。文覺兎角詮方なく。詞ムヽすれやどうでも呑めぢやまで。なんの其の呑んで見せうと。地又たぶ〳〵と受持ち。いつこく呑にさらりとあけ。詞さいた〳〵ふつふう早う〳〵といへば。小春押戴き。先程より重ね〳〵の事なれば。今度は御免といはせも敢ず。人には續けて呑ませてから否と云ふともいはせうか。地どうでもかうでも最一つせい。〳〵〳〵ちやうどつけばよゝと引受け。詞サァとてもの事に御坊樣も何がな一曲と望めば。文覺心も常ならず。地側なる笠を押取つて。拍子舞地藏の住みし所は。からだせん安住界昔釋迦や太子の。御說法の折節黃金の御手をさしあげ。地藏坊が頭を。三度まで擦つて善哉なれやぜ。善哉なれやぜ。末代の衆生を地

藏にあづけ置くなりと仰せばかり蒙り。走り廻りけれどもたれやの人が參りて。お茶一ぷくくれざれば此所へ直りて。七ど入りにたぶ〳〵。八ど入にたぶ〳〵緣日に任せて。廿餘杯呑みければ麴の花が目に上り。右の方へたぢ〳〵。左の方へたぢ〳〵。六道の地藏が酒に醉ふたみさいな。とつぱいひやろの 地フット倒れ。フシ前後も知らず臥しにけり。地小春打笑ひ扨々よい御機嫌かな。此の上はそれなるお供の衆へ些と盃をと立寄れば。茂藏ちやくと身を引いてはつちや怖しと逃げて行く。首尾こそよけれと小春は爲若の御手をとり。見るより早き我が戀の兎角いはれぬ思はくに。お情あれと寄添へば。爲若何の心なく。只うるさしとすり退けばいよ〳〵もつれ縋りつく。袖ふり放せばしゝと抱き彼方此方と付きまとふ。しきりにうたてく爲若は突退け逃げんと仕給ふを。情なしとよ何處迄放ちはやらじと抱き留め。我は元より此の池の底の玉藻と黑髪の。亂れ心の戀路より執着の罪深く。浮かみもやらぬわきもこの采女が執心候なり。御身の姿に愛念の闇浮の塵にかき暮れて。是迄現れ候なりいざさせ給へと手をとり。池に入らんとしたりしをナウ悲しやともぎ放さんとし給へども。放ちもやらず引立てて浪間につれてゆく袖を。茂藏あわて爲若の御手をひかへ。やらじ〳〵と引く所を一如尼走りより。芳藏が後帶しつかと

取つてヤレ文覺樣。あれよ〳〵といふ聲も。共に引かれて水底のあはれ果敢なく沈みけり。地時に不思議や水中より赤色の光り物。ふつと出て文覺の色身に輝けば。ハット目覺めて邊を見れども人もなく。池の面はさつ〳〵と立騷ぎたる浪の中。形は有りし女にて面色怪しき鬼女となり水上に浮みけり。詞文覺きつと見てサテハきやつめが人々を取りけるよ。地エヽあさましや生き乍ら畜生道へ墮しけるかと。齒がみをなして立ち給ふ鬼女は怒れる氣色にて。鐵杖振上げ丁ちやうど打つを飛違へ。むづと組みゐいや〳〵と云ふ聲も松にこたへて颯々と。萬木千山一同に花は嵐の散々に。春の景色も忽に冬枯の峰と成り。猿澤の池と見えしは忽然と熊野の山と三重立變り水とうとうと。地那智の瀧石の如くに文覺はスエテ五體凍りて臥しゐたり。地然る折節四方より五色の魂飛來り。暫く空にたゞよひて一心五色の文字となり。文覺の體中へオクリ一時に〳〵納まり消え失する フシ水の白玉。地打拂ひ其の樣氣高き童子二人左右より下現あり。芳しき手を伸べ文覺の頭より。蹠迄撫下し手を引立てて法服の。衣紋正しく打着せ フシ渴仰あるこそ稀代なれ。地文覺ふつと目を開き前後を見廻し。詞ハアさても不思議や。我が行法の中計りなき夢を見て。心地を失ふ所に思ひよらずの介抱シテ。何れもは如何なる人にやとあれば。

我は大聖不動明王の使人。矜羯羅逝多迦勅を受け是迄來現せしむるなり。地汝發願の日より今日既に三七日に滿足せり。然れば五戒の大略をいはゞ不殺生戒は東方歲星の守り星。人の體にて肝の臟五行の内に木となつて。青き眼に物を見て瞋る心に人を害し。弄びては鳥獸を殺すなり。魂といふ魂を猥りにつかふ事なかれ。詞偸盜戒は西の空太白星と云ふ星の。守りをさめて人々の體に入つては肺の臟。五行に當つれば金にして色白く魄と云ふ魂なり。邪淫戒は北の空辰星と云へる星。地體に有つては心の臟其の色黑く。志内より動き耳に出で。男女歌詠のフシ聲に心を動かせり。地妄語戒は中央にて鎭星の守りなり。體に入つては脾の臟の土となり四季を主としする土曜にて。古今に普く押移り心ばせよりつくる罪。不飲酒戒は南方の熒惑星のたゞしめて。人の身にては腎の臟舌に出でて酒を味ひ。たけなをにして色赤し。詞されば飲酒の一戒は輕きには似たれども。地是より妄語し偸盜し殺生邪淫を犯す事。酒に亂るる人心構へて〳〵等閑に。此の事思ひ捨つるなと。有りし形は山彦の音に。紛れて失せ給ふ。コハ有難し。明王の我を憐れみ給ふよと。感涙肝に銘じつつ又も奇特か松が根に。座を占め居たる夕日影瀧の響も靜かにてオクリ上より〳〵紫雲棚引きて。地袈裟御前の御姿影の如くに現れ出で。

いかに文覺上人我しやうぐ〳〵の緣に由り假に人界の無常を示し。それより御身此の瀧に打れ給ふ其の内。詞夢中に一生の罪惡を再び現し見するなり。されば殺生偸盜邪淫の三つは。御身今迄俗の内に犯せし罪。妄語飲酒は是より後。出家の上にて猶此の障り有るべしと。地かねて愼み給へとや上求菩提の松の風。下化衆生とぞおちかゝる。那智の瀧見の觀音と光りを放ち給ひける。地誠に卽現婦女身位說法の。濟度方便まのあたり。老若男女諸國順禮。手を合しつつ禮しけり鎭護國家の法の德目出たき。御代とぞ聞えける。

右此本者依爲懇望文句音節等
悉校合加祕密令開版者也

京二條通寺町西入町北側　山本九兵衛板
大阪高麗橋壹丁目　山本九右衛門板

竹本筑後掾

傾城佛の原

越前國梅永文藏二重の戀衣

月窓寺沓はきの如來都入

上　月の前の仇し女　二千石の年貢米　此のよれものなるよし

附り　三國の奥州は根引の松　太夫の名取

中　窓の前のこも尺八　十年の年季手形　此の判墨色よし

附り　撞木町の今川は子持梅　氣のすゐな女郎

下　寺の前の迦陵頻　當春の開帳　此の佛御利生よし

附り　東山の薹九重の櫻　賑かな幕毛氈

一　梅永刑部　宮崎だん九郎
一　總領梅永文藏　座本　坂田藤十郎
一　二男梅永帶刀　敵役　三笠城右衛門
一　家老望月八郎左衛門　立役　柴崎林左衛門
一　妹　おさき　玉村衛門
一　若松藤松
一　小姓櫻谷源之丞　柴崎勘太郎
一　同　勝浦友彌　花崎大十郎
一　立花主計娘竹姫　若女　上村吉三郎
一　藤脇一角　村上繁之丞
一　身請の傾城奥州　若衆形　村上竹之丞
一　戀小はる　太夫　岩井左源太
　　坂田六三郎

一　同　小なつ　山下龜之丞
一　つぼね　伊藤庄太夫
一　三國の女郎屋玉屋新兵衛　若林四郎右衛門
一　傾城今川　太夫　霧波千壽
一　かぶろ大吉　山下小才三
一　やりてかめ　松本六右衛門
一　傾城小ざつま　袖島けんじ
一　傾城若紫　霧波花づま
一　同　たかけし　玉川主膳
一　楊屋柏屋作右衛門　道外　天井又右衛門
一　幇間きやらの左七　但馬半兵衛
一　文藏下人あほう三五郎　道外　金子吉左衛門
一　虚無僧かざ山　村上仙左衛門

一　月窓寺法印　坂田藤九郎
一　乾　介太夫　立役　藤川武左衛門
一　狂言作者　近松門左衛門

傾城奥州嫉妬の歌

何時の間にかは秋風の。吹くや越路の山越えて。浪の三國の分ある里へ。惡性通ひの面憎や。提子の水は湯となれど。まだ醒めやらぬ我が思ひ。辛し妬ましあら腹立と縋り附いては泣く許〇俺と其方はなん〳〵七つ八つ。十で殿御を見初めて惚れて。人こそしらね振分髪も。此方ならでは誰にか見せん此の黑髪を。今は仇なる亂心かあゝ。あゝ〳〵あひた見たさに。來たぞやれ。つらや〳〵と思ひはすれど〇まだ捨てられぬ。憎さに餘りて可憫さ增る。扨も命はつれないものよ。君つらや。生きて思ひは愛別離苦の。死んで又來て。その〳〵〳〵。其の先の世で思ひ知らしよぞ思ひ知れ。袖の湊の戀の淵。渡りくらべん淚川。戀の一念盃の。影暗き夜に瞋恚の毒蛇。くる〳〵〳〵〳〵。くるり〳〵〳〵廓通ひもふつつりと。思ひきれ〳〵妬ましや。あら腹立と立つたるは。哀れにも亦恐ろしや。

傾城佛の原

第一

三國の奥州は根引の松。太夫の名取り。岩井左源太撞木町の今川は子持梅。氣のすゐな女郎。霧波千壽

こゝに乾介太夫とて。なが〳〵の浪人ありしが。侍あまたつれ。我が身もゆゝしき上下の。着姿もさすが大小に。朱鞘もかたき心かな。時に介太夫侍どもに向ひ「某此の度思ひ立つこと餘の儀にあらず。越前の國主を梅永刑部殿と申すは。某と同年位と聞く、其の總領を文藏殿といふ。弟に帶刀殿とて有る。然るに帶刀殿より某へ密に使がたつて。何とぞ兄文藏殿を。智略をもつてなき者にし。帶刀殿世を治め度しと某に御賴みなさるゝ。此の事しすましてもあらうならば。知行は望次第とある。身もなが〳〵尾羽をからしたる事なれば。何とぞ世に出る樣にと朝夕願ふ所に。是幸ひと取る物も取りあへず。帶刀殿方へ急ぐ。汝等も悦べ。あつぱれ世に出づれば二度枯木に花咲かせん」と。侍引きつれ行く所へ。向ふより三國の女郎屋。玉屋新兵衛は。

傾城今川を駕籠に乘せ來る。今川介太夫を見て「なうこな樣は父樣でないか」介太夫見て「然いふは誰ぢや」「はて私はな。おせんでござんす」「扨は娘か」と縋り附き泣く。今川言ふは久しう逢ひませなんだ内に。髪も白うしやれた頭にならんした。して母樣は御息災でゐさんすか」介太夫聞き「母は去年の秋相果てた」「何と。母樣は死なんしたか」と涙を流す「やいおせん。己れは胴慾な者かな。母が相果つる時も。三國へ飛脚をたて文をやりしに。なぜに一度の返事もせぬ」今川聞き「三國へは文はこぬ」と不審がる。勅兵衛いふは「最前より承るにお前には介太夫樣でござりますか。私は玉屋新兵衛でござる」「扨は新右衛門の子息か」と云ふ「左樣でござります。唯今文を遣したと。今川を御恨みでござるが。それは此の人の知りやつたことではござりませぬ。總じて傾城となるからは。廓より外へ出ることは。ならぬ法でござる故。たとへ文を見せましたとあつても。お會なさるゝ事はかなはぬと存じ。文は參つたれども。わざと此の人には見せませなんだ」介太夫聞き「其の廓より外へ出ぬ法に。なぜに此所へはつれてござつた」「されば今日こゝへ參つたは。樣子がござります。ちと今川に意見なされて下されませ。まづ惡性にござります。お前より買取りまして勤に出しますと其の儘。やれ

玉屋こそ今川といふ福を持つたなどというて。大分にはやりました。それから間もないに。間夫の男と念頃をして。外の客には逢はぬといやるによつて。いやとかく三國では此の勤はなるまいと。一年前に伏見の撞木町へ預けて置きました所に。こゝにても彼の間夫の男が附添ひ。邪魔をするゆゑ。撞木町からもつれて歸るやうにと人を越しました。それゆゑ私迎ひに參り唯今三國へつれて歸る所でござります」介太夫いふは「やいおせん悦べ。某もながく浪人した所に。此の度さるお大名より。召抱へんとて飛脚來たゆゑ罷下る。もはや世には出た。今に金子大分で取返さうぞ」今川聞き「扨も嬉しうござんす。これ父樣。ちよつと彼處へ借りませう」「親を借るとは」と不審がる「何を父樣初心な。扨私には男がござんす」介太夫聞き「何と男があるとや」「なる程よい男で。かはいがつてくるゝ。私もたんといとしうて。ツイ兒を產みました」「扨は子のある仲か。某此の年になつて。ひとりの娘に迷ひ。頭に雪をいただき武士の道を研くも。汝を取返さん爲なり。扨は其の子は我が爲には孫。口惜しや殘念ながら對面もせぬか」と涙を流す。新兵衛「時刻移る」と。今川を駕籠に乘せれば。介太夫も悲み「娘さらば」と。互に別れなく〳〵も。花を見捨つる雁がねの。親子の心ぞ道理なり。扨も立花主計の

娘竹姫は。藤脇一角御供にて。梅永刑部の館の前に。笠傾けて忍び居給ふ所へ。城内より望月八郎左衛門は。乘物に若殿を乘せ。妹を附け先に立て。我が身は跡より御供し。館へ歸る所に。跡より一角「申し／＼お前には望月八郎左衛門殿ではござりませぬか」「成程望月八郎左衛門は某でござる。何の御用でござる」といふ所を。一角「やらぬ」と切附くるを。ひつぱづし取つて伏せる。竹姫槍にて突かんとし給ふを。是も同じく取つて伏せ「不敵なる奴ばらかな。某に何の意趣があつて斯く振舞ふ。先づ名を名告れ」「此の期になつて。無念なけれども語つて聞かせん。忝くも是にござるは主計殿の御娘竹姫さま。かく云ふは家老玄蕃が悴一角なり。汝が胸に覺えあらん」八郎左衛門聞き「全く覺えはない」「なんと覺えないとや。其の方が心一つで。竹姫樣を捨てさしたな。我が主君と文藏殿とは。許嫁の御夫婦。然れども汝が妹へ御手がかゝつたゆゑ。それを幸ひと悅び文藏殿へ姫のことをあしざまに申し上げたゆゑ。昨日文藏殿より。姫君へ去狀が來た。とかくに戀の敵は。八郎左衛門と狙ひ。今此の體ぢや。汝が心に。我が妹を御臺となし。此お家をしてやらうと見た。サアいふことは是迄ぢや。はやう殺せ」といへば。八郎左衛門驚き「是は假初のことではない。外に方人あらん。屋敷のまはりを穿鑿せよ」

と。侍どもを遣しさて。兩人を起し。姫の塵打拂ひ「さても〳〵かひ〴〵しき御働き」と畏る。一角聞き「何程に騙るとも。油斷はせぬぞ」と擬勢する。八郎左衛門騷がず「私が一通り申し上ぐる事がある。お聞きなされて下されませ。先づあの子を妹が子と思召すによつて。お腹が立つ。あれは三國に隱れもない。今川とて傾城の子でござる。文藏殿には惡性にござつてかの今川に深う馴染重りて。あのお子が出來ました。然れども今川との子と申しては。大殿の前がすみませぬ。某が妹へ御手がかゝつて。若殿がでけたと披露申すも。殿と某が談合でござる。全く妹は產みは致さぬ」一角聞き「それならば子を產まぬといふ證據を出しや」「扨もむつかしや。ヤイおさき。何ぞ證據を御目にかけや」「何をやくたいもない」「はて恥しいも時による。乳を姫君樣に。御目にかけい」といへば。姫傍より。おさきが懷へ手を入れ見て「一角是はやゝ產んだ乳ではない」「それならば子の所は埒明いたが。去狀がすまぬ。是を見や」と出す。八郎左衛門見て「いや是は文藏殿の筆でない」と。思案して「扨は逆心の起すか。エイエイ此の詮議は重ねて仕らう」一角聞き「かやうの惡事を巧む奴を。重ねてとはのびく〳〵な。某屋敷へふんごみ詮議仕らん」と。かけ入らんとするをとゞめ「ヤイ某が思案が有るといふに。

走り過ぎた」と宥め「兩人ながら事のすむ迄は。某が屋敷へ伴はん」と。おの〳〵誘ひ歸りけり。梅永の總領文藏は。鷹野に出で馬に乘り歸り給ふ所に。門外に七十許の侍謹んで畏る。文藏見て「ヤイあの爺は仔細らしい。訴訟ならば家老八郎左衛門にいへ。おれは氣の詰る事は嫌ぢや」「イヤ八郎左衛門は勿論。御舍弟帶刀殿へ申し上げても一圓お取上げなきゆゑ。御前をも憚らず推參仕り候」「何といふ。兩人へ言うても取上げぬ。合點がゆかぬ。して汝が名は何といふ」「某は立花主計が家來。藤脇玄蕃と申す者でございます」「扨は豫て聞及びし玄蕃か」と馬より降り「其の主計殿の息女。竹姫とは夫婦の云名附ある。其の家老の訴訟とは心得ぬ」「さればでございます。申し上ぐるも難儀に存じますれども。御訴訟申し上げまする。扨も三年以前に。御舍弟帶刀殿より。某が方へひそかに御使があつて。何とも汝に言ひかねたれども。米二千石。品々に御用にたつ樣にと。御意あつてござる。成程畏り入りましたと。主君には隱して。某密かに帶刀殿へ。二千石早速御用にたちましてござる。然れども此の米。其の年の暮にも御返しなく。去年も切々申し上ぐれども。ならぬ〳〵と御意なさるる。是難儀は某一人でござるわ。だんな勘定立ちませぬ故。某が取込仕り候樣に申し。何とも迷惑此の時で

ござる。何卒帶刀殿に二千石。今日中に御返しなさるゝ樣に仰付けられ下されなば。有難く存じ候はん」といふ。文藏聞き「扨々憎い弟めかな。己れが入用に米を借り身が顏を汚した。急度いひ附けませう。扨も外聞わるい。ヤイ侍ども。帶刀をこゝへ呼べ」とあれば侍内へ入りかくといふ。帶刀出て畏り「今日は風も烈しうござる所に。御機嫌よく御歸りなされ候段大悅に存じまする」文藏聞き「口上はさつぱりとしたがヤイ物知らずめ。なぜに玄蕃に米は借つた」帶刀はつと思ひ玄蕃を見て「お手前は又こゝへ來たか」「オヽ參上申して。此方へ貸した米の儀文藏殿へ申し上げた」「何といふぞ。內々の米の事を。文藏殿へ申したか。南無三寶」と赤面する「ヤイ帶刀。汝入用の事あらば此の兄には何故にいはぬ。米の三百や四百は取らせうに。ふがひない」と叱る「いや申し兄者人。これはお前の借分のやうなものでござる」「何ぢや。おれが借つたやうなものとは合點がゆかぬ。眞直に申せ」「されば某がふがひないは。三年以前にこなたには惡性狂をなされ。俄に金子入用とて。某に金子を才覺仕るやうに仰せられたれども。私は御存じの如く。部屋住の事なれば思ふに效なく。ふと存じ附いて。玄蕃方へ申し附けてござれば。早速二千石貸しました。其の米を賣拂ひ。金子を此方へ進じましたが何と覺

えがありまするか」文藏聞き「あるもの〳〵むごうある。ムヽシテ。其のくれた金子は。此の借りし米を賣拂ひてこした金か。日も忘れぬ一昨年の七月の十四日であつた。其の時金が要つたは。きつい事ぢやあつたゆゑ。帶刀にいうた。それはさう。女蕃今迄は弟が借つたと思うたが。弟からおれへ借つた。隨分早うすましませう。今少し待つてたもれ」女蕃聞き「とかくお前には申し分はござりませぬ。是帶刀殿。サア二千石を今日お返しなされよ。さもないと主人の手前が立ちませぬゆゑ。身はこゝで腹を切りまする」帶刀聞き「すればどうでも今日中に取らねばならぬか」「おんでもない事。何と是ほどに事を分けて云ふに」と氣色する。文藏止めて「是女蕃。こゝで言分をするとおれが難儀する。卯月の時分には。百姓の年貢の未進がある。それを取つたらばすましませう」女蕃は「イヤお前には言分はござらぬ。是帶刀殿。世話に申す如く。酒盛つて尻切らるゝとは某でござる。エィ腹を切りませう。しかし腹切るからは大殿刑部樣へ申し上げて。御意を受けて腹を切る」と行かんとするを。文藏とゞめ「さりとは此の事を親父に申すと。かゝつた事ではない。おれは勘當せらるゝ」と。帶刀も共に止むるを。振切り奥へ行きにけり。跡で兄弟うろ〳〵する所へ。小姓奥より出で「申し帶刀樣。大殿樣の

御機嫌あしく。急ぎ御出なさるゝやうにと御意がござります」帶刀は「さあ〳〵大きな事になつた」と。御前へ行く。しばらくして帶刀出て「是々兄貴へ申しまする。大殿より仰渡されの書附がござる。慥に御聞きなされ。まづ腰の物を渡さつしやれ」と扨帶刀書附を讀む「抑總領文藏は。度々の惡性筆に盡しがたく。中にも此の度二千石の米を取込み。傾城狂のこと。言語道斷其の罪重し。急ぎ町人への見せしめに。刀を奪ひ取り阿房拂に致すべし。又望月八郎左衛門は。閉門たるべし。若し少しなりとも容赦する者あらば。後日に難儀致すべし。其の爲如件」と讀み。帶刀は「なう兄者人。某も何程か悲しうござる」文藏聞き「扨は女蕃が大殿に眞直に申した故。某を阿房拂と仰せられたな。よい〳〵身より出たる錆。誰か怨に思はん。是非にかなはぬ次第かな。扨も今思ひ出した。三國の奥州が請出された時に。ふつと思ひとまらうと存じたに。燃杭には火がつきよいと。又今川に馴染重なり。二人の中に子まで出けた。今川もおれを可愛がつて。外の客に逢はなんだ。それを親方が聞いて。憎い事とて伏見の撞木町へやつておいた。そこ迄へついて行て馴染重なつた。とかくにおれは阿房拂となつても苦しうない。今川とおれとが中の子を。八郎左衛門に預けて置いた。せめて此の子を守り立て。末々は家を

繼せて給もれ。帶刀賴む」「心得ました。サア時刻移れば如何ぢや。侍杖のあたらぬ樣にそろそろおつ立てませい」「心得ました」と。割竹にて侍どもたちならぶ。文藏泣く〳〵立給へば侍あとより叩きたつる「なう帶刀せめて笠はゆるしてたもれ」「いや笠もなりませぬ」「何とならぬか。白晝に面目もない。文藏がなれるはて」と泣く〳〵歩み行き給ふは。あはれなりける次第なり。扨帶刀は介太夫を呼び「扨も唯今玄蕃となつての詰開き。感じ入つたる事なり」といへば。介太夫聞き「某謀をもつて。文藏を遂ひ失ふ上は。最早こなたの儘になつた。此の上は八郎左衛門を殺す謀を」といへば。帶刀も大きに悅び「いよ〳〵賴み申した。まづ奥へ行き酒酌まん」と。帶刀は内へ入る所へ。望月八郎左衛門は逸散に驅來り。介太夫が入るを突き退け。通らんとする所を。内より門をはたとさす。八郎左衛門は「ヤイ侍ども。家老八郎左衛門が通るに。念はいらぬ早く開けよ」とわめけば「いや八郎左衛門殿ならば。なほ通しませぬ」「不思議な事をいふ。何と某ならば通さぬとや。異議に及ばゝ踏破つて通るが」とたき立つる。介太夫は最前に得入らずして。きのどくがり門内へいふは「某は味方ぢや。門を開き通せ」といふ。内より「心得た」と門を開き。入らんとするを。八郎左衛門先へ入らんと

する。介太夫引戻し。我入らんと爭ふ。八郎左衛門いふは「ヤイこゝな死損め。己れは家中では終に見ぬ奴ぢやが何者ぢや」介太夫聞き「事も愚や某は藤脇玄蕃といふ者ぢや」「なんと玄蕃殿とは。文藏殿と許嫁の竹姫樣の家中か」と騙る時。築地の上より帶刀見て「こりや八郎左衛門門外で喧しう何をいふ」八郎左衛門見て「あゝ嬉しや是帶刀樣。唯今侍が門をしめ入れませぬ。きつと仰附けられて下されませ」帶刀いふは「其方は樣子をしつたであらう。兄文藏殿は大殿の御意で阿房拂にした。又其方も閉門とある故。城内へはかなはぬ。早々かへれ」「扨は大殿の左樣な御意でござるか。さあらば某が若殿樣をつれ參り。今一度御訴訟申し上ぐる間。急ぎ門を開き給へ」帶刀聞き「大殿はかたい御人なれば。なか〳〵かなはぬ」「何と。若殿のお通りでも門は開かぬか。是非もない」といふ所に。介太夫帶刀に向ひ「扨某はどう致しませう」といへば「おゝ汝が儀も。文藏阿房拂となるからは。竹姫にも暇をやる。早々歸れ」といへば。介太夫足早に歸るを。八郎左衛門見て「ならぬ動くな。まづ汝は玄蕃でないか。物をとくと合點せよ。竹姫樣と文藏殿とは許嫁の中でないか。それに何ぞや帶刀殿の暇をやつたと宣ふとて。一言の言分なく。是非もないと足早に歸るは曲者」と。胸ぐらとらへ引摺戻すを。

無理に行かんとするを。一角竹姫をつれ來り「どこへ」といへば「憎い奴め」とせり合ふ。八郎左衛門見て「是女蕃。こなたは一角といふ子があると聞いたが。其の子の顔を見知つてか」女蕃聞き「人として我が子の顔を知らぬといふことがあるか」と笑ふ「これは道理ぢやが。シテ主君竹姫のお顔を見知つてか」「まだたわけを盡す。主の顔を知らぬ家老があるか」といふ。八郎左衛門をかしがり「ヤイ女蕃の誠の子一角はこゝにゐる。主君竹姫樣はこれぢや」といへば「扨はたばかられし」と腹を立て「某は女蕃ではない。乾介太夫といふもの。帶刀殿に賴まれた」と斬つてかゝるを。帶刀下知をなし。入り亂れて戰ひしが。八郎左衛門に斬立てられ。皆城内へ逃入つたり。一角おつかけんと逸るを。八郎左衛門とゞめて。竹姫の御供し。屋敷へこそは歸りけり。かくてさる大名の下屋敷と見えて。座敷も心有明の。月待つとてか賑やかに。三味彈く手元しなもよく。障子にうつる影法師。嬉しはづかし閨の中と。歌をうたうて女房衆。月やおそしと待給ふ。かゝる所へ文藏は。紙衣の單衣身に纏ひ。古編笠に小脇差。さも見苦しき姿にて。月窟寺へと志し。暗さはくらし道もさだかならねば。彼の下屋敷の軒に佇み。歌三味線に氣を浮かし。さま〴〵ひとり仕方をしていふは「さても〳〵あの歌は。三國の奥州が節を

附けた歌ぢやが。こゝ迄もはやるか。扨々どうやら面白うなつた。まづ暫く樣子を聞きませう」といふ時。内より侍女三方にお鏡の餅を乘せ。庭へ供へ奥へ入る。文藏「さゝさらばちとお月樣と談合しませう」と。そつと内へ入り。かの餅を攫み。懷へ入れ歸らんとする時。又侍女御酒を持出で。三方に載せるとて。鏡なければ不審がり「いやとかく手水鉢の上に置かん」と邊を搜し。文藏の頭をそつと撫で。手水鉢と思ひ。御酒の載せある三方をすつぽりと頭へきせ内へ入る。文藏幸ひと三方被りながら。錫を口によせづつと飲み「よい氣味」といふ所へ。局出て侍女を呼び「手水つかひたし」といふ「心得ました。まづ三方を取りませう」とそつと取り手水鉢かと思ひ。文藏の頭をこち〳〵たゝき「ハァ水がない」局聞きて「いや寒ずる故。氷が張つたであらう。杓では破れまい。それ臺所へ行き。鐵槌を取つておじや。氷を叩きみしやいでくれう」といへば「是はならぬ」と文藏は垣の外へ逃げ給ふを。侍女見附け驚き「何者ぢや」と咎められ。やう〳〵かしこへ忍びけり。局奥より灯を持ち出で「これ〳〵さきの奴がこゝに風呂敷包を落しておいた」と。開けて見れば文なり「さても〳〵胡散な事かな」と文ども披げたて見る所へ。座敷より奥州は出で「ヤイ何を喧しういふぞ」「されば奥樣變つた事が

ございます。さきに大黒舞の樣なものが。爰へ來てゐました故。垣の外へ追遣りましたが。其の男が此の文どもを風呂敷に包み。爰に落して行きましてございます」奥州は「其の文をこちへ見せよ」と取り。中で二つ懐へ入れ「是侍女ども此の文を落した者は外にゐるか。内へ呼んで話をさして。顔を俺に見せよ」と我が身は座敷の闇に。炬燵に腰かけゐ給ふ。侍女どもは「是是そこな人。何ぞ落しはしやらぬか」「サァなぶらぬと風呂敷包を早う下され」といふ「心得た」と風呂敷に。文ども引きちらしほり出せば「是はならぬ」と文ども皺のばし勘定して見て「是是大事の文が二つ見えぬ。出さしやれ。中で一の寶物がない。サア早う〳〵」とせがむ。闇より奥州「是か」と出す「それ〳〵出た」と頂き。風呂敷に包み「扨も意地の悪い女子衆や」と色々話しするを。闇より奥州見れば。古への馴染の文藏なれば。是はと涙流す。かくとは知らず文藏は侍女どもにいふは「こなた衆の俺が見苦しい姿でゐる故。可笑いさうなが。此の男も傾城づかを握つたなれの果ぢや。昔を思へばいつそ此の紙衣もましか。ちと昔の話をして眠を覺さう」といへば「さあ聞きたし」と侍女ども一所へこぞりよる。奥州は侍女に云ひ附け。火桶をやりければ。文藏見て「是は忝い」と前によせ紙衣で包み「さて話しませう。（私にいふ。此の獨白を第三の終に附載した。）

まづ此の樣な形になつたは。三國で隱れもない女郎に奥州とてありしが。其の女郎にふと馴染重り。めつたに通ふ程に〳〵。家老の意見面白い。親の勘當心得たと。三國通にかゝつてゐた。或時流連をして四五日も互に。我を立て詫ごともせなんだ内に。何國の者やらッィ奥州を請出した。それを聞くとはつと思ひ。とんと轉けて泣いたが。三日が間泣き暮した」と語れば。奥州我が身の事なれば。涙は瀧の如くなり「さて奥州に離れ。斷然と思ひ切らうと思ふ所に。また今川といふ女郎に逢ひそめ。二人の中に子まで有る。此の樣な姿もふたりの傾城ゆゑ」と語る。奥州は「單衣では寒からう。殿樣の着る物を」とあれば「あい」というて着る物を文藏に着せ。内へ入る。文藏は「忝い」といへば。奥州闇より出で。互に縋り歎き「文藏樣私は今は□□□□。併しこなさんの事を明暮思ひ。今の男に遂にしつぽりとしたことはござんせぬ。又今川殿の事も。子迄ある中なればいとしがつてやらんせ」と話する所へ竹姫來り。文藏を見附け「おれを捨てゝ外に。女房を持たせ給ふ」と。文藏をつれ行かんとし給ふ。奥州は竹姫をとどめ「こゝはおれが所ぢや。文藏樣もやることはならぬ」と。外へ突出し戸を締めければ「無念な」と其の儘倒れ伏し給ふ。奥州は文藏と盃をしてゐる所に。不思議や竹姫の胸より。魂火

焔となりまひあがり。奥州が盃に入ると其の儘。奥州目の色變つて。竹姫の怨をいふ。文藏難儀し逃げんとするを。止むる嫉妬怨の數々。角の生ゆべき勢も。又ひれふして倒れけり。斯る所へ帶刀は來り。竹姫そとに伏しゐ給ふを見て。やがて縛り樣子をとへば。□□の事をいひ給へば「さては文藏此の所にゐるには極つた。侍どもさがせ」といへば。皆々槍を拔き亂れ入る。奥州文藏を屋根越に落し。侍一人槍引つたくり。あたりの井戸へ突きはめ。上より槍にて刺し殺し「さあ文藏は井戸へ突きはめ殺した」といへば。帶刀悅び「でかした」とて。扨介太夫に向ひ「首尾はよい」といへば。侍ども大殿を乘物に乘せ來る。刑部は「帶刀。身をいづくへつれて來る」と宣ふを。介太夫むたいに大殿の肌を脫がせ。侍どもにひつぱらせ。太刀を介太夫拔き。大殿の腹一文字に切りければ。あつとばかりが最期なり「さあ望月八郎左衛門をこゝへ呼べ」と。侍かくといへば。八郎左衛門は白き小袖に袴を着。息を限つて來りつゝ。大殿の切腹を見て涙を流し。扨帶刀に向ひ「竹姫樣と夫婦になり給へ」といへば「もつとも」とたばかられ。竹姫を八郎左衛門に渡す所へ。一角かけ來れば。やがて竹姫を渡し。扨帶刀にいふは「唯今は姫を取らん爲の謀」といふ。帶刀聞き「ヤア文藏は此の所で。最前井戸へはめ殺した」

といへば。皆々肝を潰す所へ。奥州かけ出で「最前屋根より落した」といへば。八郎左衛門悅び「出來ました奥州殿。此の上はいざ我が方へ伴はん」と。扨帶刀介太夫に討つてかゝる。兩人かなはじと逃げて行く「よし〳〵今一旦討洩らすとも。重ねて本望遂げん」とて一先づこゝを立去りけり。

第二

こゝぞ情の問屋なる。三國の揚屋柏屋作右衛門が方には。禿ども踊の稽古をする所へ。幇間伽羅の佐七は柏屋へ來りければ。作右衛門出て「何と久しや。此方へは見えぬ事ぢや」「されば此の中は鍵屋へばかりゆく。扨ちと見事な物を持つて來た。馳走をなされ。さる田舍の大盡ちやが金はいかいことあるさうなが。氣の毒なは吝い」といふ所へ。三五郎は大盡となり來り。亭主に逢ひさま〳〵阿房を盡す。亭主盃頂き。一つ受け「何と佐七。こゝらを」と目はじきする。佐七は「何と旦那。くわつと亭主におはづみ」といへば「心得た」と腰より貫差なる錢を取出し。十文紙に包みはづめば。皆々笑ふ「いやならばおきや」と取り返す。亭主いふに「何ぞしやれた料理を致しませう」といへば。三五郎聞き「いや〳〵しやりかうべは□□□も。はか

りくぢらがよい」と二階へ上る。うきふしの身も竹の葉の。流も清き今川は。繰出歩みしつと りと。柏がもとへ來れば。作右衛門出で「なんと太夫樣。今日はどういふ事でお入りでござり ます」「成程今日は。ちとあひたい人があるゆゑ。こゝへ來たわいな」といふ所へ。編笠深く 被たる男。つか〳〵と二階へ上るを。作右衛門とゞめて「誰ぢや」といへども答へず。無理に 奥へ行かんとする。今川見て「作右衛門殿。あれが今日の客ぢや」といへば「イヤどうでも合 點が行きませぬ」と。笠引取り「ヤアこなたは。玉屋新兵衛ではないか」「扨は今川殿□」「 □□やりにござつた。どこの國に女郎屋の身として。内の女郎と此の樣なことがあるか。きつ と抱主仲間の作法に致さん」とかけ出づるを。新兵衛とゞめ「成程其の方のが尤ぢや。此の始 末すぐにいはう。はづかしながら今川に心を懸け。度々いへども戀をかなへてくれぬ。それゆ ゑ此の中も。とかくこの戀がかなはぬと。おれは焦れ死に死ぬると。せめていうたれば。今川の いやるには。それほど思ふならば。年季手形を渡せ。手形さへ取れば他人ぢや。主でも内の者 でもない樣にして。快く逢うてやらうといふが嬉しさに。親の目を忍び。手形を盗み出し今 川に今日渡す。是程に思ふ戀ぢや」と涙を流し語れば作右衛門も涙を流し「それ程の事を辨へぬ

男ではない宿をせう」と新兵衛を二階へ上げ。我が身も奥へ入る。扨今川しすましたと二階へ上 る所を。三五郎「やらぬ」と取付く。今川見て「汝は三五郎ではないか」「三五郎とは曲もな い。お前故に旦那殿は。勘當をうけて」と涙ながす。今川驚き「何といふ文藏樣は勘當とや」 「是太夫樣。勘當もあるに。侍どもが大勢よつて。ヤレ惡性者というて割竹で追つ立てますれ ど。大殿の御意なれば。何とも宣はず。無念ながら阿房拂にならしやつた。それから弟の帶刀 が。惡心おこし。大殿樣を殺し國を取り居まする。扨それから文藏樣は。あさましい形にな しやつて。宿とても人が貸しませず。門のかげに寢給ふこともあり。雨が降れば橋の下にて夜 を明かし給ふ」と語れば。今川は前後もしらず泣き悲む。三五郎云ふは「今日私が參りしは。お 子の事で參りました。文藏樣の仰には。藤松を育てたき事なれども國へ忍入り。親の敵を討た ねばならぬ。すれば足手纏ひなればこなたへ渡す。もしいやと思召すならば。不便ながら手に かけ殺すと宣ふ」と語れば。今川は「是は難儀な事かな」と。一入涙流す。三五郎は「私に兎角 御返事はなりますまい。追つ附け旦那殿が。虛無僧となつて此所へござらうとある間。ぢきに ちよつとお話しなされませ」といふ所へ。小ざつまといふ女郎。柏屋へ來り「今川樣はこゝに

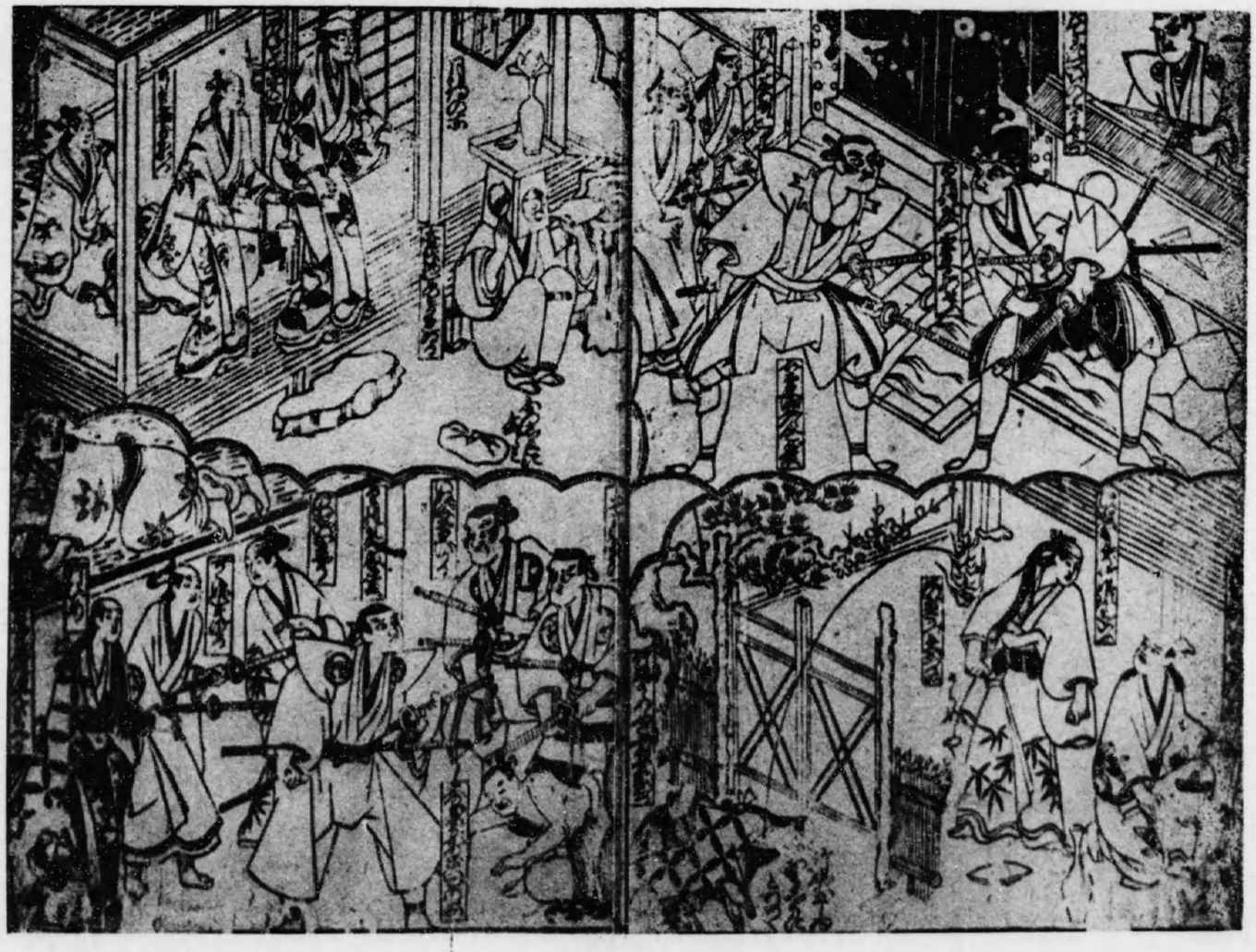
か」と奥へ行く。然る所へ文藏は。虛無僧風山を頼み。其の身も同じ尺八の。戀慕や涙なりぬらんと。柏屋が門に立ち居給ふ。今川それと見るよりも。米を盆にのせ「是やりませう」と差出す手も涙で顫ひ聲出です。文藏も涙ながら樣子をいはんとする時。座敷より今川を呼べば。是非なく後にと涙ながら座敷へこそは行きにける。扨三五郎は文藏に向ひ。斯樣〳〵と語る「扨おれはこゝに後までゐるであらう。汝は内へ歸つて悴をつれて來い。又奥州にも首尾はよい案じてたもるなといへ」と。三五郎を宿へ歸し。さて虛無僧風山にも禮をいうて歸しけり「サア嬉しや。是からは人に見付けられぬ樣にしませう」と蒲團をきて炬燵のやうにしてゐる所へ。若紫奥より出で「さてもいつもない炬燵がある。さらば」とあたれば。文藏足を若紫が前へやる。若紫肝潰し「誰もないか」と人を呼ぶを。文藏やがて取付き「こなたは隱れもない。情しりと聞く。斯樣に身をやつすに。曲もない」と騙せば「扨はさうか」と傍へ寄り顏を見て「此方は私に文を來さしやつたか」「くしたかとは情ない」といふ「いや合點がゆかぬ。それならばおれに惚れたといふ心中見しや」「心得た」と指を切らんといへば「扨は心中は知れた。後に逢ひませう」と奥へ行く「サアしすました。いくたりでも此の手がよい。しかし今川もいつ迄

もこにゝ置く事よ」と待居る所へ小ざつま出づれば「南無三寶邪魔」と文藏は隱れる。小ざつま見て「誰ぢや」と疑ふ「いや苦しうない。我は君ゆゑ」と涙こぼして騙す。小ざつま聞き「何と私に惚れて身をやつしこゝへ來た。嬉しや〳〵。其のやうな心中な人をまつてゐた。しかし何ぞ證據を見しや」文藏いふ「證據には此の尺八で五つの指をたゝきみしやいでのけん」といへば「まて暫し」と。小ざつまとゞめ「最早心はしれた。幸ひ是にふとんがある。こゝでちよつと□よ」と文藏を捕へ。寢てかゝる。文藏迷惑し「是女郎。志は嬉しけれども。餘り急な」と上より抱きつきゐる所へ。今川奥より出て。此の體を見るを知らず。文藏は小ざつまにいふは「君の情は死んでも忘れぬ忝い」と後を見れば。今川立つてゐる。文藏はつと思ひ「是をひよつと惡う合點すると。さん〴〵の事ぢや。是女郎。何と重ねての事になされて。今日は許して下され」小ざつま聞き「いやどうでも」と顏を上げ今川を見て「合點々々。是々。そこな男。扨は今川樣の見てぢやによつて。羞しいと思うてねやらぬの。是今川さま。あの男の可愛いといふは。推量してくださんせ。命でもやりませう。あの男も。私に指切も古い。尺八で五つの指を叩きみしやいで見せうといはれる樣な心中ぢや。今川樣ちと取持つて下さんせ」といふ。

文藏迷惑し「是々女郎。こなたは餘り念頃過ぎて氣の毒な」といへば「其のいやがる顏がなは好いた」としなだれかゝる。今川は「これ小ざつま殿。私が取持ちませう」と蒲團を着せ褥さし。文藏に取附き。さま〴〵怨をいふとて。小ざつまをとん〳〵と踏めば。小ざつま「誰ぢや」と起き腹を立てるを。文藏詫ごとをすれば「謝罪らば堪忍する。扨これ今川樣。今日は定めてしつぽりでござんしよ」今川は「はてやくたいもないこと」といふ。小ざつま聞き「いや〳〵隱して逢ふが面白いげな」といへば。文藏聞き「申し女郎樣。あの女郎も戀があるか」と尋ねる「あるも〳〵きついこと」と。新兵衛と今日ここで逢ふ事を語り「よい心中でないか」といふ。文藏驚き「扨々其の樣な事はする者はない。しかし又こゝのもめごとぢやまづ主と懇すれば。朝夕の菜に違ひがある。はや明日からでも。その儘鰤の樣な物ならば一切に。五分づつ大きに切れば。十切の前で五寸の違があ。又精進なれば新兵衛が手づから麩などを。油揚にして太夫にする。何が麩の大きなれば。油で揚ぐれば。太鼓程にふくれる。しかし。ふくれても中は空でござる。今川の惡性殿」といへば。今川聞き「是にはたんと言譯がござる」「ぬかすまい。己れゆゑに。此の如くあさましくなつた。殊に子まであるでないか。今迄心を盡

し□□□□犬も馴染めば尾を振るわ。いや〳〵とかく新兵衛と念頃なされ」と。振切るを取付けば「むさい。しをるな」とつき倒し。傍へ退く。今川いふは「最早言ひ分はないか。まちつと言や」「口がある。いはないでは」「是文藏殿。私は今日新兵衛に逢ふはの。何ほういやなれども。こなたと添ひたさに」といへば。文藏は腹を立て「よい加減につくすな。おのれ新兵衛と物しをつて。其の上膳が何の嬉しからう」「是まあ聞きなされ。をとこ。新兵衛が私に上り詰めたと見たゆゑ。それ程に思召すならば。望みをかなへて下され。それならば戀をかなようといひければ。命でもやらうといふ。そこで私が斯樣に騙つて。他人となりたいというたれば。此の年季手形をおこした。是からは何處に構ひはない。親方が何といふとも。手形なければかなはぬが。何と是程に思ふに情ない」と涙を流せば。文藏手を打ち「女珠樣かな。あやまりました。許して」と拜み「機嫌なほしに。抱きつかう」と抱くは深き契りなり。かゝる所へ奥州は。三五郎に子を抱かせ來り。やがて今川に會せ。互に積る物語。時刻移れば文藏は「いづくへも立退かん」と。打ちつれ出でんとしたりしが。奥州いふは「念の爲手形を吟味なされ」といへば「是は智惠かな。生きた釋迦ぢや」とやがて年季手形を見て「是々。此の筆蹟は今川見知つて

か」「成程父様の手」「奉公人おせん判。是も本の判か」なる程。扨親の名は。乾介太夫」文藏肝を潰し「此の乾介太夫とは。今川の爲には伯父か兄か」「いや〳〵其の樣な人ではない。本の父樣」といへば。是はと肝潰し「皆々こなたへ」と。今川が傍へよりぬ。今川ふしぎがり「是は不思議な。手形を見て贋ならばよいが。眞のでは氣の毒なと。皆わしが顏を眺め。うろ〳〵とさつしやるは。合點が行かぬ」といへば。文藏聞き「これ今川。暇をやつた」「何と暇をやつたとは」と奥州を見て「オヽ聞えた。是奥州殿。こなたは私が暇を貰うたなどとあらば。詫言でもしさうな人がおし默つてゐやるは。此の今川を去らして文藏殿と。夫婦にならう心ぢや」といへば。文藏聞き「神かけてさうではない。ちと樣子がある」と氣の毒顏すれば。今川は「それならば私には隱し給ふか」と。文藏の刀を騙し拔き。小指を切つて心中を見せれば。人々はつと驚く。揚屋作右衛門見付け「出合へ」といへば。玉屋新兵衛伽羅の左七奥より出づる。文藏見て「久しい作右衛門」といへば。新兵衛いふは「樣子を承ればこなたは慘い人かな。今川が私を騙り。手形を取り他人となり。今こなたと添はんといへば。嫌な顏をなさるゝ故。扨は心中を見たい事かと。今指迄切つた。是程迄に大切にするに。こなたは合點の行かぬ顏をなさるゝ。それは



胴慾といふものぢや。此の上は今川。おれが腰押して女房にさすぞ」といへば。文藏聞き「新兵衞頼もしうござる。此の上は悲しい話をしませう。今川が親の介太夫は。弟帶刀に加はり。某を阿房拂となし。剩へ親の刑部殿も介太夫が手にかけ殺した。なれば某が爲には親の敵。國の敵。其の敵の娘は今川ぢや。それが何とて女房にならん。因果と因果が寄合うた」と語り給へば。今川聞き「謂を聞けば尤でござんす。しかし親は悪人でござれども。私はこなた樣と一所に。奈落までも夫婦でござる」文藏宣ふは「これ今川。ここでこそ潔ういやれども。追つ附け親介太夫が首取つて。そなたに見せたらば嬉しうはあるまい。夫婦一所に寢ても。親の事を思出した時は。口では言はないでも。心に思ひ居れば。いまの別がいつそ増ぢや。子まである中を。何が別れたからう。今そなと夫婦にならば。やれ女房と親と思ひかへ。敵の娘を女房にしたなどと取沙汰あらば。某が恥辱なり。何たる過去の因果かや。とかく暇をやつた。扨此の藤松もそなたへ渡す。後々は出家にもしやれ。親子の縁も是迄」と涙ながら今川に子を渡し「その方も。親の菩提を弔やれ。幸ひ月窓寺は某が縁ある寺なれば。此の寺に行き。菩提を弔や。誠に此の所は。昔祇王祇女佛御前。三人の遊女の寺なれば。參詣し給へ。最早歸る」

と。泣々別れ給ひける。扨も介太夫方へ帶刀來り「聞けばお手前に火の札を打つたとある」介太夫聞き「成程打ちましてござる。今夕詮議致しません」といへば。帶刀は歸る。所へ今川は。子を負ひ來り。傍に置き。門の所へ行く。介太夫それとはしらず。闇討に藤松を切る。藤松手負ひよろばふ所へ。文藏八郎左衛門忍び入り。介太夫と戰ふを。今川かけ出で樣子を語れば。介太夫はつと驚き「聟殿と知らいで惡事をした」と歎く。かゝる所へ。帶刀來るを。介太夫騙り取つて伏せ刺殺し「扨文藏殿。某を斬り給へ」といへば「親の敵覺えたか」と。太刀のむねにて打つ眞似し「サア敵は討つた」と悅ぶ所へ。奥州は竹姫一角諸共來り。皆々つきせぬ緣なりと。介太夫も禮義を述べ。再び治まる梅永の。家のさかえぞめでたかりけれ。

第

こゝに月窗寺の住寺は。都へ上り。沓はきの彌陀如來。東山にて開帳あれば。竹姫奥州今川は。音樂の役人となり。佛事供養し給へば。洛中の人々群集をなして參詣す。東山の繁昌。櫻かざして幕毛氈。歌ふも舞ふも法の場。めでたき御代のしるしなり。

二條通寺町西へ入北がは
正本屋　山本九兵衛新板

けいせい佛の原附錄

（御前義經記 西澤一風著 元祿十三年刊 卷之八）

上方土産女郎歌舞妓

梅川文藏身の上物語

△けいせい和歌山。梅川文藏となり。紙衣に頭巾。奥州が前にかしこまる。腰元局口々に。さあ傾城の話がはやう聞きたい。どうぢや〳〵。

△言語道斷かゝるむつかしき事を御尋ね候ものかな。委しき事は存ぜねども。あらまし御物語申さうずるにて候。元來身は越前の者なりしが。生れついての惡性狂ひ。親の諫め世の譏りもかまはず。あけくれ三國の傾城町に通ひ。よつほどと又よつほどたわけを盡しました。其の内地女房は嫌ひで。咄を聞くさへ頭が五千程にわれます。とかく傾城のはなしなれば何時にてもござれ〳〵ぢや。扨私が逢ひました奥州と申した女郎は。器量

といひ骨柄と申し。なかんづく目づかひにて大方の男がころりとなります。それのみならず琴三味線が上手。茶の湯は細川の流をくみ。手は上代やうにてさら〳〵とかく筆の命毛もたまる物ではない。自身歌を作り節を附けてうたふ事が名人ぢや。されば八月十五夜の月見。何れの人も歌をよみ詩を作り。或は音曲手なぐさみにて月を見る。身は其の格をかへて三笠屋といふ揚屋の座敷に蒲團を敷き。其の上に奥州と二人とんと寢て月を詠めた。時に此のなんびんが申すはあの月はそち。月の中にある桂男は身ぢや。偕老同穴比翼連理は古いというた。時に太夫がこましやれた事をとひました。昔よりよい中を水洩らさぬと申すはいかやうな事をいひますと尋ねました。私が返答にはそれは。其方とおれがやうに睦まじくよりそひ。じつと締合うた中へ水を流したりとも。中々通らぬといふ心ぢや。然らば流して見んとあたりを見れども水はなし。折ふし枕元に燗鍋があつた。是幸ひに兩人べつたりと抱きつき。上からかの酒を瀧の如く流したれども通らぬ。太夫見やそちと二人が中は水洩らさぬ事はさて置き。酒洩らさぬ中ぢやと夜と共に戯れました。是程深い中なれども。ふとしたことゆゑ今川といふ女郎にあひました。此

の仔細は此の男元來短氣に生れ付いて。まてしばしがない。太夫つね〳〵存じてをるゆゑ。揚屋へいつも早う出で。首の長うなるほど待つてゐる。或時三笠屋へ到れば太夫樣は御出でなされぬといふ。扨は外に面白いことが有つて。道寄りしてをると心得。はやむつと氣になると。ほむらがくら〳〵煮えかへつてゐる所へ太夫がぬつと來た。われは今迄何してゐたと。あたまからしかつたれば。急かぬ顏して身拵へしてゐましたといふ。身拵へは誰に見られんためぢや。末かけて逢ふからは髮も油もいらぬこと。姿をかざつて逢ふはとつと昔のこと。目に角立てゝいうたれば。何が腹を立てゝそんな顏して見せさんすぞ。なんぢや顏付がわるいといふか。但し身が顏のすまひが變つたか。俄に見とむなうなつたら見て貰ふまいというて座敷を立ち。ひとまづ屋形に歸り。つく〴〵思ふは是近年の出來口說。いつもさへ詫言するほどに。今にも文が來たらばかう返事をせんと。左手に硯右手に筆を持ち。今や〳〵とまてど暮せど詫言はさておき。おとづれもない。扨はきやつめが身に詫言させんはかりごとゝ見えたり。こゝは男の意地なれば。面當に外の女郎に會うてせかせんと思ひ。三笠屋が隣家。柏屋といふ揚屋へ行き。ひそかに亭主を呼び。身に逢ひさうな女郎呼んでこいというたれば。お前樣のお逢ひなされませうは今川樣ぢや。早く其の女郎つかんでこい。心得たりといふ所へ今川がぬつと來た。あたまから逢うて下されというたれば。奥州が事を尋ねた。男冥利のきました。しからば御目にかゝりませう。忝いといふ聲もわざと大きに。これ今川どの。こなたゆゑなら命なりともお望次第とたはむるゝ。隣の三笠屋にて奥州がこれをきゝ。白無垢一つになつて走り來り。なんのことなしにおれが胸ぐらをとつて。是こゝな男畜生。誰にことわつて此の女郎にはあやる。戀があつて逢ふがなんとした。戀が有るというた口は是かとしたゝかどづいた。今川が腹を立て昨日まではこなたの男。今日よりはおれが男をなぜ毆きやつたと取り附く所を。太夫が腹を立て。男といふが氣に入らぬと。今川をとらへ目より高く指上げ。えいというて八間眞中三尺五寸投げた。やれ今川が奥州に投げられたとこそいへ。今川方の女郎三百五十人柏屋が座敷へつめかけた。是を聞いて又奥州方の女郎二萬餘騎引連れ。えいや〳〵とをめいてくる。其の日買うたる客ども。俄に女郎が見えぬというて蒲團を振ひ。喧嘩があると聞いて見物に行く。宿屋の内は人のす

しぢや。下男が棒にて追ひ拂へば。若松といふ女郎あわてゝ二階からおちる。花車は逃げざまに豆腐の上へこけて。顔眞白になりたれば。そりや幽靈が出たとこそいへ。又動顛して逃げしなに。つりあんどんがおちて頭をやく。遣手の龜は摺子鉢の上へこけ。目に唐辛子味噌が入つて。のう死にますといふに驚き。そりや醫者の玄德どの。按摩のりんさいよんでこいといふを間違へ。山伏の正寶院がわせて。錫杖をふつて神おろしをやらる。角助が腹をたて。錫杖ひつたくつて捨てたれば。蛭子棚に中つて大黒どのゝ鼻柱が闕ける。屋根では猫がさかる。門では犬がかみあふ。裏では鷄がけあふ。そこらうちの揚屋は上を下へと返したり。其の中にも分別らしい爺がいふには。此のもや〳〵は此の客から起つたことぢやというて。何のことなしに身を駕籠に乘せ歸しをつた。其の後身は遠慮して四五日遠ざかつてゐたうち。何者とも知れず奥州を請出していきました。それを聞いてがつくりと力を落し。つく〴〵思案のするに。奥州に別れては世の樂みもない。なまなか世をたつる故。うき事をのみ聞くものかな。彼を見是を聞くときは一炊の夢ぞかし。せめて今迄の惡業を去つて。善心にもとづかんと思ふ心の一筋に。さいはひ信

濃の國善光寺には知方のものゝあるをたよりに彼の寺にまゐり髪をも下し出家となり。一念彌陀佛の道に入らんと存じきつたる心から。よしなき懺悔物語。あらはづかしや〳〵さうやう樣へのお暇乞。

阿彌陀が池新寺町

大坂下りの身いはひ

作者　近松門左衛門

上　故郷のかへり花　附り　一番太鼓七つになる若殿
中　おもかげの嬰兒　附り　二番鶏國にとまる大名
下　ものなりのわさ米　附り　三番舟こぎ着けた十月

一　本田平太郎の後家ささらぎの前　太夫　霧波千壽
一　妣おしま　坂田六三郎
一　家老山上勝右衛門　立役　柴崎林左衛門
一　家老山上勝右衛門女房　袖島源治
一　同　弟小七郎　村上竹之丞

一　家老嵐山可右衛門　三笠城右衛門
一　同　子はな市　坂田荻之介
一　平太郎てかけお巻　玉村衛門
一　同　若殿よし丸　早川佐野之助
一　安樂坊　田島半兵衛
一　星川藏人　天井又右衛門
一　妹娘皐月の前　太夫　岩井左源太
一　弟星川主膳　山下小才三
一　妣お雪　山下龜之丞
一　同　お霜　霧波常世
一　伯父星川遠平　藤川武左衛門
一　下男彌五兵衛　若林四郎右衛門
一　家主木や新右衛門　三尾彌三右衛門

一　同　女房　　霧波花妻
一　在所のうば　　松本六右衛門
一　小性堀江采女　　村上繁之丞
一　同　橋江賴母　　花崎大十郎
一　阿彌陀が池住持　　金子吉左衛門
一　庭造り藤助　　座本　坂田藤十郎

當年の祝儀　座ふるまひ　こんだて

亭主「罷出でたるものは。御存じの不調法者。太郎冠者あるかいやい　太郎冠者「御前に候

亭主「汝呼出す事別の事でない。誠に町中樣御贔負によつて。さして變つた料理でもな

い所に。御機嫌よろしう召上られ。あり難いと申さうか。忝いと申さうか。冥加に叶う

た仕合ぢや。いよ〳〵お心がはりなう。來年もさらい年も後來年も。新米のわさ米。一

粒萬太夫の三階松に。梅鉢のたいこ飯つぎの冷めぬ樣に。御贔屓を願ひ奉るため。御禮

に參る程に。急いで供を仕れ。太郎冠者「千秋萬歲一段とようござりませう。おめでたい

おめでたい。

阿彌陀が池新寺町

彌生の前二代のまぼろし

出來狂言

第一

歴々なる侍夫婦づれにて。供廻り美々しく引きつれ。堤に休み居る所へ。廿ばかりのさも美しき女。風呂敷包をわへがけ歩み行く。侍見て「これ〳〵女郎。見ればそなたも難波へ下るさうな。身も大坂へ行く。道伴になりませう」女郎聞き「忝う御座りますが。私はお前の樣な殿達と。お伴になるものでは御座りませぬ」女房聞き「これ女郎樣。これは配偶で氣遣な人でない。私がお伴になりませう」「扨は御夫婦樣か。私は四五日以前にも下る者なれども。名殘惜しい事が御座んして。斯樣にうろ〳〵としてゐますれば。今日下らうも確と知れませぬ」「ム、扨は殿御があつて。その名殘惜しいであらう」「されば私はさるお大名の妾で。若殿をまうけ。七歳になり給へども。隱してある處に。此の度殿樣お果てなされ。御世嗣がないと有つて尋出され。

其の子は殿樣になり給へども。本妻のお御臺がある故。そのお子となし。私とは親子の久離を切られました。今別れ又逢ふことも叶はぬ故。今一度逢ひたさに。うろ〳〵とし下り兼ねてゐまする」侍聞き「シテ其の若殿の名は何と申す。そなたは誰ぢや」「イヤ名を申すことはなりませぬ」「オヽ云はれぬも道理ぢや。尋ぬるに樣子がある。某から申さう。當國の主本田平太郎殿の家老。山上勝右衛門とは身が事ぢや。大坂へ下るを不審に思はれう。主人平太郎は善光寺の如來を信じ。毎年信濃へ參らるゝ。當年も參られしが。あの方の俄事でお果てなされたと有つて。御骨ばかりが都へ上つた。御遺言に浪華の阿彌陀が池に堂を建て。新善光寺と名付け。その寺へ骨を納めよとの事なれども。後目の御世嗣なさに。その詮議をする所に。相家老嵐山可右衛門といふて。身が女房が兄ぢや。この者が詮議して。お妾お卷殿といふに。吉丸樣といふ七歳になる若殿を伴れて出で。まづお家が治まつた故。扨身は御遺言の通り。お骨を納めに今日大坂へ下る事ぢや」「さては左樣か。ナウその卷と申すは私でござんす。お前を賴む。今一度若殿に逢はせて下さんせ」「さてはお卷殿とは此方か。最早大坂へ下つてござらうと思うてるに。沙汰の限りな。御對面は叶はぬ。殊に此の度の儀は可右衛門差配なれば。某が心には任

せぬ」女房聞き「親子の名殘なれば御道理ぢや。これ勝右衛門殿。可右衛門殿は私が兄の事なれば。どうぞお前の心得で逢はせて進ぜ給へ」「實にいへば一家の事なれば。別儀は有るまい。何として逢はさうぞ」といふ所へ「若殿御入り」と呼ばはれば「幸ひぢや。待受けお詞を掛けう程に。片蔭から篤と見て。暇乞にし給へ」「あゝ忝い」と忍びゐる。所へ可右衛門先に立ち來り「これは勝右衛門殿には。大坂へお下りの筈ぢやが」「されば方々へ暇乞申し。今になりましたこれは若殿の御入りさうな」「されば御目見えなされ」と戸を開けば「勝右衛門とは其の方事か。萬事政道を賴み申すぞ」「ハテおとなしや。ヤイ女ども。サア今ぢや。篤と若殿を見ませい」とお卷に見よと心を注け「まことに屋敷へ御入りなさるゝからは。乳房の母樣の逢ひたがつて。見てござらうも知れぬ」可右衛門聞き「母御へは大分銀を遣し。久離を切らせたが逢ひたいと申すか」「イヤさうではない。母御のことを思召すなと申すのぢや」「それは御利發で。お御臺樣が母御ぢやと仰せらるゝ。則ち今日親子の觴をさせまする」女房は「ナウ私は忘れて。お御臺樣へお暇乞申さなんだ」「ハテ粗相な。身は待つてゐるよう程に。お暇乞申しておじやれ」といへば。兄可右衛門諸共乘物につき。屋敷へこそ入りにける。勝右衛門はお

巻を呼び「ナント逢はせましたが嬉しいか」「イヤ嬉しうござんせぬ」「これ程骨折つて逢はせたに。どうした挨拶ぞ」「されば私が喜んだ吉丸様は小い。あの悴はひとかさも大きな。違ひました」勝右衛門不審をなし「いづれ子を見違よう筈はない。確とそなたの産んだ若殿でないの。さては一杯喰せたかい。内々可右衛門が心底。合點行かず思ふに。此の度御世嗣の詮議を一人して世話をかき。若殿を我が邸へ入れ申したは。彼奴がかくし女の腹に。七歳許の子のあると聞いたが。取替へて己が子を若殿にし屋敷へ入れたに疑ひない。扨は眞の若殿は己れが屋敷で殺したであらう。南無三寶」といへば。お巻は「なう悲しや。若殿を殺されて何とせうぞ」と。取りつき泣きわめけば「あゝ喧しい。たゞさへはつと思ひ氣が逆上つてゐるに。喧しうては思案が出ぬ。左右御臺と親子の觴をさせてはむつかしい。是を妨げう。御臺へ知らせたいが。身が女房は可右衛門が妹なれば。隱さねばならぬ。身が文を遣らう程に。こなた屋敷へ往き。何卒御臺へ渡し給へ」お巻聞き「お前は大阪へ下ると有るが」「されば今迄じつごとで治めて置いたに。今少しになつて爲損なうてはならぬ。たとへ十月が霜月になつても。この埒を明けいでは下らぬぞ」とお巻を同道し行きにける。斯くて御臺きさらぎの前は若殿の手を引き。勝右

衛門が女房もろ共。御佛殿へ來り給へば。安樂坊立出で「あの幼いは誰方でござります」「されば殿樣は信濃でお果てなされ。御世嗣がない處に。お卷といふ妾腹にお子が有るを。可右衛門が詮議しつれて出で。跡目が治まつた。その若殿ぢや」「それはおめでたい。さて申し上げたい事がある。その母殿ぢやと申して。何卒お御臺樣にお目見が致したいと。愚僧を賴まれます。何と仕りませうぞ」「オ、苦しうない對面せう」「然らば玄關へ來てぢや」と呼びに出で「首尾はよいぞ。さてお御臺樣は恪氣深い程に。そなたが殿樣と仲が善かつたかと。お問ひなされたら。仲が惡うて憎まれたと言うたがよいぞ」とつれて入れば。御臺はまづ若殿を奥へ入れ。お卷に逢ひ「そなたは殿の御いとしがりのお卷殿か。嘸仲がよかつたであらう」「イヤ思召とは違ひまして。よい女といふはこちの御臺ぢやと言うて。私が傍へ寄れば突倒し。擲れる事ばかりでござんした」「それはいとしや。ナウお位牌を拜み給へ」と見せ給へば「殿樣は斯樣にならせ給ふか。つね〳〵仰せられしは。其方より外に可愛い者はないと宣ひしものを」と欺けば。御臺聞き「其方は殿と仲が惡かつたと云うて。俺を騙つたの。さもしい心入ぢや。俺が心はさうでない。既に胎内には七月になる子あれども水子の事なれば。其方の若殿を詮議して世

嗣となした。その心な俺を騙し給ふから。對面はせぬ」と腹立て給へば「御道理でござります。あの坊樣の斯樣にいへばよいとある故申しました。私が申したではござんせぬ」勝右衛門が女房申すは「お前が恪氣深い故。仲ようお逢ひなさるゝ爲に。私等が言ひ含めましたでござんす」「扨はさうか恥かしや」お卷は「親子の久離切りましたから。若殿をお前のお子と思召して下さんせ。お暇申します」と歸らんとすれば「これ〳〵俺が逢うたからは。戻しはせぬ。邸に留め置きます。盃をしませう」とあれば。勝右衛門が女房取りに入れば。安樂坊も勝手へ入る。お卷四邊を見まはし「ナウ御臺樣。最前より申し上げたうござんすれども。お内儀其の外の衆がござつた故申さなんだ。勝右衛門より此の文をお前へ進ぜよと有つて。それゆゑ參りし」と文差出せば「俺は殿樣に離れ後家を立てゝゐる。勝右衛門が文とは披けられぬ。そなた披いて見給へ」「心得ました」と披けば「ナニ〳〵若殿に就き樣子あれば。親子のお盃御無用。事に依つて今夜忍入り刺殺し申すなり。この事女房に隱し申すにて候」「これは合點がいかぬ」「さればあの若殿は私が子ではない。何者の悴やら知れませぬ」「扨はさうか。どうぞ密かに勝右衛門に逢ひたい」と宣ふを。安樂坊後に立聽す。御臺振り返り。ちやつと文を懐へ入れ

給へば「見ました〳〵。お御臺樣參る勝右衛門。味でござんす。お内儀に云ふ」といへば引止め「麁相をいふな」と思案し「其方が見た上は賴まねばならぬ。なる程勝右衛門が俺に執心なといふ文を越したにより。密かに逢うて意見をし。盃でもして斷念さうと思ふ。女房に隱さねばならぬ程に。そなた勝右衛門方へ行き。密かに是へ伴れて來て給るまいか」「なる程呑込んだ。伴れて參りませう」と呼びに行けば「坊主を騙し呼びに遣つた」と宣ふ所へ。女房來れば二人ははつと彼所へ忍び入り給ふ。女房は「俺が物蔭で聞いた。日頃堅いこちの男が。お御臺に惚れた。坊主が賴まれ呼びに行く。今に來るであらう。何とせう」と傍を見れば文落ちてある。取上げ見れば。若殿に樣子あり。忍入り殺さう。女房へは隱す。との文なり「これは合點が行かぬ。左右樣子を見よう」と小袖を被きる所へ。勝右衛門被衣を着て忍び來る。安樂坊燗鍋盃持出で「これ忍ばいでも大事ない。酒を持つて來た。何と氣が注いたであらうが。お御臺樣が待つてござらうあやかり者め」「オヽ嬉しい。さて女房が出ぬ樣に賴む」「それは愚僧が後生話をして。聞き草臥らかす。サアはひれ。」と打伴れ入る。所へ可右衛門。侍引きつれ勝右衛門をつけ來り。籬の間より座敷へ忍び入りにける。安樂坊は「これ御臺樣が出てござる。恥

かしがつて。衣かづいてぢや。勝右衛門殿嬉しいか」「されば文を上げました所に。密かに參れとあつて。帽子を下され喜んで參つた。女房には沙汰なしでござります」安樂坊聞き「ホンニ俺は奥へ行き。内儀を咄をし。疲勞かさねばならぬ」と後向けば女房衣とりきつとしてゐれば。肝を潰し逃げ入りける。女房は「これ勝右衛門殿何として御座つた」「されば見附けられたからは有樣にいはう。お御臺樣に惚れた故。其方に隱して忍うだ程に。今宵一夜の事ぢや。赦して其方は歸つてくれ」「イヤそればかりで有るまい。外に樣子があらう云はしやれ。隱さしやつても證據を持つてゐる。此の文に若殿を今宵殺す。女房に隱せとあるはどうした事ぞ」勝右衛門はつと「それは御臺の持つて御座る筈ぢやが」「されば俺が奥より出たれば。御臺が周章て取落し入り給ふ。サア樣子を云はしやれ」勝右衛門思案し「證據を持つていふからは隱さう事もない。それも有樣にいはう。若殿を殺しに來た」「それは何故に」「されば〻を聞け。妾の子を若殿にした時は。その一門が入込うで。役目々々を請取り。後には其方の兄の可右衛門も某も。ありなし者になる。其の時の無念さは如何程であらう。それ故今宵忍び入つて殺し。聞けば可右衛門。外に隱女の腹に。七つ八つになる子が有ると聞いた」「如何にも私もさ

う聞いたが。つひど見た事はない」「されば其の子を取替へて若殿にする。時には其方が兄は殿の親。其方は殿の叔母。俺は其方と配るれば殿と一門。一家の活計ゆゑ思立つたれども。女房ながら其方は日頃仁義立をいふにより。若し止めればと思うて隱した。若殿を殺す」女房聞き「こなたの云はしやるは皆悪ぢやが。眞實いはしやるか」「ハテ何の僞をいはう。一家の榮える事故悪と知つてする」「確とさうか。悪人なればこなたを殺し自害する」と太刀を取らんとするを突仆す。所へ可右衛門障子の裡より走出で。妹を無理に奥へ押入れ「これ勝右衛門殿。最前よりあれにて様子を聞いた。先づ以て某が悴を世に立てうとある段忝い。其のお心入とは存ぜなんだ」「さては御聞きなされたか。いで若殿を殺してのけう」と驅入るを押止めれば「ナゼ止めさつしやる」「さればこなたの其の心入と知らいで。今は後になり。言譯のやうなが。あれは若殿でない。則ち私が隱子の花市と申すのぢや」「さては左様か。シテ若殿は殺されたか」「イヤその吉丸は身が館で今宵侍どもに殺さす筈ぢや」「すればまだ殺しはせぬか。そこらは思案が足りませぬ。侍は渡者なれば。又どの屋敷へ行くまいものでもない。外の屋敷へ行き。斯様々々で若殿を殺し。吾が子を世嗣になしたなど云ふ時は悪い。身が養子に貰はう」「シテ

どうする事ぞ」「ハテ貰うておいて。身が竊に刺殺して除ける」「尤の思案ぢや」「サア若殿を殺さずと。これへ伴れて來いと人遣り給へ」「心得たヤイ侍ども」といへば。隱れるたる侍ども一度に出づれば。右の通りいひつくれば。畏つて邸へ歸り。吉丸を伴れ來れば。勝右衛門請取り「これこの若殿は身が養子にする」と門の内へ入る。所へ女房立出で。可右衛門勝右衛門門の外に出で。侍どもに物云ひゐるを幸ひと。門の錠を卸し「若殿様兩人がお前を殺さうと申す。こなたへ御入りなされ」と奥へ入る。二人は「これは何故門を打つた。開けよ〳〵」女房は「これ男。兄と一緒になり。よう若殿を殺さうとしやつた。天道が誠ゆゑこの方へ請取つた。そなた衆には見せるものがある。それから見給へ」と「花市々々」と呼べば。可右衛門が子。白裝束に淺黄社衍着し。三方に匕首載せ立出づれば。可右衛門は「ヤレ花市をなんとする」「これ父様。こなたの言はしやるには。若殿は瘡疱で俄にお死なされ。御世嗣がなうてお家が治まらぬ程に。そち若殿になり屋敷へ入れ。それでは國が治まるとある故。恐れながら國の爲を思ひ。若殿になり參つた所に。叔母様に様子を聞けば。若殿様は御堅固で唯今お入りなされた。お御臺様へも若殿様へも顔が向けられませぬ故。言譯にこれで腹を切りまする。こな

たが日頃私を可愛い〳〵と言はしやつたが僞りぢや。可愛い私に腹を切らす樣にさつしやつた父樣うらめしい」といへば、可右衛門急いて「ヤイ腹を切るな。妹めそれはなにを爲せをるぞ」「オヽこなた達は惡人なれども。この子は小さうても侍の道を辨へた。俺が勸めて腹を切らす。本望であらう」可右衛門悲しく「ナウ勝右衛門殿。助けて下され。何うせうぞ」勝右衛門氣味よく思へど。其の色見せず「ヤイ女房め。どうで其の子を殺すか」「おヽ殺す」「そんなら張合ぢや。殺さば今殺せ。遲なはつたら驅入つて。その子を助け若殿を殺すぞ」「オヽこりや今殺す。サア腹切りや」といへば。可右衛門は「ハテよしない張合をいはずと。助かる樣にしてたも」といふ中に。花市匕首を腹へ突立て引廻せば。女房其の儘首打落せば。可右衛門は「南無阿彌陀。いで門押破つて。子の敵一人も遁さぬ」と驅出づれば。勝右衛門押へ「ここを破つて入ると。裏門より逃るであらう程に。そなたは侍引具し。裏門より逐出し給へ。身はこれにゐて。出る奴を兩方より引包んで討たう」「出來た〳〵。然らば賴む。某は裏へ廻るぞ」と侍引具し行けば。女房は「よい。これ迄ぢや。其方達に包まれ助からう樣はない。惡人の手にかけうより。若殿樣を殺し自害しお供をする」と吉丸を伴れ出し刺殺さんとす。勝右衛門は

「ヤレ飽相すな待て〳〵」といへども聞入れず。危き所へ。御臺お卷安樂坊かけ出で「これお内儀。勝右衛門は惡心でない。其方の心を疑うて彼の通りぢや。我々三人が合圖ぢや」と門を開けば「オヽ女房賴もしい。出來した〳〵」「私を兄の惡人と一緒に思ひ給ふか。聞えぬ」「オヽゆるせ〳〵。よしない事を言はうより。可右衛門が裏より廻つた。足弱大勢あれば。若殿が心許ない。たばかつて退けう」と若殿へ衣被け。花市が死骸の樣に寢さし置き。花市が死骸を安樂坊に負はせ。其の上へ若殿の衣服を打懸け「可右衛門がこれへ來らば逸散に逃げて行け。若殿と心得侍ども追かけ行かう。時には可右衛門一人は身が心の任意ぢや」とその通りにする所へ。可右衛門裏より入り來れば。勝右衛門は「ヤイ坊主め。若殿を渡さぬか」といへば「イヤ坊主首切らるゝ迄は渡さぬ」と逃行けば。案の如く「あれ侍ども奪取れ」畏つて皆追かけ行く。可右衛門も行かんとすれば「そなたは身が止めてやらぬ」「それは何故ぢや」「ハテ其方は大勢ゆゑ。侍どもを除けん爲よ。これからは意の任ぢや」「さては身と一味にてはないか」「あのうつそりめが。何の惡人と一味せう」「エヽ無念な」といふ處へ。安樂坊侍に追はれ逃戻る。可右衛門悅び飛びかゝり。子を奪取り刺通し。衣除け見れば花市が死骸なり「これはどう

ぢや」勝右衛門笑ひ「わが子を刺通し嬉しいか。眞の若殿樣はこりや見よ」と衣のけ引起し見せれば「エヽ無念な。たばかられた。侍ども一々討取れ」畏つて切結ぶ。勝右衛門は「ヤイ女房。お卷殿を伴れて退け」「心得た」と伴れて退く「コリヤ安樂坊。若殿を負うて退け」「合點ぢや」と負うて逃ぐる。其の身は御臺を伴れて退かんとするを。可右衛門御臺へ斬り附くる「これは」と云うて斬りあふ。處へ弟小七郎駈付け「南無三御臺の傷負はせ給ふ」勝右衛門は「輕傷であらう。傷の詮議する迄もない。お供して一先づお里へ送れ」「畏つた」と御臺をいたはり立退けば。勝右衛門心安しと戰へば。可右衛門かなはじと逃げ去れば「よし〳〵重ねて本望遂げん」と殘りし侍おつ散らし。心靜かに其の場を立退きしを。褒めぬ者こそなかりけり。

第二

敦賀の莊の主。星川藏人。女皐月の前。同く弟主膳もろとも廣椽に出で給ふ。處へ下男彌五兵衛。日傭の人足どもを相手に。庭石を擔ひ來る。藏人御覽じ「ヤイ皆の者。總領如月は都に緣に付いた所に。婿の平太郎は信濃の善光寺へ參り。不慮に相果てられた。それ故後家になつたとある。氣の毒に思ふに。又この妹皐月が。ふら〳〵と煩ふ。日頃植木を好く故。庭を造らせ

氣を慰める事ぢや。この庭師の藤助はまだ來ぬか」「さればまだ見えませぬ」「ムヽそんなら書院先に。取除けたい石がある。皆行て除けてくれ。骨折の代には。皆酒がなるであらう」「みな下されます」「幸ひぢやが。甚う高い程に。酒の代に水を飲まさう。此方へ來い」「それは寒い時分に。下戸で御座ります」と打笑ひ。皆お供して奥へ入る。所へ庭師藤助。間竿持つて來り庭へ入る。所へ主膳鉢に栽ゑし松を持出で「造れば善うなる木ぢや」と矯めて見給ふ。藤助みとれ。間竿にて後より密と身長をさし。我が身長とさし較べ「よい抱頃ぢや」と間竿を主膳の足の間へ指込めば「これは何をする」「私は庭造る間を打ちまする」「それに袴の間へさすか」「お前が御座ります故ぢや。退かしやれませ」「ハテ仔細らしい」と宜ふ所へ。下男彌五兵衛出で「藤助。今日は何時ぢやと思ふ」「四つ過ぎぢや」「われが爲ねば外の者に誂へて呼があく」といへば「イヤ俺はその樣な。やすい庭師ではない。そんなら餘の者を雇ひ給へ」といふ所へ皐月いで給ひ「彌五兵衛何をいふぞ。藤助腹立てずと造りてたも」「私が浮々としてはゐませぬ。庭とさへいへば。大津八丁の旅宿の庭も。同じ事と思うてぢや。石の置き樣。木を一本植ゑるとても。鬼門か金神の方へ枝が一本出ても。其の家の主人へ祟りて煩ふ。この庭

を見れば餘程悪しい所がある故。貴方にお煩ひなさるゝ。私が造直して。藥いらずにお氣合を。ようして見せませうと思うてゐれども。この人の樣に誹されては造られませぬ」「道理ぢや。彌五兵衛詫言をせよ」とあれば。藤助に對ひ「その樣な事は知らなんだ。差出まい程に可い樣に造りてたも」「そんなら何せうと構ふまいぞ」といへば。主膳は「こりや藤助。姉樣の御氣合の快うなる樣にしてくれ」と其の身は奥へ入り給ふ。さて藤助は姫君と妙を立たし。間竿を肩へ載せ。扇を中に持たし「これが鳥居石の形ぢや」と樣々と戯るゝ。彌五兵衛は「これ其方に賴うだ藥はどうぢや」「成程持つて來た」と渡せば姫君は「それは誰が飲むぞ」「お前へ上げます。つかへの妙藥で御座ります」「イヤ俺はこの痞の起つて。煩ふのがよい」「それは何故でござります。されば伯父の遠平殿が。俺と夫婦にならうと言はしやる。それで痞が起つて。氣合が悪いといへば。然らば氣合が直つたら祝言せうと言うてぢや。痞が直れば夫婦にならねばならぬ。あの人は厭ぢや。俺の持つ男は一人見つけておいた。それで氣合を快うする事はならぬ」藤助聞き「やはり藥參りて氣合をようして。伯父には痞があると作病して御座りませ」「ほんにさうぢや。作病さへすればよい。そんなら呑まう」とあれば藥鍋取出し。藤助

藥を煎ずる。皐月は彌五兵衛を傍へ呼び「昨日賴んだ事を藤助に言うてくれたか」「イヤ私は申し難い。お前の直に仰せられませ」と立退けば。藤助お側へ行き「何で御座ります。目細はあれど。口細はない。砂糖がやが參りたいか。麩のやきでござりますか。おつしやりませ」「イヤそんな事ではない。そんなら頓といふ程に。いやと言やんなや」「サア何で御座ります」「されば其方に惚れた」「誰がさう申します」「アノ彌五兵衛が。そなたを念者に持ちたいといふ」「これはなりませぬ。あの顔で若衆か。俺が巾着が重い故してやらうとや。なりませぬなりませぬ」と寄付かねば。彌五兵衛姫に近付き「お前は何とおつしやりました」「恥かしさに其方が惚れたと云うた。どうぞ云うてたも」「それで笑ふことぢや。これ藤助」と呼べば「いやゝの〳〵」と寄付かねば「さうでない」と囁けば「ナニ皐月樣がおれに惚れた。嘘ばかり」と承引せねば。皐月寄添ひ「何を隱さう。其方ならで俺が男に持たぬぞ」「その心底ならば成程女夫になりませう」と契約する處へ。勝右衛門が弟小七郎案内をゑへば藤助見て「あれは俺が家來ぢや。逢ふことはならぬ」と彼處へ隱れ居る。小七郎は如月の前の死骸を戸板に載せ。衣を被せ座敷の内へ入れ申し。都より使の由を申せば。藏人主膳もろとも立出で「聞けば平太郎果て

給ひ如月も後家となりし由。この方より人を上さうと思ふ所に。使とは心許ない。いか樣の事ぞ」「さん候。私は家老勝右衛門が弟。小七郎と申す者にて候。仰せの通り平太郎相果てられ候所に。相家老可右衛門と申す者惡心を起し。如月樣に手を負せ候故。兄勝右衛門。某に申し付けし故。御供申し參る處に。重傷ゆゑかこの三日以前に。遂にお果てなされてござる。御臨終に仰せらるゝは。自ら胎内には。七月の子を妊娠りて死すれば。未來の程も悲しい。星川の家には。先祖彌生の前より傳はつて。善光寺の如來の御影あり。この佛に願をかけ。一七日念佛を申せば。妊娠の女も身二つになるとある程に。死したらば死骸を故郷へ送り。その御佛の前で念佛を申してくれよとの遺言に任せ。面目なけれども。御死骸を入れましてござる」といへば「ナニ娘は死んだか」「姉樣は死なせ給ふか」と皆々歎き給ひける。これを聞き藤助立出で「久しや小七郎。某を見知つたか」「こは平太郎樣か。お前は信濃でお果てなされたと有つて。御骨が上つた。これに御座るは何故でござる」「オヽ合點の行かぬ筈ぢや。常々某善光寺の如來を信じ。毎年參る。當年も參り。通夜申したれば。御佛の告げて宣はく。國へ歸らば劍難に逢ふべし。何方へも身を隱せと。三夜まで御告あり。たゞ歸らぬというては。國が騷ぐ故。死したると

云うて骨を上し。この所へ立越え。この體となつてゐる所に庭を造れとある故。舅の邸とも知らで來た所へ其の方が來つて。樣子を聞けば如月は死んだとある。名告らでは叶はぬ故立出でた。扨は某が劍難に逢ふを。女房が身替に死んだといふものぢや。この上は發心遂げ。跡を弔はう」と歎けば。藏人聞き「扨はこなたが平太郎殿か。如月が妹。これなる皐月を姉と思召して。發心を止まつて下され」といふ所へ。藏人弟遠平とて大惡人。つか〳〵と出で「皐月とは身が夫婦になる。サア兄の老耄返答はどうぢや」平太郎聞き「何がさて某は出家の志ぢや。女房に望みはない」「オヽ否といふと首が飛ぶ。よい合點ぢや」小七郎つつと出で「こりや遠平。たとへ主人平太郎殿は厭と思召しても。皐月樣と是非祝言させ。蒲團を敷き二つ枕を並べ。千秋樂の諧を聞かねばおかぬ」と詰めかくるを。平太郎は「ハテ構ふな」と無理に引つ立て奥へ入り給へば。藏人皐月主膳皆奥へ入り給ふ。遠平は「皆はひつたか。皐月何處へ行た」とおつかけ障子を明くれば。如月の死骸あり。はつと飛退き「ムヽ如月が死骸ぢや。ハテ氣味の惡い」と奥へ行かんとする時。死骸むつくと起き眼を開き「これ伯父樣〳〵」遠平振返り肝を消し「其方は死んだでないか」「いかにも死にましたが。七月の子を持ちごもつて死にました。その腹な

子は死にませぬ故。その子の息を借つて斯樣にものを申す。此方が皐月に心を懸け給ふ。それを思ひ斷つて。平太郎殿と添はして下され。然らば妹の腹を借つて。この子が產みたうござる」「イヤ皐月は身が夫婦になる。腹を借つて子を產め」「それでは此方の子になつて。平太郎殿の子にならぬ」「イヤ皐月を思切る事はならぬ」と死骸を刺通せば「俺は三日以前に死した體。突かれても構はぬ」「ムヽ子が息でいふなら腹を突かう」と突けば「あつとばかりに倒れける

「エヽよしない事に隙を取つた。外へ出ぬ樣に」と門の錠を卸し奧へおつかけ入る。下男彌五兵衛驅出で「これは錠卸しをつた」と側なる透窓を押破り。向ふへ潛りゐる所へ。皐月逃げ出で「これは門が打つてある。何とせう」と宣ふと彌五兵衛は「ここへ御座りませ」と窓よりひん抱へ取つて。門の外へ出す。處へ藏人裸體になり逃出で給ふを。侍追つかけ出で逐はへ。窓の側へ寄るを。彌五兵衛手を取り「それ投げ給へ」「心得た」と投げ給ふ「サアござれ」と。窓より追越し外へ出せば。皐月諸共逃行き給ふ。平太郎驅出で給ふ。侍起上り討ちかくるを。彌五兵衛飛入り侍を斬り。平太郎を窓より外へ出せば。はう/\逃げて退き給ふ。小七郎は遠平と戰ひ傷負ひ。主膳もろとも驅出るを。遠平一々取つて伏せ。側なる大石おつ取り打ちつけん

とするを。彌五兵衛後より。大石を遠平へ押付くれば。おもしとなつて。我と大石に押され下になるを。さん〳〵に打殺し「さて危し。まづ此方へ」と御供申し行きける。彌五兵衛が働きこそは氣味よけれ。こゝに木屋の新右衛門は女房を近附け「こちの借家にゐる藤助は。世帶馴れぬ者さうなと思ひ。商ひ物の木まで賣らするに家賃も木の代金も來さぬ。その上この町の者どもが。夜八ツ時分に女房の顏を見るというて大勢覗く。兎角家賃を損にして宿換へさせう」と借家へ行き「藤助宅にか」とはひれば。女房皐月出で「商ひに參られました」といふ處へ。藤助木を擔ひ歸り宅に入れば「これ藤助宿をかへてたも」「御道理でござります。今日米をとります菱屋へ參りたれば。資本を貸さう程に精出して見よとあつて。銀百匁貸されました。お前の家賃。木の代金も申したれば。なる程濟ませ。お家主に祝ひに酒一升買はせと申されました」「それはめでたい。こちに取つた酒がある。取つて御座れ」女房悅び。德利ぐち取つて來れば「燗を致しませうか」「此方は飲みたうない。どうなりとも勝手に飲めや」「燗すれば木が要る。儉約ぢや冷酒でたべませう」と茶碗で二つ三つ引つかけ「さて算用はどうで御座ります」「オヽ家賃と木の代と合せ五十二匁ある」「心得ました。さてまづ百目借つて參りました

が高い利で。酒並で五割でござります。十ケ月の利を先へ引いて渡すとて。五十匁引かれました」「よいわ。その五十匁請取らう」「されば米の銀が三十匁ある。これを引くとまた三十匁引かれました」「それでは二十匁になる。それなりとおこしや」「されば銀の肝煎が五分一取ると申して十匁引きます。判つく代に五匁引きました」「そんなら五匁か。せう事がない。それおこしや」「されば私が賭雙六を搏ち。その負が八匁負うてゐました。それをおこせと五匁も取られました。今三匁やれば濟みます。お前貸して下されませ」家主腹を立て「人を阿呆にした。酒は取つて飲うで闘るの。左右はない宿を換やれ。その上そなたの女房の顔が變ると云うて。夜人立がする」皐月聞き腹を立つる。藤助聞き「私國を立退いた後から。この女房が來て。添うて三月目にこの子を產みました。合點がいかぬ去る」といへば「それは一興な」と家主はまづ我が內へ伴れて入る。女房歎くを。家主の內儀「ハテ泣かずと言譯し給へ」と顏を見「ナウ怖や變つた」といふ聲に藤助家主驅出づる。處へ勝右衛門は藏人皐月の前に逢ひ。伴ひこの所へ來り「こは平太郎樣か」「されば此の宅に皐月がある」と立入り見れば。その儘如月の姿にて「これ平太郎樣。私は七月の子を妊娠り死しました故。皐月が姿となつて。此方に

添ひ子を產みました。これ迄なり」といふかと思へば。その儘位牌となる「扨は一念が來て子を產んだか」と拜み給ふ處へ。妾お卷。尼となり來り。みな逢ひ給ひ「いざ大阪の新地へ行き。阿彌陀が池に堂を建て。佛事をなさん」と皆打伴れ行き給ふ。

第三

阿彌陀が池に堂を建て。住持出で給ふ所へ。子おろしの婆參り。惡心を懺悔する處へ可右衛門參り。髮切り出家になれば。人々立出で「さて殊勝や」と宣ふ。心をゆるさし若殿を奪はんとするを。小七郎駈出で斬伏せ惡人滅し。本田の家繁昌と。榮え給ふぞめでたけれ。

八文字屋八左衛門新板

浦島年代記

作者 近松門左衛門

（七行八十四丁本）

序詞 珠の宮貝の闕。天上の三光に應じ。そよめく衣繡せる裳。人間の五福を備へ。三萬里の蓬萊指顧の中。凡て兜率に到るが如く。又邯鄲を夢見るに似たりと謠ひし。水府龍宮の靈德御外戚に傳へます。海の幸山の幸うけつぐ君や二十一代。安康天皇のしろしめすオロシヘ國ぞ常世と。榮えける。地そも御卽位の始めより花鳥風月の御宴にそみ。歌舞音樂の御遊樂等閑ならぬ御色好。明暮御藥がちなるに。女御圓の大臣の娘中蒂姫。十五ヶ月の御懷妊御產の氣ましまさず。若し天に背き神に違ふ事ありて。鬼胎妖懷の怪しき誕生あるべきかと。おぼし腦みの御心鬱滯し御足の起居自由ならず。石樟舟の古へも。フシ御身にせまり。手轎を。女孀命婦さし集ひ。殿上の欄よりオクリ押輦。らせて出御あり。地君御冠を脫がせ給ひ官女に仰せ。高御座にするゑさせ御身は引換へ。御立烏帽子召替へ給ふ御有樣。女御を始め列座の公卿。庭上の諸武

士までフシあつと驚くばかりなり。地中にも葵の大臣種房卿笏取直し。詞君御位にありながら烏帽子を召さるゝ條謂れなし。おり位の後は布衣始めとて。其の時烏帽子を召さるゝ故實申すに及ばぬ處。未だ立太子の御沙汰もなく。如何なる叡慮ばし候と謹んで奏せらる。地天皇や御涙ながら朕一天の主として。萬心のまゝなれども任せぬものは病にて。良藥醫術其のかひなくあさましや足立ず。詞五體不具にて位にある事我が日の本に例なし。天照神の照覽も畏ろしく。自ら位を去るぞとよ。いかに中蒂の女御今より朕にかはり。地民安全に治め給へと打萎れ給へば。こは勿體なの詔數ならぬ自ら。御寵愛彌增り忝くも女御と召され。御胤の身に宿らせ給へども人の恨みか位の罰か。十月に餘る今日までも御誕生ましまさず。詞重き我が身の物思ひ御嬰兒樣を產むまでは。生死の程も定まらず。殊更賤しき臣下の娘。御位を瀆さんこと思ひも寄らず。地叡慮を思し替へ給へと姿詞も美しき。娘に似ざる圓の大臣。詞ヤア何を申す中蒂姫。勅諚を背くといひ父を父とも思はぬ言分。御身內裏へ召されぬ以前。大草香臣といふ者妻にくれよと。餘儀なく所望せしかども。大草香づれに添はせて。大臣が身に花咲かぬを合點して詞で蹴飛ばし。天皇へ差上げしは斯樣の時節を狙うての事。地サア〳〵早う御請々々天

皇の胤は懐妊。圓が娘位も氏も憚りなし。コレあつといやヤレ應と言へ如何ぢや〳〵と氣を焦つ。女御は父の直ならぬ意に心を苦めてスヱテさし俯向いて在します。葵の大臣憚らず。詞君は御惱に御心亂れ一腹一種の御弟親王。泊瀬の皇子の御事御失念候や。兄として其の弟を憐むが親の子を愛する道に同じ。御國讓は泊瀬の皇子外に誰か候はんと詞を放つて申さるゝ。大臣居丈高になり。其の泊瀬の皇子はどれ何處に。天下を保つ器量は愚か。不智不德を我と知り。雲井の住居しりこそばゆく。三年前國遠雲介同然の皇子。位に立てんとは葵殿の御思案違ひと。打削ればにつこと笑ひ。泊瀬の皇子を不德と見るこそ不德なれ。御兄弟竝びまし〳〵ては。我が方人の御方よと諂ひ阿る讒臣出で。御兄弟御中不和の基と。末を見開き都を出でさせ給ひたる御賢德。地呉の泰伯の遺風といはるゝ皇子。尋ねもとめて御國を讓らせ給ひなば萬民其の德に化し。御代長久の基ならんと道を正し理を盡す大臣を力。女御も共に泊瀬の皇子へ御位をとフシ詞を。揃へ奏せらる。地天皇龍顏麗しく貞ある后義ある臣。諫をいかで背くべき。泊瀬の皇子を位に立てん急ぎ行方を尋ねよと。新に宣旨下さるれば大臣はあつと冠を下げ。詞縱ば皇子遠き海面世離れたる山林に。隱れ忍び給ふとも武士に命じ尋ねんに。地何條知れぬ事や候べきと。

誠を現す悅喜の顏色圓は引替へ佛頂顏。執權阿閇の郡領諸宗。何がな邪魔とつつと出で。詞葵公には似合はぬ。方圖もない奏聞。いかな武士でも當所もない詮議はならず。只歩いても四五年かゝる日本國中。計りなき人數一人々々引捕へ。泊瀬の皇子は知らぬかと尋ぬるならば。緩りと二十年便々とした長詮議取り置き。地女御を位に卽け奉るが上分別と。嘲る多言耳に悚へぬ葵の大臣の執權。立上廷尉之介鶴國憚らず進み出で。詞ヤア理窟の濟まぬ言分。たとへば君を弑し親を殺す大罪人。逃走り隱るゝとも計りなき人數。當所がない詮議がならぬと。其のむきにして置き召さるゝか。地日月の歩まずして歩むが如く千里萬里も心で歩めば。日本國を駈廻らずとも尋ぬる手段は其の身の器量武門の職。左程不心掛では太刀先の劒味も覺束なし〳〵。泊瀬の皇子の御迎ひ。鶴國仰を蒙らんとフシ恐れ入つてぞ申しける。詞イヤサ鶴國聞き樣が惡い。無用の人を尋ぬる故廻り遠しといふ事。地詮議の筋を御邊に負けうか皇子の迎ひは此の諸宗。詞だまれ〳〵人の願をかち落し。皇子の御迎ひ俄に望む下心此の方合點。味い事させぬ〳〵是非御迎ひは某。地イヤお使は諸宗と互に負けじと言ひ募る。廷尉之介が弟御藏之介鷲國。眞中へ割つて入り。詞此の御使は鶴國殿もならぬ〳〵。諸宗は猶ならぬ。爭ふ迎ひは中から攫む鷲

國。地サア何奴でも邪魔すれば兄貴と違うて短氣者。びくともせば手は見せぬと諸宗が鼻の先。鎹をぬつと突付けて庭上に平伏すれば。我慢無法の諸宗も。驚國が勢ひにフシ押されて詞なかりけり。地天皇葵の大臣を召され。詞武士どもの爭ひも代を思ふゆゑぞかし。互に遺恨も殘さぬ爲。地今度の迎ひは御藏之介皇子歸洛あるやうに。思案をめぐらし此の玉の冠是を帝位のしるしとして。加冠の儀式宜しく調へ計らはれよと入御ならせ給ひける。車の名のみかはらねど片輪車や足曳の。大和の國の宮にます例を。代々に　三重〳〵傳へけり。フシ桃の小路を。櫛笥通引廻したる御所造り。圓の大臣の車寄せ。敷臺寢殿遠侍。當番の近習外樣靑侍輩に至るまで。主の威を借る虎の間の。フシ役所の火鉢に高咄。郡領諸宗が父阿閇の府生諸門。腰は撓めど氣は張弓。出仕に怠り梨子打烏帽子引きしめ。大紋の袖若々と。心は二十齡は七十古來稀なる堅親仁。詞何れも御太儀。七ッの時計は打ち申したが殿はまだお下りないか。ヤァえいと　フシ座に着けば。地乾平馬平群隼人。御老人のお勤め御苦勞。餘寒も强しと火鉢愛想に差寄すればイヤ。詞いや〳〵〳〵。いや御無用。極寒の內でも此の年迄。炬燵の味も存ぜぬ祖父め。火の嫌な證據背に身柱の跡もおりない。十四の時から御前を勤めて五十七年。今日の只今まで。噫一ッ致

さず。今でも未だ八分の弓は彎き申す。口の剛い悍馬でも。一責では乘伏せて綿にする。曲乘でも長馬場でも。若い衆に負けねども。內の婆ぜが乘せぬには地草臥れたと　フシ大口いふも殊勝なり。還御と呼ばはり。地圓の大臣諸宗召連れ。內入り惡しく濟まぬ顏。裝束の腕捲り指貫引上げ。どつかと座を組み思案の體。阿閇の府生手をつかへ。詞當今安康天皇には御寒となり給ひ。親ら御位を退らせ給ふ由。女御の御懷胎も未だ湯やら水やら知れず。春宮の御沙汰もなし。御位は何方へ御評議如何と伺ひける。ェヽ親の思ふ程にもない。娘奴は不孝者。正しく御位を讓らんとの綸言。すは時こそと眉を開く所。今女御と呼ばれても臣下の娘。位を嗣ぐは畏れあり。泊瀨の皇子を太子に立てよといけもせぬ賢女だて。親に鼻明かしたる慾知らずめ。地につくしコハリにくしと怒の面色火の如く。目鼻を一つにナホス顰める顏。フシ火鉢の脚に異らず。地府生默然と聞き居たりしが。詞悖諸宗能く聞け。おのれと女御樣は御同年なれども。心の違は雪と墨。根性がすわらぬゆゑ。七十になる諸門隱居もさせぬ不孝者。ァ姫君は殿の四十二の二つ子。女子なれば家繁昌と俗說に違はず。地御身は御入內后と仰がれ。父君は大納言限りの家筋。大臣に經上り。詞諸人の尊敬榮耀榮華。海を山になされうともまゝな女御樣。元を忘れず謙

り。泊瀬の皇子を御位とは。女儀の心でさて〳〵能くは御意なされた。子たる者の龜鑑おのれが〳〵心の鑑とも思ふべき筈。歪んだ心に引較べ。女御を蔑する佛頂面は 地何事と。叱る我が子は餅の方。異見の口は一ッにて フシ聞かする耳は二人なり。 詞大臣大きに怒り。ヤア廻り遠い老耄の意見時代に合はず。コリヤ郡領。葵の大臣が計ひにて。泊瀬の皇子都へ入らば何をしても跡偏。女御の御産を急ぐより外思案なし。物識の咄に聞き及ぶ。千歳を經る物の生血を取り。妊婦に與ふれば其の儘平産。殊に女でも男になる變生男子の妙術。命長きもの鳥類には鶴海には龜。人倫には仙術を行ふ者。 地當國久米の山中に。仙人ありと昔より言ひならはす。平群聿人は彼の山に入り仙人を尋ね見よ。 詞乾平馬は浦々里々詮議せよ。千歳を經し鶴は黄鶴とて。毛色悉く黄に變じ。代々經る龜は甲に齡を顯す。 地大臣が一生の望み。大事の使はや〳〵急げ畏つたと立つ所を。府生留めて先づ待たれよ兩人。 詞閏を以て正しきとするは妄婦の道とて。君の僻言を知りながら。御尤ずくめは女童も同然。悖にあてし御意見。迂遠くは近道のたとへ。諸門若き時より花を好き草木を植ゆるに。花を早く咲かせん若芽の子を殖さんとて。樣々の肥料を用ひ。培ひ水を過し明暮れ花壇に氣を焦てば。花も焦ちて不具に咲き。子を

殖す事はさておき。親木までせゝりからして根を絶やす。種樹郭橐駝が名言は。草木に限らず人の教。女御の御懐胎まつ其の如く。 地陰陽自然の時到らでは如何なる良藥妙術も。草木の肥料に等しく害とはなるとも。フシ益あるまじ。其の上生ある物を助けてこそ。御産の祈とはなるべきに。何ぞや跡方なき虚言を用ひ物の命を取り給はゞ。誕生は愚か女御の御命まで危く。終には大臣の御運もつきん歎かはし〳〵。老人が一生の諫言御承引下されと。忿りつ泣いつはらはらとフシ忠義に。熱き涙なり。 地大臣癖とせき上げ飛びかゝつて引伏せ。弱腰五ッ六ッ踏み付蹈み付け。我が大望の先を折る囈語に屈せず。隼人は山手平馬は海手。急げ〳〵と追つ立てやり。 詞ヤイ死損ひめ。踏殺すは易けれども。悖諸宗が奉公に免じ命を助くる。重ねて出仕無用身が前へ 地面出しすなと蹶飛ばされ。烏帽子も落ちて亂るゝ白髪は老木の柳。スエテ嫋々と起き上れば。 詞コレサ親仁。此の場の命助くるは。諸宗といふ御子息のお蔭。日頃理窟張る頑意地の病御療治なさるゝお臑いたゞき。腰骨に應へたか。 地御前の執りなし我等に任せ先づ退出と引立つる。腕節しかと取つてがばと突き退け。フシ世を憂し海と。老海老の。腰を助くる腰刀。本フシ杖になして立ち上り。譜代の館も今日限り。 長地何面目に老が身の命一つ名も一つ。ふたた

び出でて三つわぐむ。四つの翁と身退く心の。内こそ 三重へ たぐひなき。 ハルフシ所の名さへ。世に響く。丹後の國與謝の入江の蜑小舟。習はぬ身にもフシ馴れて知る。安康帝の御弟泊瀬の皇子。天の縱せる御容姿書の道にも暗からず。浮世の富貴は浮べる雲と。フシ都を遁れ出で給ひ。大公伯夷の跡を追ひ御身は奴隷の菅蓑や。朝には釣を樂しみ。夕には我が友千鳥 フシ浦隱れてぞ在します。 次第 都を跡に行く船の。都を跡に行く船の。浦山里を水馴棹。ナホス竹の御園の。御行方尋ねて父の懐を。出づるも始め旅始め。本フシ頃は船路の。浪荒き二八の月の顔かたち。綾織姫は十六の 小オクリ ふり〳〵。袖に春風のえ。匂ひも花の御所模樣。見る目に蜑と寳せども それと隱れは。 フシ荒磯の。岸に近付く船の中女房達口々に。 詞 御父葵の臣樣の仰とは言ひながら。泊瀬の皇子樣御迎ひならば。お公家衆か侍衆も歴々あるに。蜑とやらの眞似。船漕ぎ魚釣 地 そして仕舞は如何する事。此の蓑の毛のあられもない腰の廻りのむしや〳〵は。アヽいやらしとフシ笑へば共に袖掩ひ。 詞 ヲヽ、不思議はことわり。 地 泊瀬の皇子樣は御位の望なく。都の月花振捨てて御心直な釣竿に樂しみ。 詞 今の世の賢人と呼ばれ。 地 大體むつかしいお方でない。なまなかお公家衆のお迎ひでは。唐の大和の引事揃へ言負けては取返されず。 詞 御藏之介を連

れ和女往きやとの父の仰せ。 地 かうした姿も鷲國が計ひ。此の上にも思案して。都へ手振で往なぬやうに賴むぞやと宣へば。鷲國頬被り押しのけ。 詞 權の廻らぬ此の船頭でも智惠まん〳〵の海上。當が無うてお供はせぬ。皇子樣が八十計な親仁ではあるまいし。 地 血氣盛りの女房珍しいどう中へ。お姫樣の其の美しい。お顔の莞爾ほや〳〵を見せたらば。いかな泊瀬の山風でも轉りとさせ連れて歸るは定の物。ヤ返るとは船の忌み言。 詞 あれ〳〵さても風のよい釣船。十が九つ皇子樣拙者は彼方にお見知り。皆京者と覺られまいぞ道々聞いた海老釣唄。爰ぢや爰ぢやと苫隱れ。上萬達が張上げて。歌は西國訛節。 歌 えんびやらう〳〵りたなごや。髭長なぜにぜゝはん。もうえどあぐるぞ。もうえびよあぐるぞ。上げての後にかいらうが。もどろがためのえどやろ。どんぼもつゞく。はやもつゞく。 詞 つゞき腹が立つならば親重代の熊手を持つて追ひ拂ひめせ〳〵。おゝそれもんに〳〵。沖中の釣船の眞似をして鐺をびんしやん〳〵とこきあげてめせ〳〵。今の事は戯言。歸ろ戻ろの釣唄も君が歸洛の フシ告げならん。 地 皇子は釣のいと賢く。 詞 優しき都上萬の。何故斯る賤の業訝しさよと宣へば。 地 姫は詞の先取られ。都者とは惡い推。御身こそ都も都雲の上人。何故に海邊のお身寳し是が不思議とありければ。 詞

されば世の人の色を好み酒に心の濁るを知らず。 地我は澄み渡る此の海面の松風の。琴の音に眠を覺し戀も色も知らぬぞとよ。 詞さても堅し。松の琴より三味線の。浮世の色に引かれてこそは。樂みよ。 地誰ぞお前に惚れたなら。とんと其處等を濁らして戀の波をあげたがよし。人がつけざしを望まば鳥渡啜つて飲すが可し。何が故にか妹背事フシお嫌ひぞやとほのめかす。イヤ我とても岩木ならねど。 詞聞けば色に絆されて上たる人も冠はぢき。湯殿の蔭の忍逢ひ見付けられて浴衣で慄ふもありけなり。 地世擧つて皆濁れり衆人皆醉ゐりと。 地屈原が詞潔しと思ふ身が。女の曲つた釣針に懸りはせぬと仰せける。綾織姫莞爾と笑ひ船端敲いてハヽ〳〵ハヽ〳〵〳〵。 詞アヽ堅くろし。女房持つたりや去られぬかそれこそ男の權柄。 地氣に入らずば去つたがよし。親の心の宜い娘は好んでも持たしやんせ。よいも惡いも一概に言はるれば腹が立つ。それこそ眞の偏屈原ぢやとフシ皆々どつと笑ふにぞ。 地京上臈の口には勝たれず漁父が詞も是迄と。棹に御手を掛け給へば。姫君ひらりと乘り移り御手に取付き。 詞包ましやんすな泊瀬の皇子樣。葵の大臣が娘綾織姫と申す者。御兄安康天皇樣には御位を退りさせ給ひ。 地お迎ひに參れと宣旨につき大膳なをのこ子を。釣にかゝるは逆さま釣らるゝが順道。未だ餌の味も。

針の先の細いも太いも知らぬ身の恥を捨てて口說に莞爾とも遊ばさず。女を釣るがお厭なら此の海へとんと身を投げ。鯛や鱶になつても スヱテ釣られにや置かぬと抱付く薫りに御心ときめき。いや釣るといふは鯛や鱶。此の樣な人魚は手捕へが獲物ぞと。ひつたり抱付き締合うてオクリ苦引きへ覆ひ入り給ふ。 地女房達は氣を揉み上げ。 詞さつても手ばしかいお働き。お姫樣に疵付け。 地此の上に都へ行くまいなど御意ならば。跡へも先へも往くまいぞや。 詞何をいやる。あゝ取り組んでしつぽりと一汗の上では。都は愚か天竺までも御座れ〳〵。 地アヽ辛氣。あれ〳〵お船が搖つき出した。見れば目の毒皆おじや〳〵と船底へ。こそ三重へ入りにける。 地爰に同國與謝の郡水の江の浦里に。浦島太郎久壽とて。もとは漁父の業なりしが天性仁愛の心厚く。所の人にも免され刀もさすが筋目よき。妻を迎へて睦じき夫婦の中の小太郎が。誕生日の宮參りまだ若草の懐に產着の紋の縫箔も。萬代祝ふ フシ松と竹。 地與謝の社の下向道。 詞何と女房。常にお目下さるゝ皇子樣へ立寄り。此の悅び申し上げまいか。 地ヤアヤア〳〵濱から大勢わめいて來る。何事ぢや此方寄れと立ち休らへば。浦手の網子數十人聲々に。都からお觸のある大龜を仕てやつた。サア御褒美は望み次第。取落し甲に疵付けなえい〳〵〳〵〳〵と フシ荷ひ來る。

夫婦立寄り能く見れば甲の紋鮮かに。尾は金絲を亂すが如く。耳ある龜の悲しけに粘る涙ぞ不便なる。詞なう浦の衆。是はまさしく千年に及ぶ龜。今日は悴が宮參り。生ひ先を祝ふ爲申し請けゝ助けたし。地侍の身上過分の價は心に任せず。何れも骨も儘まず。酒手程はおませう是非是非所望と言ひければ。ヤア千貫とも思ふもの。酒手でくれい野太い和郎。地邪魔めさるなとてんでに龜を舁き上ぐる。突退け押退け取つて投げ。龜の主は此の太郎。寄つて怪我まくるなと龜にどつかと腰かくる。ソリヤ大騙詐大盜人撲てよ敲けも口ばかり。乾平馬家來引連れどつと來り。詞ヤア糟侍の强請者。忝くも當今の女御御懷胎の御藥。其の龜の生血を取る早々渡せ。地意地張らば親子三人。木の空で涼ますと嚙み付くやうなる大音聲。浦島些ともひるまず。詞助くる程に下されと。禮を以て所望なら料簡して遣りもせう。痩侍と侮り。生血を取る此方へおこせとは法を知らぬ雜言。權威を喰ふ男でなし。騙詐も言はず盜みもせぬ。元是は某が龜。證據は甲に書付あり。文字が讀めずば慥かに聞け。允恭天皇十一年秋七月。水の江の住人浦島庄司是を放つ。これ又左の方の書付。同じく四十二年春三月。浦島太郎久壽是を放つと朱漆の書付。我も以前は漁を業とし。過ぎつる年此の龜を釣得し處に。地甲を見れば親庄司が助くるとの書付。幼

少にて離れし親の手跡。此の龜の我が釣にかゝりしは。殺生をやめよとの父の意見と身にこたへ。竿を折り網を棄て同じく我も書付し。助けたる龜なれば。親の讓りの證文ある慥な持主。天下の裁斷も證文次第。我が物を我放すにぐつとも言人はあるまい。親子も三代助くるも是で三度。今日小太郎是を放すと。甲を取つてはね返せば寄せ來る波に打連れ。二三度見返り嬉しげに フシ藻屑に隱れ沈みけり。地ヤア王命を背く不敵者。遁すな遣らぬと眞中に追つ取り卷く。身一ッならぬ久壽切拔けんと働けども。十方より打つ刀拂ひかねて見えたる所に。泊瀨の皇子苫押上げ。詞年月我にみや仕へ志ある浦島夫婦。地御藏之介あれ助けよ賴むゝと御諚の下。水棹押つ取り駈上り擲り立て撲ち散らし。浦島夫婦を後に圍ひ。詞勅諚ごかしに非道を働く似せ者奴等謝つて歸ればよし。意地張らば片端に潮水くれんと睨め付くれば。ヤア似せ物とは。天子にかはらぬ圓の大臣の新參乾平馬。狼藉者の方人一括めに撲ち殺せ。ヤア圓の蘇のやかましい。我こそ葵の大臣の御內御藏之介鷲國。主君の姫もろとも泊瀨の皇子の御迎ひ船中にまします。浦島夫婦は皇子の御家來同然。地彼奴一人も餘すな太郎と。左右へ別れて薙立て切立て松原さして 三重へ追ひまくる。 フシ乾平馬。取つて返し。泊瀨の皇子を撲ち殺せば龜に劣らぬ

功名と。太股波にたゝかせ ㇷシ御船を目懸け狙ひ寄る。地どつこいやらぬと浦島が妻子を抱きながら。腰だけ海に下り浸る波を踏分け歩みより。こりやさせぬとしがみ付く。ヤア邪魔な女郎めと振放てば又取付き。浦端の蜑に馴れたる女波も藻屑も事ともせず。コハリ引止めんとしやくり引く平馬は京者海は不得手。其所の岩角踏外し〳〵だち〳〵〳〵。次第にさす潮早潮に揉んづ揉まれつ。打つ波の音力聲ナホス命かぎりとせめ合ひしが。地さすが女の腕先の弱る所をずつと引寄せ。龜を助けた返報。水屑になれと深みへどうと打込む波の。果敢なき ㇷシ最期ぞ不便なる。地鷲國浦島遙に見付け駈け來れば。一太刀も合さず潮を蹶立てて逃げ失せたり。妻子に離れ浦島太郎勇む心の力も落ち。波打際にどうと坐しスエテ前後も。分かず歎きしが。詞此の身を惜むも小太郎故。妻子に別れ何存らへん。介錯頼む鷲國殿と刀取る手を地慥と捉へ。止めても止まらず。忝くも泊瀬の皇子。暫し〳〵浦島と。姫君諸共御船を出で給ひ。歎くはことわり ㇷシさりながら。詞我この浦の苫屋住み夫婦が情に慰みしに。地妻は殺され汝は自害。我一人悄々と都へは歸るまじ。命存らへ歸洛の供とはおもはぬかと。宣ふうしろになう浦島殿太郎殿。詞小太郎も我が身も死にはせぬ。地水底を潜り助かりしとあゆみ來るはヤア女房か。是

は是はあぶない加減不思議の命。浦島が助かるは皇子の今の御一言。妻子は放ちし龜の恩。龜の齡を此の子が壽命萬々年と ㇷシ悅ぶ最中。討ち漏されし若黨下部皇子遣らぬと群り蒐る。ヤア鷲國の鷲が羽蟲同然。サア來い〳〵と引寄せ〳〵。六七人左右の脇に呟と引締め。詞浦島は龜を放す。地奴等は圓が泥水喰ふ泥龜ども。今日只今鷲國放すと打ち込む音もすつぽん〳〵すつぽんぽん。日本無雙三つの絶景。天の橋立緣の橋。姫は妹背の成相九世戸。與謝にかゝりし浦島が一夜の御宿内外の濱。滚松風も聲添へて君を。壽く太平樂。玄上御藏が武勇に治る。波も靜に青海波。千代經る年經る萬代の。龜の背に書く筆の跡傳へて。今に知るとかや。

第二

地餘所にのみ見し白雲の高間山。高嶺天に横たはり。刀して削りなす高巒の勢ひ。鑿して穿つ怪巖の形。見れば異山の高根々々を傳ひ來て。此の葛城の半腹にかゝる雲より其の上は。 ㇷシ人跡絶えて道もなし。地かくて阿閇の郡領諸宗。主君の仰も雲をつかむ仙人の住む山もがなと。相傳の家來平群隼人一人召具し。天の香具山吉野山かけてぞ通ふ岩橋の。 ㇷシ葛城山に着きにける。地隼人付き兼ね申し〳〵旦那。詞日は曇りて刻限は知らねども。我が腹も七つさがり。先

に仙人があるやら無いやら當もなき足費し。籠に一宿明日お尋ねなされぬかと。地いふ願は日影より フシ遙の西に傾けり。詞エヽ辻占悪い。此の葛城は一言主の神の靈地。仙術を學ぶ者此の山に入り行へば。忽ち成就日本に山多けれども。心當は此所一つ。ひだるくば木の實でも拾うて喰へ。汝一人は心許なく某斷付けてさへ其の無精。地ごくに立たずと叱られ。詞仙人は木の實を食ずる者此の山に居るならば。一つも殘して置くいまと。地戯れながら打連れて茨萱笹押分け〳〵。木の根を踏まへ葛に取付き這上り。行手の大木松の荒皮押削り。墨黑に書いたる人形見るより諸宗喫驚し。こりや何ぢや。木樵も通はぬ奥山に不思議〳〵と委しく見れば。衣冠束帶の人形。腰より足に大釘を打込み〳〵八萬四千餘種の外道。安康天皇の一身を不具になし。早く帝位を去らしめ給へと。呪の筆跡讀みも終らず大きに驚きヤア。詞此の柳にも緋の袴着たる女の人形。中壽の女御が平產をとどめ給へと讀みも終らず。さては天皇の御足たゝず女御の御產月延びしも此の祟り。地サア仙人は脇へなる天下の大事見付けし。何者が何の意趣と。主從顏を見合せて呆れ。果てたるばかりなり。地諸宗心ならず仙人を尋ぬるも。殺して血を取り女御に參らせ御懷胎の御子を。是非男子にせんとの爲ばかり。其の子を封じられ御產なくては。

何のへんてつもない事。假令五年が七年でも呪ふ奴捕ゆるまで當山は出でまじ。我は彼の岩窟に隱れんず。詞汝は向ふの繁みに忍び聲を相圖に出合へ。ぬかるな。後れな目を地働けと。是も思案の待遠きオクリ道を〳〵別れて入りにける。地瓶には谷蓮一滴の水を納め。鼎には青山數片の雲を直す。曲を得て人見えず。地青かりし梢も今は紅の。秋の景色はフシ面白や。文彌詞我も昔は大草香の臣と呼ばれ。百敷に冠を竝べ袖を列ねし花衣。地ギン今は雲井を落葉衣の袖寒く。風新柳の髮は櫛れども。手にも取られぬつくも髮おどろの髭。都を去つて立歸らぬ。月日もナホスフシ身に積もる。地恨をせめて晴さんと。立寄る后の人形に打つ。釘は蝮槌には石。丁々人我に辛ければ。我亦人に憂きふしの。腹に宿る子は產ませじ。王位を闇黑我も戀慕の闇より迷ふ嬉しや思は晴れたりと躍り上り飛上り。フシ悅び勇み立歸る。地道の向ふ平群隼人すつくと立ち。鍔元寬げ詰めかけたり。はつと驚き立歸る岩蔭。諸宗が鳥居立ち。前後を包まれ行方を包まれ。フシ山姥ならぬ山廻り。地通を失ふ仙人。飛ぶ鳥の翅もがれし如くなり。諸宗怒つて大音上げ。詞王土に住みながら安康天皇を呪咀し。女御の御產を妨ぐるえせ者。地一寸も動かせじと口にはいへど心には。若し雲に乘つては逃げまいかと。眼を配る面魂。詞ヤア左いふ和

殿は阿閉の郡領諸宗な。我こそ大草香の臣がなれの果と。地いふ聲ばかりは彷彿として。憔悴枯稿の木の葉衣。諸宗些とも合點せず。イヤサ仙人に近付は持たないと。太刀捻くつて油斷なく。動かば斬らんと詰めくる。草香の臣どうと坐し。昔にあらぬ我が姿見忘れしは道理。空を翔る翼地を走る獸。戀慕愛執の心あらずや況て我が人心。詞御邊が主人圓の息女。中帯の姫に戀慕し數通の玉章。かきくれて降る涙の雨。積つて床の海となり。地身も浮くばかり焦れしかど。假初の返しもなく媒を得て親大臣に言入れ。願ひ忽ち成就し婚禮の日を待つ嬉しさに。始の辛さも フシ忘られし。地思ひ寄らず安康天皇后に召されんとの勅諚。憎や卑怯や圓の大臣。先約を飜し。中帯姫を天皇に奉る本意なさ無念さ口惜しさ。恨の一太刀天皇をや姫をや。大臣にや思ひ知らせんと。幾度か思ひはやりしを。不運の我が身を顧て人知れず都を立去り。眉輪の翁と名を改め。此の葛城の山深く。仙人の跡を尋ね長生不老を求めしに。姫は女御の位に至り懐胎せしと聞くよりも。昔にかへる戀衣再び。涙絞り兼ね。地天皇夫婦を調伏今日百日滿願。口惜しやおのれらに見付けられ。徒らになさん無念やと。怒る詞の内より諸宗目配せ。隼人心得後より眞二つと切りかくる。太刀影にひらりと外し。隼人をがばと蹈伏せ。詞ヤア愚か愚か五體は枯木念力は。地行力に隨つて增す力を見よと。踏付くる肝のたばねきやつとばかりを最期にて。フシ山路の露と消えてけり。地諸宗すかさずむんずと抱留め。右手の脇腹左手の脇へ。太刀先朱にぐつと指す。うんとのるを抱縮め。詞エヽ凄じい土性骨。己れを害すれば女御御産安穩。天皇の御足立ち。地天下も立つと刺通されて。伸つヽ屈んづ身を悶き。殺さば殺せ思ひ込んだる我が一念。天皇の命を取り。女御の懐妊封じ止むる果を見よ〳〵。ヤア其の頤やめよと割いては刳り拔いては切り。今こそ息は絶えたりと。踏みこかせども些とも動かず立ちすくばり。金輪際より生えぬきて眼も塞がず睨むが如く。詞扨氣味惡い地死に態やと。思へばぞゝがみそゞろ寒け。コハリ忽ち山谷動搖し死骸より赤色の魂顯れ出で。車輪の如く ナホスフシ閃いたり。地諸宗も我を張つて刀を振つても膝顫ひ。歩むとすれば臑がつくり。こけつ轉びつ逃げ出づれば。猶も風荒れ木の葉を震ひ。あはれ草香が露の魂虚空に。轟き 三重へ音に聞く。地丹後の國より飛脚到來し。泊瀬の皇子都入りとの使。飛鳥の宮にて迎へ御初冠との宣旨にて。拜殿に褥を設け御簾几帳立て渡し。天皇の御代りには中帯の女御。堂侍典侍の上臈達。葵の大臣は引入の大臣。理髮給仕の卿相雲客膝突に列座して。フシ今や〳〵と待受けらる。地元來皇

子は古を好み奢を憎む御本性。位に卽くまでは海邊の漁父馬乘物もよしなしと。ごんづ草鞋の旅衣綾織姫御藏之介、浦島太郎が菰包道の荷になる小太郎を。一荷にしたる風呂敷包オクリおしよほ。からけの女房も。フシ田舍おぼえて殊勝なり。地御藏之介鷲國皇子御入りと呼はれども。徒跣足の旅體人々思ひがけもなく。綾織姫心付き、詞是こそそにて渡らせ給へとありければ。地父の大臣を始めとしフシ百官。はつと拜揖ある。地皇子臆せず拜殿に入りたまへば。中蔕の女御の御悅びようぞ〳〵御歸洛。詞御兄天皇御病身。折しも自ら懷妊を幸に。御位を讓らんとの勅諚。御誕生あるまでは胎内は水の泡。圓の大臣が娘などが女御に立つも憚りに。假にも十善の帝位を繼ぐとは天罰も恐ろしく。地樣々辭退し葵の大臣の執奏にて。御迎をまゐらせしに願成就。綾織殿お手柄〳〵。詞御藏之介骨折り。末に見ゆるは聞き及ぶ浦島夫婦か。皇子樣へたんと御奉公。志の程浦人には奇特々々と。地下が下まで隔てなきフシ心詞ぞやんごとなき。地大臣重ねて詞今日良辰御冠奉らんと。地津器唐櫛笥役々とゝのへオクリ御簾に。誘ひ參らせる。地浦島が女房邊を見廻しなう太郎殿。詞爰らでお土產出すまいか。地よかろ〳〵と引きほどく菰包。何方ぞ臺ちよつと借りましよと。色々の魚積竝べ。女御の御前へ目ノ分おめず

憚からず。へゝ〳〵へへゝ〳〵〳〵へ。詞はあお耻しながら皇子樣。始めて御對面。なんぞしをらしいおみやと。地女夫の者が談合致しても都に優る物はなく。未だも國許の新しい魚肴これも鹽物では珍しからず。詞丹後の生鰯上方にも鮓と申してあるけなれど。其の美味さがなんとして。殊に切おうけのある事。少し薄目にはやせば片身で六十人のおかずは覺えが御座んす。是は又内裏方でむらさきとやら申すけな名物の丹後鰯。是も鹽過ぎたと甘鹽と段々あれど。此の度の晴れ御馳走にたんと吟味した證據。まあ一疋燒いて見さしやんせ。脂がじゆう〳〵。其の薫といふ事が伽羅や燻物がいかな〳〵及かぬ。必ず〳〵頰被して上りませ。油斷すりや頤が落ちるぞゑ。ハアゝ田舍者が何やらずは〳〵〳〵と。國自慢言居ると思召しましよが。田舍に京あり女房と住所が同じ事。面々の楊貴妃住めば都。眞に自慢ではなけれど丹後の名所が見せましたい。成相切戸天の橋立。海の中へ一里半ずつと續いた松原。見るに來る殿達が氣を浮かし。和歌の松原三保の松原名所の松原多けれど。此の濕氣のある生えそもない所にむつさりと生え繁つたが忝いとの持囃し。春は鶯夏杜鵑秋は雁。冬は千鳥鷺や鶴や鷗や立つゝ。下りつ沖に釣舟網舟磯には海士が和布刈る鮑捕る。申し鮑の澤山捕れる時には蜑が海の底から兩の手

に持餘り。脇の下に挾み股座に挾めば吸付いて離れぬ。其の股座に挾んだ貝がいふ事で御座んすげな。何が其の中に住馴し皇子樣都の事は思出しもなされねども。只た一ッ事闕は好い女房。あるも〳〵私が樣な浦人汐風に揉まれて髪は赤熊。色は黒んぼ肌は荒和布。其の中へ都にさへ稀な綾織樣。此の美しいお顏で何やら囁いてひつたり抱付かしやんすや否や。とんと吸付いて離れぬ股座の鮑石漆々々。内裏樣御繁昌の吉相目出たや〳〵の。拍子にかゝつてお恥しい長話頤が懶い。皆樣お耳が懶からうがぶ〳〵にしてお茶一ッ。フシお振舞とぞさべりける。地女御を始め上臈達可笑さ怺え給ふ程。迷惑は浦島一人只しる〳〵と心を焦る。簾中よりもしるると皇子玉の冠。禮服召され出御あり。葵の大臣扶持し參らせ。泊瀬の皇子御位を受繼ぎ。雄略天皇と號し奉ると披露あれば。百僚百司はあつと一度に拜舞して。フシ皆萬歲をぞ稱へける。地君は女御にむかはせ給ひ朝覲の御拜あり。詞朕はこれ假の王位。若宮にても姫宮にても。誕生の御子へ位を讓る契約。大臣慥に聞きおかれよ。今御讓を受けたれば兄帝は我が父。女御は卽ち母后。地親子結びの御土器ハル賜らんと。スエテ褥を下り禮儀ある。詞さて感じ入りたる御詞。地さあらば酌には好ある浦島が妻。内侍の代り女官になすぞと宣へば。詞ヤイなう此方

の人。女御樣の御意で忽ち藥鑵になりました。シテ此の口の二ッある金の匙筒でお酌する事か。ムヽ是よりは弦鍋が好い物と。地どつと笑ひも時の御祝儀とり〳〵廻る御土器。既に女御の御つもりと取上げ給ふ折しもあれ。俄に吹來る飛鳥風梢を鳴らし蓼々たり。響に連れて草香の臣が最期の亡魂。一團の火焰となりてナホス舞ひ來り。地御土器に飛入れども、それとは更にッシ見る人なきぞ不思議なる。地目出たう自ら納むるぞと飲干し給ふとひとしく。御目の内は朱を點す如く額に亂るる汗の玉。ほとほり戰慄く御懸み各周章立騷ぎ。君も甚だ驚き給ひ風邪の入りしか酒毒かと。立寄る御手をぢつとしめ。詞エイ飲むといふ程飲みもせぬもの。何の酒毒風邪とは好い見立て戀といふ風氣。此の懷に抱れて寢て。一夜の汗で風をさまして貰ひたいと。地引寄せ〳〵抱きしめ給ふ濫行に君は赤面詞なく。大臣恥ぢしめよも御本性とは見えねども。詞親子堅めの御盃も終らぬに。禽獸に同じき御身持と。聲をあららげ制せらる。ハアをかしい。親子は戀をせぬものと何時の世の掟ぞ。親でも子でも惚れたが病。母親ごかしいやぞやと。地身を打ちもたるるしどけなさ。鷲國こらへず飛上つて引放せば。大臣浦島綾織姫を圍ひ奉り。神主の屋に入御なし申せば。ヤア思ひ人放しは遣らじと駈出で給ふを上臈達引止むれば。詞お

のれ等が法界悋氣と 地 取つて突退け拂ひ退け。戀人返せ君返せと瑞籬玉垣齋垣拜殿。廻廊幣殿神樂殿驅廻り駈戻り隙を見て組留んと狙ひ寄る驚國が。目鼻の間をはた〳〵〳〵。火の出るばかり撲きつけ〳〵。神主に駈込み給へば鬼や大蛇は摑めども。女御は摑まぬ驚國も フシ 跡を慕うて入りにけり。 地 女房一人うろ〳〵うろ〳〵。興を覺して。 詞 さつてもきつしこりや先ア何ぢや。女御樣でない彼りや蒙古樣。剛士の御藏殿を。ぱた〳〵と撲いて投げた手合ひ。些と相撲もなるわいの。先刻にから氣を揉み。峠で飲んだ酒氣がすつきりしやんと醒め果てた。 地 さらば京酒一つ出かけましよとオタリ引請け。〳〵つい〳〵〳〵〳〵五六杯。 詞 ハアヽ色といひ香といひ下地の水から田舍とは違うた。 地 ま一つ抑へて又つい〳〵。自身の間でつういつい。おもしろい 地 天を幕とし地を毛氈花も月もこれ〳〵。手短に盃納めて銚子の口から瓶子かたふけ。 謠 酌めども盡きず飲めどもかはらぬかはらぬ。〳〵。〳〵。 詞 ハヽハこりやどうぢや。ハヽ 地 目が行く目が行くお目が行き候。 詞 ハヽハ 謠 足許は蹣跚〳〵と。弱り伏したる 地 拜殿に。フシ前後正體なかりけり。 地 女房ども〳〵と夫浦島走り出で。 地 ヤ草臥て休んだか起きよ起きよ。女御も御所へ還御なり。大臣も御藏がお供し只今お歸り。其方も御殿へ召連れられんと

てお尋ね。 地 起きよ〳〵と搖つてもこそぐつても。 詞 エヽ熟柿臭い又喰うたな。うたてやな一滴もならぬ奴いつぞの程にか底拔け。 地 目がさめると口叩き寢れば三日も夢介。故鄕と違ひ都は晴れ何處ぞで夫にも恥與へるは必定と。撲つヽ抓つヽ踏んでも蹶ても高鼾。さて料簡もなき次第やとスエテ呆れ果てて立つたりしが。 地 誰が奉納か神前に陵王の樂の面。屈竟の物一度の恥に一代の躾せんと。申し下すも畏れながら一ッは神慮の惠にて。酒の癖をやめさせ給へと寢顏に打被せ。紐堅く引締め神を拜して入りにけり。日影傾く。 地 西風の身に冷々と醉醒心うつとりと。 詞 ヤア是はさて寢てのけた。日が暮れたか眞黑なは。 地 目がろくに覺めぬかと顏を撫でて。 詞 エヽ疎ましや額も頰も剛張つて。撫でても擦つても覺えぬ。 地 悲しや何たる病ぞ洗うて見んと御手洗の水に映る水鏡。なう怖や情なや鬼になつた。浦島殿もとの顏にして欲しい。姫君樣王子樣わしや鬼になりました鬼ぢや〳〵。如何なる神の御罰ぞと立つては歎き居ては泣き。五體を白洲にどうと投げ。身を悶ゆれば髮絡け紐も解けて面落ちたり。 地 なう嬉しや鬼の皮取れたわと取上げ見れば舞樂の面。さては醉の中なぶつて誰が所爲ぞや。 地 是をさへ覺えねば。如何なるあさましき面目を失ひ。夫婦の愛想も盡きつらん。 地 浦島殿にも最う添はれぬ。厭ぬ別

れの端となるべき酒と知り。常々ふつゝと飲むまい盃も手に取らじと。詞思切つても酒の香きけば前後を忘るゝ。詞こはそも如何なる我が性ぞと。スエテ再び歎き悔みしが。地樓門の方より四方に目配り來る人は。丹後にて仇を爲せし乾の平馬。今來るは心得ずと拜殿の椽の下オクリ身を隱し。てぞ窺ひける フシ程なく平馬。地神前をうそ〳〵と覗き廻り。袖より小さき相圖の拍子木打鳴す。數に合せてひいふう瑞籬三四と打てば御供殿。木蔭物蔭一二三人はら〳〵と集り寄る。平馬一所に招き寄せ。詞我遙々丹州へ下り主君の仰の龜をも取らず。剩へ手にとりし皇子さへ討漏し。まんまと今日都へ入り何とも一分立ち難し。去り乍ら仕合直り女御も還御。奏ても燒いても。嚙まれぬ鰐國奴は。大臣が供して鳥居通りをたつた今歸る。跡に殘る骨らしいは浦島一人。地長袖輩皇子を討つは蠅を取るより易い事。方々忍び入つて驅出せ我此處に待受け。一人も餘すまじ。地承ると三人が フシ三方に別れ忍込む。地平馬社壇の扉を開き身を密め隱れ入る。內より扉をさす處を。小暗がりより女房跳出で。どつこいどこへと扉の繫金丁と下せば。內よりゑい〳〵ゑいや聲して。押せども抑へて フシ動かせず。地奧より浦島三人を左右に請け切つて出づれば。詞なう此方の人せくまい〳〵。大將平馬は此の社壇に袋の鼠たゞ俘と。地ヲ

ヲ出來したと三人を三方にぼつ詰め〳〵切伏せて。平馬を討たん其處退けと駈寄れば。暫く〳〵いふ事あり。詞彼奴は當座の敵でなく。御身の爲には妻の敵小太郎が母の敵と。地いへども浦島呑込まず。詞ヲヽ不審尤。始の妻は彼が手にかけ海に沈め。水屑と消えし痛はしさ。地我小太郎を抱き取り。假に妻と化生し此の子に甘露の乳を哺め。今日までは育てしが酒を好む本性に。あらぬ姿を見られしかと。誠を語るも恥しながら。龍の都に八千年經る フシ龜なるぞや。地御身三代に三度の命助かる報恩契は是まで。サア敵討ち給へとさつと開く御寶殿。神通力に捉はれてよろめき〳〵。出づる敵を取つて抑へ目には。名殘の フシ涙ながら。先妻の恨一刀親子恨の二刀三刀四刀刺通し〳〵。地敵を討ちしも御身の力。とてもの事に姿を替へず子を育て。添ひ果てくれよ。放ちは遣らじとスエテ縋り付けば形は消え。あらぬ方より又 フシ顯れ。一度我が名を現はしては此の土にて人間の。交りは叶はず小太郎が子々孫々。壽命は守らんさらばやと。いふ聲々に綾織姫君も驚き出で給ひ。取付けばはつと消え見えつ。隱れつ御手洗の。池の汀に寄るぞと見えし フシ忽ち。龜の形と現じ甲に戴く。三極の金色四方に充ち滿ちたり。龜も悅び含みし潮波の白糸噴出し。流れ漲るナホス瀧の水絕えず 三重蕩たり。蕩々と齡は萬年保つ壽

命の龜のこの〳〵。此の世創り異國は知らず日本に。龍宮城と夫婦の例此の浦島と神代の。彦火々出見の古へと二筋かけて釣の緣。見返るも緣見送るも。諺緣は盡きせぬ寄邊の水に。地入るよと見えし俤は波に。殘して失せにけり。

第三

地大舜天下を棄つるを視る事。敝れたる藁沓を脱ぐが如し。唯父母に隨うて愁を解くとかや。泊瀨の皇子卽位あり雄略天皇と申し奉り。天の工を享けつぎ。四海を撫づる功績に靡き フシのべふす人民や。賢王聖主と仰げども日月に蝕ある如く。御母中帶の女御姪奔不義の御行跡。上下の嘲り御身にせまり。南殿の御格子深く獄屋を建つ可しとの勅によつて。圓の大臣の執權阿閉の郡領諸宗。葵の大臣の御隨身立上廷尉之介鶴國。木工修理の番匠に命じ。樫の柱鐵の貫。七尺四面の獄屋宮殿に取組みしは。スエテ神代も聞かぬ珍事なり。詞鶴國諸宗庭上に畏り。仰を蒙り獄屋はしつらひ候へども。凡そ科ある者は高官下官によらず。官位を削り衣冠を剝ぎ大理の廳に下し。平人同然に禁獄し。罪の輕重を糺すは武士の存する所。不淨穢をも改めらるゝ宮中にいぶせき獄屋。如何なる重罪の人をや籠め置かるべき。古今未曾有の勅諚と詞を揃へ申し

ける。圓の大臣聞きも敢へず。汝等が不審は尤々。我とても其の通り。當御代になり御前へ出るもたまさか。叡慮の程察し難し。葵の大臣は綾織姫の御所緣。我等とは格別御前去らずの御出頭。御内々の詔定めて御存じあるべしと。地仁者を蔑する詞の針少しもおくれず。如何にも稀有の勅諚如何なる事と伺ひしに。神明正統君子國の日本を。畜生國になさんとする惡心の者朕が身近くあり。縲絏にいましめずんば忽ち國のやぶれとなる。此の惡人を退けん爲なり。詞殿上に囚獄をしつらへとの綸言。圓公さへ御存じなき科人愚蒙の某存ずべき樣なし。地定めて當今の御卽位いやがり。底意に謀計ある人はさこそ心なるまじ笑止に存ずる大臣殿と。鸚鵡返しのあて言耳を潰して圓の大臣。詞ハヽア科人知れた〳〵。近年は時ならず大雷鳴。加茂明神の油斷雷の神を入るゝ爲。地殿上の獄屋嬉しや我等がぶす。お庇で向後雷の根切晝中に蚊屋も吊るまいと。底意の惡を座興になし フシ言ひ辷らする油口。廷尉之介えせ笑ひ。詞内外の政に與る圓公の仰とも覺えず。國家を亂す科人玉座近しとの勅諚に何の不審。其の惡人とは大臣の御娘中帶の女御。ヤア女御を科人とは推參奴。我が娘ながら御入内以來主君と仰ぐ中帶の女御。殊に先帝安康の御胤を御懷胎。當今の爲にお母。其の母を獄屋に入れ雄略天皇政道が立つべき

か。うづ蟲の分際慮外を吐かば蹴飛ばさんとかさにかゝつてきめ付くる。イヤ鶴國は不調法。天下の爲には女御でも大臣でも憚らぬが御奉公と。一途に覺えて諂ひ知らず。異國には漢王の后呂太后。辟陽侯に密通し。一族の奢より漢の代の亂となる。其の呂太后からつりを取る女御の身持。御親父の目にかゝらぬは兎唇が醫か。但し親子の相談か。牢へ入れる中帶の女御萬に一つ反れたらば。大臣殿があぶない〳〵。これ忠臣のさすの御子占は違はぬと。親子の惡事丸裸大臣はつたと胸に釘。口は閉ぢて目を剝出し。睨めばひるまず睨みかへす面魂。底氣味惡く氣も後れ牢屋を見るもぞゝがみ立ち。身柱元からじは〳〵〳〵。フシ瘧病見る如くなり。地阿閇の郡領膝立て直し。詞舌長し廷尉之介。我が君は長袖。下郎の雜言聞捨てにし給ふとも此の諸宗は得こらへず。地サア眞平御免と手を突かずば。御所とはいはず討果すと反を打つて詰めかくる。詞ヲヽサ。雜言と聞く耳には雜言金言と聞く耳には金言。汝が親阿閇の府生諸門。主人を見限り隱居せしとな。合點ゆかずば屋敷へ歸つて府生に問へ。ヤア親は親我は我。地慮外の舌の根切下げんとつつと立てば續いて立ち。兩方拔かんとする處。葵の大臣聲をかけ。玉座近し鶴國しされ。諸宗控へと諸卿口々制止の折節。フシ出御なりと。警蹕の聲。兩家の兩

雄畏れて左右に平伏せば。堂上堂下スエテ皆々冠を傾けり。天皇南殿に渡御なり。誠に繪に寫し物語に聞きしは物の數ならず。いぶせき獄屋の形よな。詞さり乍ら唐土の聖代にも。囹圄と名づけて國を治る備とする。されば形は忌はしと雖も。善を勸め惡を懲し心の歪を撓め正す。政道の寶是に優る物あらじ。地いで朝廷を覆し天下愁の張本となる大罪人。只今縛め見すべしと。の綸言。すは身の上と圓の大臣色靑褪め。顫ひ〳〵跡じさり。卿相雲客目引き袖引き笑止々々と見る處に。御裝束を拐り棄て自ら囚獄に入御成つて。內より扉を引立て給へば。はつと驚き百官有司フシ仰天。したるばかりなり。誰かある外より錠を堅めよと御聲の內。大臣ほつと胸開け。綸言是非なし錠下さんとつつと立つを。ア、卒爾千萬と。葵の大臣謹んで涙を浮め。詞普天率土の主として。斯るあさましき御有樣。地漢家本朝に例なし。君は日月獄屋は大の岩戸にて。今日より天下常闇。世界の理非もわかれず。下萬民の歎き哀と思召されずや。詞總じて惡人を縛むるは。罪の形外に顯るゝを以て是を制す。地御身に見えたる罪もなし御心を醧され。牢を出御下されとスエテ詞を盡し奏せらる。いやとよ麿が罪には形なし。心の內の罪なれば麿より外に知る者なし。詞日外飛鳥の宮にて卽位の時。地中帶の女御の御姿見初めしより。あさましや勿體

なや母たる御身に心を懸け。朝政身にしまず思ひに迷ふ戀慕の闇。晴らすに ﾌｼ 晴れやらず。此の惡念の彌増さば己れが母犯せる罪。己れが子犯せる罪。遠曾祖の神制に背き。天下男女の道を紊る僻事とは知れども。 詞 思ひ切られぬは神慮の加護にも外れしか。 地 一天四海の上に立つ身。如何なる邪不義ありても縛むる人はなし。心に心を制する獄屋。 長地 不義不仁の惡人は天子も其の科逃れずと身を苦しむる民の爲。 詞 蠶といへる蟲を見よ。絲を吐き絲を引き其の身を八重に引覆ひ引包み。巣の中にて空しくなり。其の巣を以て億兆の人の肌を暖むる。 地 蠶の蟲すら仁德あり此の獄屋は蠶の巣。蠶の蟲は朕が龜鑑朕は又萬民の龜鑑ぞや。 詞 麿が非道を包まん爲。母女御の御方よりの戀などとよしなき事を言ひほぐさば。 地 麿には不孝の名をとらせ汝等は不忠の臣。命は獄屋の牢腐し。骸は此處に朽つるとも。此の惡念の晴れざる内囚獄を出づる事あらじと。母女御の惡行を。御身に受けし御孝心。皆々退出仕れと牢屋にどうと御座を占め。思し切つたる龍眼に。御涙をはら〳〵と包みかねさせ給ひしは。忝しとも哀れとも思ひ。遣るさへ畏れあり。人々はつと涙にくれ。何と奏せん。胸の戸口も詞の錠もはつたと下す圓の大臣。鬼に瘤を取られし如く寛々として入りければ。始にかはる葵主從 ﾌｼ 打擊みたる

有樣。郡領いきつてコレサ鶴國。 詞 ろくな眼も持たず。結構な忠臣のさすの神子。まだ此の上に見通しだてして。 地 盜賊並に本詰牢を見通すなと瀧口へ出でければ。鶴國無念の顏色。葵の大臣は天皇の御孝心肝にしみ。衣紋にかゝる涙の雨。姿に蓑を被ぬばかり。 オクリ しをれて。こそは入り給ふ。 地 斯くと聞くより綾織姫。姿くづをれ走り出で。こは勿體なの御有樣と。獄屋にひしと縋りつき暫し。泣入り給ひしが。自らが初戀は。遙々君を迎ひ舟。丹後の國の浦の波裏なき御心有難く。 ﾌｼ 思ひ初め。お位の後は誰憚らず。明暮れお側を離れまいぞと樂しみしかひもなく。下々にもある事か御母女御の法界悋氣。夜の大殿は思ひも寄らず晝もお顏を見る事か。同じ御殿にありながら。千里萬里も隔てし心。今日やお側へ今宵やお寢間と待暮したるあけくの果。あさましい是は何事ぞ。高いも低いも女の力は殿御を賴み。我が子に惚れる母親に御孝行も程がある。なんぼ母御の惡名をお身に受けうと遊ばしても。御心の涼しきは天が下にかくれがない。はや〳〵出御ましますか左もなくば自らも。一つ牢屋とばかりにてスエテ口說き立てぞ泣き沈む。 地 天皇は一筋に天地諸神を御拜あり。御母女御の惡心醜し給へと。肝膽碎き御祈誓に。 ﾌｼ 御應へもましまさず。姫は猶しも。亂るゝ心さては君にも捨てられし。 詞 戀の敵は

御母のいたづらもの。地殺されうが刻まれうが存分言はんと走り行く妻戸の蔭。御母女御面色變つて立ち給へば。ハア、〳〵。冷える處に。何時から其處に御座りましたと膝もフシわな顫ひ聲。詞なんぢや母を敵とは。おのれこそ妾が戀の敵よ。子にほれる徒とは。天皇を何時産んだ母とは假の名。男に惚れるは女の情地己れに戀を仕負けうか。サア思ひ切るか切らぬかと。ぢり〳〵と寄り給へば。逃げんにも逃げられず心を控忍て綾織姫。詞エ、聞憎い見苦しい女御様。血を分けねども親子といふ名に恩も有り義理も有る。産み落さねば子ではない惚れたとは厚皮な。地恐ろしや〳〵天魔の業か狂亂か。先帝安康天皇様は御足の養生。七栗の湯へ湯治なされ。お留守の御所なればとて。慥に御連合のあるは定。假令親子でなうてから徒でないか何と不義ではあるまいか。詞ヤア默れ。己れに不義の吟味誰が頼む。地生けて置かば妾が仇。絞殺さんと十二一重の附紐手繰つて駈寄り給へば。彼方へ外し。此方へ潜り。逃ぐるも纖弱き絲櫻。追ふも色ある梅花の顔緋の袴。蹈み綻ばし踏みしだき。廊下渡殿追廻しフシ追ひかくる。天皇あはやと思せども猶御聲を慎み。不祥は見じとフシ御目を塞ぎおはします。地綾織姫は身を遁れんと。欄干ひらりと飛下り給へば續いて飛び。逃ぐる裳裾は左近の御垣

に縺れて惱むを。すかさず寄つて。首に纏へる紐も危し綾織姫。既にかうよと見る處に。廷尉之介鶴國一文字に駈來り。綾織姫を引放し。女御を取つて引つ伏せ大音上げ。詞大悪不義の母女御戀慕の證據は此の鶴國。天皇に御科なし。地誰そ參つて獄屋を出し奉れと呼ばはる聲。はつと聞くより郡領駈付け。綾織姫を左手に捉へ刀を胸に押當て。詞サア鶴國。女御に及向ひ奉らば此の姫を一刀と人質取つて動かさず。鶴國から〳〵と笑ひ。厭はぬ〳〵これ姫君。お命かばへば悪人の女御を逃す。女も男も君の爲世の爲。命を捨つるは臣下の道。帝を大事と思召さば。此處でお命捨てた〳〵。地ヲヽ心得た君が爲。殺さば殺せとびくともせねけなげさ。それでこそ我が主人。サア女御を一ゑぐりとずはと拔いたる氷の刀。天皇御聲高々と。先帝の御子胎内にまします。過ちせば朕先づ縊れ死ぬべきぞ。放せ〳〵と頻りの勅諚。さすがの鶴國思案更に決定せず。腕先狂ふ刀がらりと投げ捨て涙を浮め。詞御身に代へての御孝心。感じ奉るも畏の至りに候へども。二年餘り誕生なきは何しに先帝の御子。血塊龜腹などの病。宮中に置いては後の禍。此の鶴國が預り命は助くる。地君は牢より出御あり。諸人の歎きを晴させ給へと思ひ入りて奏すれば。詞いやとよ汝等が心には。今牢屋に苦しむ此の身を。雄略天皇と見

るゆゑに母女御を憎むぞや。麿が身に於て牢に入るべき非道はなし。母の非道を制せん爲。地親子は一體母に代る此の獄屋。朕が身をすぐに母女御と見よ。母の惡念止まぬ内此の母が獄屋を出で。其の母の亂行彌增さば。不孝の上の不孝ぞと。身をこらす我が心天神地祇も憐みを垂れ給ひ。母善心に立ち返り御產の紐解け世は萬歲と聞くならば。其の時こそ囚獄を出でん。詞鶴國が望みに任せ。預くる母は母ならず麿とおもうて宮仕へよ。諸宗には又綾織姫を預くるぞ。地互の主を取換へて預くる處に心をとめ。等閑なくいたはれと肝にこたゆる詔フシ古今に秀でし賢王なり。二人あつと領掌し。詞コリヤ鶴國。御懷胎の大事の御身屹度預けた。獄屋の御母女御。其の雄略天皇をいたはれとの綸言。魂に忘れなよ。ヤア御邊が講釋に及ばず勅は御母女御。其の雄略天皇をいたはれとの綸言。魂に忘れなよ。ヤア御邊が講釋に及ばず勅諚に違背はない。此方の姫君しかと預かれ。ヲヽ預かつた。地預けたと今迄互の爭ひは。雀の千聲鶴國も。一聲の綸言に別れて。こそは三重〳〵歌春の雁。花をすつれば。燕見に。來るしほらしや合手つばくらも妻ゆゑ焦るに其方は。何と楢の葉の露より薄きお情やナホス地彈きすさみ。祕曲を盡す琴の音の。フシ漏れて隣の牡丹園。地花の主の諸白髮阿閉の府生諸門が。手燭に分くる籬の露。夫婦立ち聞く夜嵐にフシ連れてしらべも途絶えける。詞婆お聞きやれあの爪音は。

隣屋敷立上廷尉之介が奥書院。生れついて堅い侍。常々物讀の聲弓の弦音。竹刀打の音などは聞ゆれど。遊藝とては聞えぬに。地毎日毎夜の琴琵琶。疑ひもなう預りの中蔕の女御を慰のため。奇特な武士ではないかいの。詞あの女御は誰そぬしが主人。葵の大臣と中の惡い此方の旦那の娘。分け隔もなういたはる心底。又一ッには饗應の聲が聞えては。手前に預る綾織姫をも馳走して貰ひたいと。恥入らす心もあらう。地然れば主人の奉公といひ侍の龜鑑。是には似ぬ悖諸宗。詞預りの綾織姫何と樣に當るやら覺束ない。隱居といひ主人に鼻衝いたる此の諸門。地親ながら身を卑下し構はねば構はせず。屋敷は塀一重心は千里萬里の違ひ。鶴國への聞えも面目ない我をさみせん恥かしやと。任せざる世を老のくりごと。詞アヽもうよござるわいの。年寄つた親二人。口先でなりとも小優しうものいへば。堪能すると知りながら。犬猫を飼ふ樣に思ひ居る不孝者。地言うて返る事かいのよしなの氣病。此方の好の花畠夜の間もあだに見捨てんより。いざとて夫婦打連れてオクリ見廻す。花の雨覆ひ宛然雛の殿造り。地手燭に照す色々は。枝々爛々と咲く中にも。詞是なうお婆是は去年の取木にて。ハルフシ名も高き屋に。劣らぬ色をそめい山。此方の花壇は三國一富士や。淺間と花の素顏は。くらぶれど。白き司は此の雛鶴。

二葉の松葉姫松紅。花も春夏を隔てゝ咲くや。清見が關霞が關も開き初め。土地しろ〳〵とみかの原。オクリ分きて。流るゝ布引や落ちねど餘所に響の灘。空の星さへ此の花に愛でて向ふか。北斗紅 地名殘の八十八夜の霜夜は抱て男の袖の内。夕日見返り辰の市。フシ寫し繪たみの天が下。紅白みめを。爭ひて富貴の名とる深見草。見れば心の富貴ぞと フシ花に。齡ものばへけり。地宿かる蝶の夢覺し立騷ぐ葉隱れ。詞なう府生殿。あれ〳〵何やら動めくは。誠に野良猫か野良犬か。地憎い奴めと圍引除け。引ずり出せばこは如何に。嬋妍たる上臈の口に捻込む手綱の端。後手に縛られ千行の涙目もあかず。傾く顏の白牡丹 フシ雨に打たれし如くにて。夫婦はつと目を見合せ惘れて詞もなかりしが。詞ムゝ御面體見知らねど。諸宗が預りし綾織姫よの。隣の鶴國が女御の待遇耳へは入らぬか。義理も情も辨へぬ悴め。地ナウおいとしさまやと老女の手に。ほどく手綱の引結びやう〳〵緩む手を合せ。云はんとすれどせぐり來る涙は聲に先立ちて。スエテわつと平伏し給ひける。地見る目に堪へかねなう府生殿。詞無法者が彼の仕方ではお命が危ない。地どうぞ思案はあるまいかと。いへば姫君顏を上げいつそ死ねば一思ひ。殺さるゝよりつらい事。親御に對し言憎けれど。詞そもある事か自らに心を懸け。焦れ死ぬる

の戀死ぬるのと痴言のたら〳〵。一夜ならずば假寢の情と夜な〳〵閨へ通ひ。いぢりせゝりて夜の目もろくに寢させず。數ならねども葵の大臣が娘。雄略天皇の玉體に添ふ此の身をと。思へば口惜しく種々に惡口せし。其の憎しみとて此の有樣。地慈悲と思ひ夫婦の衆預りの内は此の隱居に。匿へて置いて下されかし。身一生のフシ御恩ぞやと又さめ〳〵と泣き給ふ。詞エゝ人法に背きし悴が噂。聞く耳も穢るゝ。誓文の爲全く敎へず指圖は致さぬ。隣は御家來廷尉之介鶴國。何の垣一重なうお婆。越えかねまいものゝやうにおりや思はるゝなうお婆。無法者が歸らん先。早う越えたらよかりさうなものゝ樣に。おりや思はるゝなうお婆。地お婆〳〵を寄言に顏で敎ゆる目に氣を付け。アゝ忝やと頷づき〳〵小褄引上げ搔挾み。走り寄つても垣は高し。手がかりなし。足も心も越えかねて立さまよひしうろ〳〵顏。詞あれお婆あの松の木の垣打越して。隣へさいた一の枝。天の與への天の浮橋。敎ゆるではなけれど越されさうなものの樣におりや思はるるなうお婆。地お婆〳〵の目づかひは。我が手引ぞと小枝力に取付き。登れば松の節高く木肌は茨踏付くる。足は白雪淡雪のさはらば消えん危なさも。泳へて顏に蜘蛛の巢や。松葉の針が目を突けど。痛さ辛さも思はれずオクリやう〳〵。梢に攀上り。地飛下りんと

せし處に。鶴國が用心に飼置く犬。木の下陰に駈集り猛り呼んで吠えかかれば。嚙殺さるる心地して。命限りと取付く松も。搖るるばかりに身節の顫ひ。危さ怖さ恐しさ ワシたとへん方はなかりけり。地鶴國が妻の輦たゞ事ならじと枕槍提げ走り出で。犬を知邊に梢をきつと見上げ。詞さてこそ〳〵何者なれば不敵千萬。玄上廷尉之介が奥書院。家來の若黨中間まで男氣のない所と。知つて忍ぶが曲者。盗賊ならば世の情命を助け。物をくれて歸さうず。屋敷に大事の預り人。言ひ譯暗ければすぐに其の松に磔。地是を見よと突出す鎗の穂先。詞ナウさういふは鶴國のかもじ輦か。苦しうない自らぢや。ヤア姫君樣か。エヽ御卑怯な。たとへ繩張一重でも隔を越え。預り人の難儀は思召しやられぬか。イヤ〳〵人目を忍び逃ぐるでない。地府生夫婦の深い情早うおりたい。賴む〳〵と急き給へば。ヤア詞猶ならぬならぬ〳〵。先の人に情あれば。又此方に預かる女御樣渡さねば。夫鶴國が義理たたず。時には互の主と主とを引分けて。お預りの勅諚も反古になす。地隣同士の義理よりも上を背く恐れ。夫の武士が立つものかこれ申し。おいとしながら姫御前は辛抱が第一と。教訓すれば。府生聞付け。聲高々と是婆。詞お身年寄つても女は愚痴な。中帶の女御御產の紐さへとくれば。天皇宇より御出なさるる。一

天の君の牢屋の苦患を助け奉れば。此の上の忠義もない外の義理も瓢箪もいらぬ。針程な事も男に知らすによつて喧しい。少々の事は女の心一つで濟したら。すみさうなもののやうにおりや思はるるなうお婆。イヤ〳〵此方も女覺えがある。垣越にも他人へは見せとむない。聞かせとむない事がある。此方も此の陣退いたらばよかりさうなもののやうに。こちや思はるるなう親爺殿。ヲヽ夫もさうぢやなうお婆。地なう親爺殿なうお婆と。ワシ簀戸押開き入りければ。地輦聞き取りアヽさうぢや。我が身ながら氣が狹い。夫にさへ知らせねば何處になりと隱しまし。サア爰へと差向くる肩を踏へてやう〳〵と。ワシハルをりしも庭は。月魄の影しろ〴〵と白壁傳ひ化粧の間にぞ隱しける。地阿閇の郡領諸宗主君大臣家の夜詰を引き。宿所に歸り直に隱居の花畠。牡丹より芍藥より我が戀草の花の紐。解くか解かぬか今宵手詰と獨語。覆の陰を覗いても探してもコリヤどうぢや。詞何處へ失せたまんまと手綱も解いてある。一人手にならぬ事。方人がある合點ぢや。地此の諸宗が拔からうか。なう府生殿母ぢや人親爺殿と。家内に響く大音聲。詞ハテさて何を喧しい。少々の用ならば年寄つた親を起さいでもよい事。地ヲヽ睡たい事やと空とぼけの大欠伸。詞アヽ納め顏見たうない。牡丹畠に縛り置いた。お預の綾織姫何處へ逃

された。假初ながら一大事眞直においやれ〳〵。イヤ綾織姫を預りしとやら。耳には聞けども素より隱居萬事を知らず。地見えぬはお主が油斷。身は知らぬと入らんとすれば引止め。詞此の花壇へは外の者は入り込まぬ。知らぬとはエヽまざ〳〵しい。此の姫が見えねば此の諸宗が。腹を切るも構はぬか。構はぬ〳〵。ムヽ我が子に構はぬからは。其方が今頓死してくたばらうが構はぬぞえ。ヲヽ構ふな此方も構はぬ〳〵。地面々捌きと取付く島なく言放され。ムヽよいよい證據は松の木行き所知れた。踏込で綾織姫を渡さずば其の代りに。女御を此方へ奪取るといひ捨て。棘まじりの合の高垣。ぐわらり〳〵と切破り〳〵。滅多無心に踏廣け。押破つて突つと潜れば。又吠えかゝる犬打切り ㇷシ蹶散らし飛んで入りにけり。詞分別なしの狂人め。彼奴が口にも腕にも負けて居る鶴國ならず。地エヽ笑止千萬と見やる隣家の障子の内。騷ぐ人聲詞諍ひ。火影俄にちらめき出で。切合ひ打合ふ太刀音鍔音。竹椽板椽ぐわつたりぴつしり。ばつと散る血は障子に畫く村紅葉。手負は何れと見る内に諸宗が額口。三寸許り斬込まれ女御を左手に搔込み。鶴國が打つ太刀を受けつ拂ひつ裏手を指して跳出で。切破つたる高垣より牡丹畠の小庭まで。互の切先 ㇷシ雷火を散らして鬪うたり。地母走り出でなう危なやと白刃を潜り女御

をもぎ取り駈入れども。府生は騷がず悠然と烟管長閑に吹く烟。詞おもしろや牡丹花下の睡猫は其の心蝶にあり我は心。 ㇷシ牡丹にありと 地繰返し打吟じ間近く閃く太刀影も。 ㇷシ闇の錦と目もやらず。地女房輦刀ほつこみ鍔元拔きかけ。詞鶴國殿女房が控へた。地引包んで討つて取ると斬りかけんとする處を。詞エヽ小癪な其處退け女。地見苦しい助太刀と叱られて拔きもやらず。心ばかりは鞭うつ馬詞の手綱に控へられ。 ㇷシ進みかねて身をあせる。地諸宗大音上げ。詞エヽ情ない親爺。構はぬといふ我を我に立て。目前我が子の討たるるも見捨つるか。女に劣つた腰拔老爺と。地いへども耳の餘所吹く風。親を賴むは後れたかと聲かけられて諸宗。花壇に躓き瓦破と伏すを。疊みかけて左の肩口膏肓迄ずつぱと斬る。斬られ乍ら投ぐる太刀鶴國が太股。五六寸斬り込まれ膝をついて撓みなく。隙をあらせず花壇の覆追廻し追戻し。血煙飛んで白牡丹皆くれ。なるとぞ三頭〳〵挑みしが ㇷシ素より鶴國。地手利の達者深手の諸宗太刀打ち落され。かつぱと伏すを疊かけ〳〵遂に難なく切殺し。死骸にどうと乘懸り胸に刀を押當つる。なう〳〵鶴國止めの刀今暫くお控へ。地賴み存ずると府生が始めてかくる聲。奥には老母の聲高く。詞アヽ府生殿諸門殿日頃の願。婆が手際でたつた今產ませたと呼ばはる聲。地鶴國夫婦

大きに悅び。なう綾織樣御誕生姫君樣是へ御出でと。呼び〳〵駈寄りさつと明けたる障子の內。老母鉢巻玉襷兩手に眞赤い血に染まりたる左鎌。御子と覺しく小袖に包み抱き出づれば。女御苦しき御有樣姫君　輦　助け出し參らすれば。左の乳の下搔き切られはや御息もたえ〴〵に。さしもの鶴國途方に暮れスエテ呆れて詞はなかりけり。地府生つつ立ち牡丹一枝押折り小脇に挾みつか〳〵と寄り。詞ヤイ玄上廷尉之介主君の敵。眞劍に擬する一枝請取れと。地眞甲をはた〳〵はた。打つて色香も散亂たる牡丹投げ棄て。主君の死骸の前にて本望遂げたりと。餘所には知らぬ涙心スエテ見えて眼も濕みけり。地鶴國一圓心得ず。詞ヤアお預りの女御を害し。我が武士を捨てさする老耄か狂亂か。所存を聞かんサア云へと大きに急いたる顏色。ヲヽ御不審は至極至極。此の仔細知つたる者天地の間我等夫婦只二人。地一生人に語らじと存ぜしに。今日只今死を極めたる此の府生何をか包み申さん。詞主人圓の大臣殿四十一歲の春。北の方御懷姙四十二の二歲子。女子なれば其の家榮え。又男子なれば親に祟り命を失ひ。家を滅すといふ俗說に迷ひ。生まるゝ子が男子ならば日の目も見せず。害するに定まる故。地北の方の物思ひ家來我々の氣遣。女子を生ませ給へと神々の祈誓大願。心を碎く其のかひなく屈竟の男子誕生。ハアッ

と力も落ち果てしに大願祈願の驗にや。アノ女房同時に女子を誕生す。これ神力の與ふる處と。下女乳母にも知らせず。取換へし姫君は彼の中帶の女御元我が娘。我が子となりし郡領諸宗は元主人の子。コレ此の花壇を見られよ。數多の接木取木をして花を咲かするに。譬へば白牡丹の臺に紅牡丹の穗を接ぐに。其の接穗を育てし養ひ親木の白牡丹は咲かず。元の親木の紅牡丹色香をたがはず咲き出づる。地人間の養子と花の接木と同じ事。我は接臺諸宗は接穗。養ひめぐみ育てゝも。眞實の親木の花の色にかはらねば。子といふは名ばかりにて其の儘もとの主人ぞと。一筋に思ひ込みしより上には親子のふるまひ。心に主人と尊めば斯程の惡人ながら。我が手にはかけられぬ。詞幸ひと御邊に討たせ。死骸へ手向くる心ばせの主の敵。地大事の武士の面を草花を以てうつたる無禮。さぞ無念に思されん。町人同然の隱居の身。接穗に心亂れし花物狂ひの老耄めと。思ひ散らして　フシ御免あれ。地なう鶴國殿女御は我が子賤しき娘。もと藪に咲く紫牡丹の素性顯れ。不義獄埒の根性ゆゑ十善天子。親ら獄屋の御苦しみも彼が所爲。詞につくし〳〵折を窺ひ忍び入り。腹を割り御子さへ安全なれば。娘めはずた〳〵と思へども。彼奴を切つては綾織姫を。諸宗が安穩には置くまじとあだに日數を過す所。地思はず今日

姫君を御邊に渡し。娘を我が手へ入る事天の與へかね〴〵夫婦が願成就。詞婆出來した御子は王子か姫宮か。地左鎌の切先御身に怪我はなかつたかと。問詰められて母の親たしなむ涙目に餘り。四十年の女夫の中後にも先にも子といふ者は此の娘一人。産落すより人手にかけ一生親と知らせず。終に我が子と呼ばねども現在親の手にかゝる。詞是も何故胎内の子を取出し。天皇様を獄屋より出し奉り。天下の歎をとゞめんと此の頃夫婦言合せ。娘が命にかへ〴〵の腹の子が。滿足な子でもある事か。地是見給へと小袖開けば。ひさごの大きさ色赤き卵の形各一度にはつとばかり。なう府生殿此の袋子は何の報。思ひ廻せば娘が敵殺す母も亦敵。敵と敵の寄合と諦むれば。可愛うも不便にも悲しくもなけれども。どんな涙が零るゝと轉び。伏して泣沈む。地歎の聲も親と子の今はの肝にや應へけん。女御苦しき目に涙。さてはお二人は産の父様母様かいの。疾に知らせて下されぬ。詞日外飛鳥の宮にて雄略天皇様と親子の儀式。天酌のお盃の時恐ろしげなる老人。影の如く目にちら〳〵と口に入ると覺えしより。地氣も浮かりと夢の様に覺えしが。其のあさましい見苦しき袋子の胎内を出づるや否や。心さらりと。フシ晴やかに霞の。はれたる如くぞや。詞恥しきは綾織様。恐れながら天皇様へ申し譯。獄屋を出御な

る様に。奏聞して給べ鶴國殿輦殿。地ア、思へば此の年月。親とは知らず輿車の供に連れ頭を下させ手を突かせ。何うせい斯うせいと娘の口から不孝の科赦して下され父様のう母様と。本性正しき今はの詞恨みも仇も引きかへて。鶴國夫婦綾織姫共にフシ袖をぞ絞らるゝ。母は女御に縋り寄り。詞扨は今迄の不義放埒心に覺えぬとや。それなれば科でない。不孝でない。アレ府生殿聞いてか憎いとばかり叱らずとも。地せめて息のある内に。可愛やと一言聞かせて死なせて下されと。悔み歎けば齒を喰ひしばり。詞エヽ侍たる身の假初にも。嗜むべきは僞表裏。四十二の二歳子とてなまなかの忠臣だて。主人へ僞り子を取換へて今の悔み。地下女賤の女の懐姙にも産は女の命の境。産前産後の妙藥よ名方よと他人さへ駈廻る。腹を割かれて産落す。其の割く刄物は刀でなく鎌でもなく。我が一言の僞りに燒刄がついたあさましやと。覺えずスエテわつと泣入れば。地いやもう悔んで下さるな言うて返らぬ事ばかり。いつか〴〵産落し乳を上げ愛らしい。顔を見んものと。待焦れしもフシ仇事か。地せめて目鼻ばかりでも人の形あるならば。何ほう嬉しかるべきにいとしや父様母様。嘸悲しかろ口惜しかろとせきあげ〴〵涙を絞り氣を揉上げ。血顙ひ頻りに息弱り今一生の名殘の曉。暗む命の燈火はフシ消えて果敢なく

なりにけり。 地老母是はと取付くを府生引退け。 詞ヤア婆忘れしか日頃いひしは爰の事。 地ム
ム合點と夫婦立寄り。刺違へんとずばと拔いたる刀の柄。鶴國あわて駈寄つて刀もぎ取りがら
りと投げ。 詞ム、心底推量至極せりさりながら御誕生までと勅命にて預りし女御を殺され。其
の身夫婦も自害せしと。侍の生頬下げてなんと奏聞なるべきぞ。 地御邊も亦武士の情。有無の
宣旨下るまで我に命を預けよといひければ。 詞ム、尤も〳〵聞屆けた。サア鶴國。 地寄つて
縄かけられよと夫婦一所に手を廻す。 詞イヤ〳〵命を預かるまでの事忠といひ勇といひ。義あ
る諸門夫婦縄のかけやう知らぬ〳〵。ホ、ウ愚なり廷尉之介。娘ながら女御の命を取つたる科
人。縄をかけねば此の場で自害狼狽へたるかと睨め付くる。ハ、アさうぢや。あやまつたと。
地懐中の用意の縄夫婦が夫婦搦むる縄。かゝるもかくるも弓取の。義理の縄に搦められ詞はなく
て泣き沈む。見捨てゝ立つも立場なき鶴國夫婦が思はぬ歎。卵生の御子を綾織姫に抱かせて泣
く泣く。別れ立ち出づる。名殘の袖を呼返し命助けの御慈悲は。却つて老の身の。仇なりといふ聲
弱る吹き弱る嵐に咽ぶ腰折松。幾霜雪は凌げども只一時の涙の雨に枯れて。かひなき花畠背ま
で愛でし牡丹花も 曉 花の名をかへて。憂き身が上の朝顔と日影。待つ間ぞあはれなる。

第四

地阿門夫婦が忠節叡感の餘り。雄略天皇獄屋より出御あり賞罰だゞしく。府生諸門舊職に立ち
返れば。圓が惡逆一身に逼り。帝都を逃失せ再び澄める雲井の空。昨日と移り今日も暮れあし
たの原の御狩の御遊。嶺には鹿垣谷には列卒縄。狩人の聲鉦太鼓。太平の世に豫て フシ武備を
敎ゆるいさをしなり。御痛はしや。先帝安康天皇。御足の爲の御湯治も。廻り兼ねたる足弱車。
小石笹原轟かす列卒の鼓を。 フシ跡になして引惱む。 地一筋細き岨傳ひ仕丁ども詞を揃へ。 詞
今日の御遊は當今樣より。御徒然を慰みの御狩なるに。諸官人の供奉もなく狩屋を忍び出で給
ひ。人倫絶えし深山の奥何故の御行駕。叡慮如何と奏すれば。 地安康涙に フシ暮れさせ給ひ。
さればとよ。汝等も知る如く。去りし頃中帝の女御敢なき最期の折から。取上げし麿が胤あさ
ましき袋子とて。 詞大内へも入れず此の葛城山に棄てたりとや。縱へ鬼畜の形にもせよ。血を
わけし恩愛子ゆゑの闇に引かれ來る。 地せめては棄てし跡なりとも見まほしく。今日の狩場を
此の山と望みしも親心。棄てたる處は何處ぞやと問ひ給へばさん候。 詞棄て參らせしは此の谷な
りと答ゆれば。 地さては日數經りしゆゑ。畜類鳥類の餌ともなりしか不便やと。猶御心も亂

る〻絲のはら〳〵と フシ御落。涙ぞ道理なる。 コハリ時に山風颯と吹落ち梢木の間をさら〳〵さら。散敷く紅葉捲立て〳〵。赤色一團の玉の袋子。谷を降りにころ〳〵〳〵。嵐に誘はれ木の葉に包まれ現れ出で。袋に風を入る〻が如く。ふは〳〵ひやう〳〵ふは〳〵〳〵。見るま程なく二嵩餘りになりナホスたるは。 フシ怪しくも亦凄まじし。 地安康いぶせく思せども猶恩愛の捨難く。 詞あれ見よ未だ生あればこそ玉に呼吸の働あり。仕丁參つて袋を開けと宣へば。アイとは 地いへど恐ろしく。其の方往け。我往けと先へは進まず尻込し。狙ひ喰ひの矢先に漏れて。爰に落來る猪荒熊。谷を下りに一文字。駈くる拍子行く拍子。牡鹿の角に袋を引つ懸け。ぐわらりと裂けば此の世の風を五體にうけ。ぐつと延びたる男子の姿髪左右へ亂れ散り。踏張る足は鳥居の柱。總身は朱塗。陰莖まで フシ唐辛とも謂つべし。 地各あつと驚く處に。岩を飛び越え木の根を跳越え。駈來る荒熊むんずと摑み。 詞七八間どうと投ぐれば起直り。只一裂と飛かゝる。脱けつ潜りつがばと踏退け。枯木を引折り一挫ぎと打ちかくれば。 コハリ熊は手を伸べ爪を立て。梢にしつかと搦付き引寄すれば引戻し。互に引張る力足岩を踏缺き小石を蹴立て。ぐわら〳〵ざら〳〵どう〳〵〳〵。谷を吹捲くナホス土煙。仕丁ども心は空還御々々と勸むれ

ども。玉體騒がず暫し〳〵と宣へば。 地さすが捨てても歸られず。怖いは十分見たいは半分。 詞サア鬼子と熊との棒捻ぢや。前代未聞たつた今。 地今ぢや フシ今ぢやと顫ひ聲。谷には異形のをめく聲。右手へ捻ぢれば左手へ捻ぢ。爭ふ枯木きり〳〵〳〵。中よりきり〻と捻切り捨て。 詞四手搦みにしつかと組みしめ。 地捩つつ隙しつ相撲の手合。熊の叉股へ片足かけ。どうと引伏せ乘懸れば。四足を張つて跳返し上になり下になり。ぐるり〳〵ぐる〳〵〳〵と縺れしは。赤と黒絲なひまぜの。大綱縷たる如くなり。 地さしもの猛獣弱りたゞよふ。月の輪うんと蹈付け踏付け。四足を取つてぐいと引抜き。體を差上げ御座を目がけ投付くる。 地供奉のしもべ御車捨て四方へぱつと逃散れば。玉體に飛びかゝり。取つて引伏せ踏付けしは。 フシ勿體なくも痛はし。 地安康御聲絶え〴〵に。 詞如何なる惡緣惡念にて怖ろしき出生ながら。我が子と思へばいとほしく。連れ歸らんと思ひしに。 地親に敵たふ天罰神罰。外道變化の所爲ならずば善心に立返れと。苦しき中にも子を思ふ。スエテ御涙せきあへず。鬼子破鐘の樣なる大音聲から〳〵と笑ひ。 詞ヤア安康の鮟鱇面。我こそ先年中帯の女御に心を懸けし前の名は大草香。仙術外道を行ひ。眉輪の翁といひし者。戀慕の恨に女御の腹を封じ。躄にしたるも我が爲す業。本望遂げし

と思ひしに又候や勅諚とて。諸宗が又に罹りし最期の一念。女御が胎内の子の體を藉り。再び報う恨みの出生。眉輪の翁が名をかたどり。我が名も直に眉輪王。汝を始め雄略天皇。日本の人民摑み殺し神道の根を絶し。異國の儒道佛道も悉く打破り。三國共に魔界となさん手始め。地 汝が首第六天の犧牲と。曳やつと捻切り フシ敢なき崩御ぞ是非もなき。地 仕丁の知らせに鶴國鷲國。浦島太郎一散に駈來り。尊骸を見るより。はつと拔きつれ切りかゝる鷲國押へて。詞 犬狗にもあれ。小悴一人三人かゝるは大人氣なし。摘み殺してくれんずと。飛んで蒐れば眉輪王引外し。弱腰摑んで目より高く。くる〳〵振廻し。手毬の如くうち付けたり。鶴國隙さず打つ太刀。きりりと廻りがばと蹴落し。首筋摑んで跳反せば。二三遍宙にて反りどうと落ち。つつと入て又打つ太刀。ひらりと身をかへ太郎を谷へ蹴落す間に。鶴國鷲國左右の足をしつかと取つてさし上ぐれば。兩手に二人が天邊押へ。ぐつ〳〵ぐつと押し付けられ。體は土へにえ込むばかり。岸を傳うて駈付くる浦島。二人が上に取つて打付け。地 三人重ねし背骨の上 フシ地蹈鞴踏んで立つたりけり。地 雄略天皇弓と矢番ひ眉輪王が眞直中。目的たがはずひやうど放せば發矢と當る。神力擁護の矢先に苦しみ。蹌踉く處を三人隙さず起上り。三刀六刀。九刀や九重の。

朝敵外道も御退治あり。御弓矢の威德を仰ぎさてこそ。雄略天皇と君が。名高き 三重

浦島太郎入部の纜

舟歌 亂れ小柳亂れそ柳ナ。ハルギン共に心も亂るゝにそもじ。戀にはのエイソリヤしな。ゆきて。エィ〳〵よしな。のゑい〳〵おれゑ。濱千鳥が寄せ來る。寄せ來る〳〵小浪に搖られて揉まれてちどろもどろ。たとろもん。ちりはになりてきゝなくようとり。よなくまいかまたのゑいよほん。ほゝほん〳〵とおり〳〵はん〳〵ゑいゝ〳〵ナホスアゝゑいけいの フシ海面を。眺めにあかぬ。浦島は。入部の船の蘭の梶故郷へ歸る唐衣。錦の袂綾の幕。引汐時に誘はれて。スエテ餘所に難波の三つの濱勇み。出づるぞ比ひなき實に世の中の。言の葉に ホオクリ浮いつ。沈みは七度の八つ起にして打出の濱。夜釣の船の浮沈み是や詞の種となる。浪のうね〳〵生茂る。藤江の里の朝風に。燒くや藻汐の阿古の浦。烟は空に フシ横折れて。風に宿かる印南野の。尾花かたしき女郎花逢ふ夜の。床に敷波のせ。きをもあとに飾磨路や。徒歩路せねども。 フシ眺むれば。白波そむる夕づく日。行きかふ舟の。きぬ。ぐ〳〵を寄せて縫ふてふ播磨潟。須磨も。明石もうらうらの逢瀬わびしき戀の濱。見渡す内に。漕ぎつれて。 フシはや備前地の影うつす。袖は浮